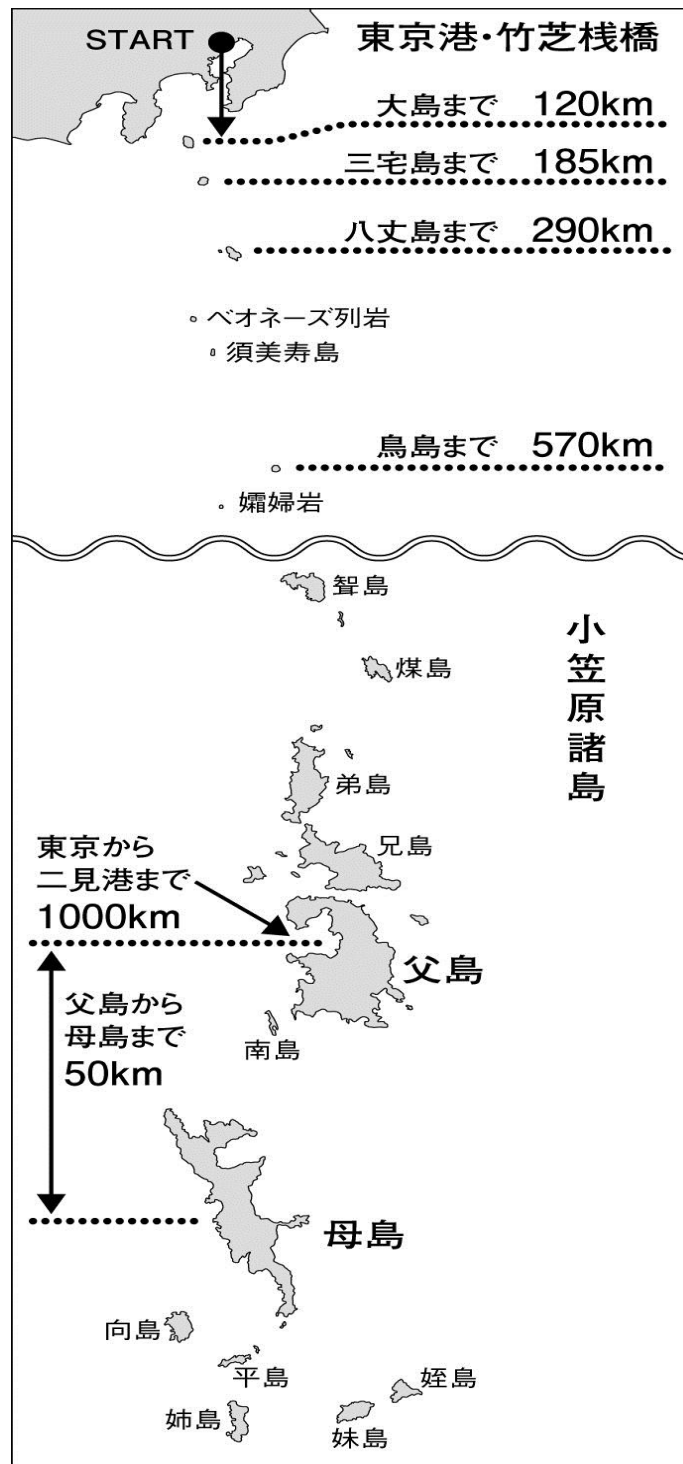


創刊号
特集「JIBSN 小笠原リトリート 2012」



おがさわら丸航路略図（小笠原海運ホームページより作成）

JIBSN レポートの創刊によせて

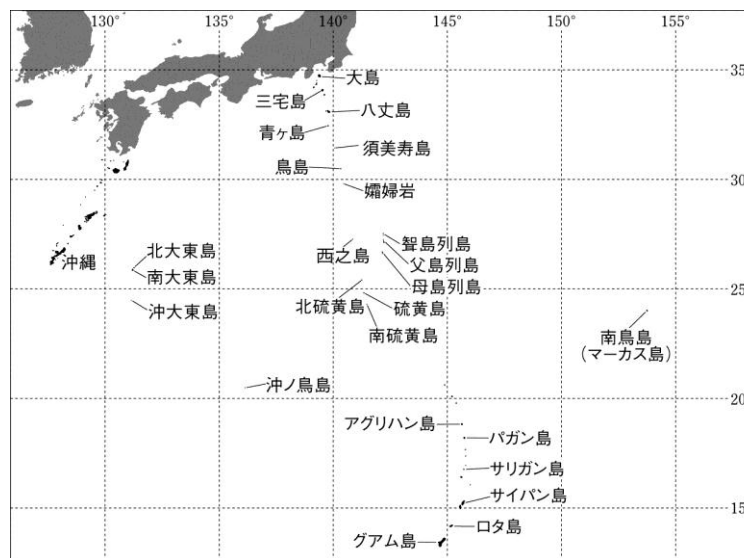
境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) が 2011 年 11 月に設立され、参加組織を中心に活動が始まりました。それに伴い、設立までは北大グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」のオンラインレポート「ライブ・イン・ボーダースタディーズ」のシリーズとして刊行してきた一連の報告を JIBSN の場で発信できないかと考えました。このレポートは、JIBSN が主催・共催した会議や活動成果をみなさまのもとにお届けする媒体となります。

創刊号の特集として、2012 年 2 月に JIBSN が実施した小笠原会議についてまとめました。小笠原・父島までは東京・竹芝からおがさわら丸で 25 時間半かかります。根室、与那国、竹富、福岡、北海道の自治体など実務者及び研究者から構成された 20 名の一行は、父島到着後さらに 2 時間かけて母島にわたり、視察とミーティングをこなした後、再び父島に戻り、会議を開催しました。本特集には前半で会議内容と討論を、後半で参加者のレポートを収録してあります。境界自治体参加者の報告をどうぞお楽しみください。(全行程スケジュールは 43 頁に収録してあります)。

今回の会議は、小笠原から学ぶと同時に小笠原の方々に私たちのもつ境界地域の知見を伝えることが主目的でしたが、同時に往復の長旅、道中の相部屋といった「合宿生活」は発足まもない JIBSN のコアメンバーの結束力を高めました。竹芝到着後は、都内に出張中の森下一男村長の出迎えを受け、リトリートに参加したメンバーを交えた総括会議も行われました。湯村義夫・東京連絡事務所室長を始めとした小笠原村の方々、すさまじく濃密なスケジュールの陣頭指揮にたった山上博信・日本島嶼学会理事に改めてこの場でお礼を申し上げます。

また本リトリートには根室などからの一般参加者に加え、ジャーナリストもこの機会を利用して小笠原の取材などを行いました。北大グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」との協働による、HBC フレックス制作の DVD「知られざる国境の島・小笠原」もまもなくもプロデュースされます。

(副代表幹事 岩下明裕)





JIBSN レポートの創刊によせて		2 頁
境界地域研究ネットワーク JAPAN 小笠原会議プログラム		4 頁
境界地域研究ネットワーク JAPAN 小笠原会議 ※資料（「小笠原村の医療」平成 23 年度版より）		5 頁
小笠原会議リトリート 2012（全行程スケジュール）		43 頁
[ジャーナリストの目]		
動物が人間を動かしていた時代	本間 浩昭	44 頁
[リトリートの現場から]		
ところ変われば・・・（沖縄と小笠原の植物の比較雑感）	小嶺 長典	62 頁
小笠原訪ねて三千キロ・・・	小濱 啓由	65 頁
境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）小笠原会議に参加して	織田 敏史	67 頁
境界地域研究ネットワーク「JIBSN、小笠原で会議します」	高田 喜博	68 頁
小笠原への航海	新井 直樹	70 頁
小笠原リトリート：「南方領土」の影を求めて	黒岩 幸子	72 頁
小笠原初体験記	木村 崇	76 頁
2012 年における海洋政策：小笠原会議で考えたこと	川久保文紀	80 頁
[特別寄稿]		
小笠原は美しい	小林 邦弘	82 頁



境界地域研究ネットワーク JAPAN 小笠原会議
JAPAN INTERNATIONAL BORDER STUDIES NETWORK (JIBSN)

ープログラムー

日 時 : 平成24年2月14日(土) 17:00~20:00

場 所 : 小笠原村地域福祉センター 2階 会議室

- 16:45 開場・受付開始
- 17:00 開会 司会 : 日本島嶼学会 山上博信
あいさつ 小笠原副村長 石田和彦
- 17:05 =JIBSNの活動と展望=
岩下明裕 (北海道大学スラブ研究センター)
- 17:15 =国境地域における取組み=
小嶺長典 (与那国町)
小濱啓由 (竹富町)
織田敏史 (根室市)
高田喜博 (北海道国際交流・協力総合センター)
新井直樹 (福岡アジア都市研究所)
コメント
川久保文紀 (中央学院大学)
木村崇 (京都大)
黒岩幸子 (岩手県立大)
本間浩昭 (毎日新聞・根室) ほか
- 18:30 質疑応答
- 18:40 =日本の南方域における医療=
樋口博 (小笠原村医療課長)
- 19:00 質疑応答 総合討論

*当日は時間の都合により、プログラムの順番に一部、変更がなされています。



境界地域研究ネットワーク JAPAN 小笠原会議

(石田和彦) みなさん、こんばんは。本来ならば村長がこの場に来て、皆さんにご挨拶すべきところですが、内地に出張しており不在ですので、私が村長に代わりましてご挨拶させていただきます。

小笠原に限らず、島嶼が抱えているさまざまな課題だとか、国境の島として抱えている課題、それから今後の対策等々につきましては、小笠原村の森下村長は詳しくつかんでいると思いますが、ぜひそれらの課題だとか問題点について、皆様の方から聞きたいこと等について、この会議の中で議論を深め、引き出していただければと思います。

この小笠原というのは、皆さんもご承知の通り、昨年6月に世界自然遺産に登録されました。この小笠原が持っている大自然、この自然が世界的に認められたということで、私はその当日、パリのUNESCO本部の方で、確定し承認されたとき現場にいました。世界中の人たち、各国の代表の方たちが集まる中で、スタンディングオベーションで握手を求められ、コングラチュレーションというお祝いの言葉を沢山いただきました。

こうしてみると、小笠原というこんなにちっぽけな、本土から1000キロも離れたこの太平洋の真ん中に浮かぶ小さな島が、世界的に認められたということで、本当に胸が熱くなりました。しかし今ここでこれから皆さんがご討議されるように、1000キロ離れた太平洋の真ん中にある島ですけれども、やはり何を隠そう国境の島なんです。日本全部が四方を海に囲まれた島国ということで、すべて国境に接していると言っても過言ではないと思います。

この小笠原が洋上に浮かんでいる、このことが世界的にも、太平洋上の中で排他的経済水域。日本が持っている経済活動のできる水域の約30%という、非常に大きく広大な排他的経済水域をこの小笠原は持っています。ご多分に漏れず、レアメタルだとか、それから過去にはこの島の近海で宝石にもなるサンゴがたくさん捕れたということがありまして、この島の漁業協同組合が漁業権を持っているんですが、つい最近でも中国の底引き網漁船がこの近海に来て操業していました。たぶんサンゴ漁だろうというふうに思いますけれども、現在この島ではサンゴ漁はやっておりません、捕り尽くした、もしくはなくなった、それとも捕りにくくなったのかもしれませんが、今、サンゴ漁はやっていません。しかし過去には台湾の漁船がこの近海に来て、この島の財産であるサンゴを捕ろうと底引き漁を行ったという事実があります。

またレアメタルもそうですね。レアメタルについては様々な国の方々もかなり触手を伸ばしてきているようで、この島の近海にあると思われる、レアメタルにつきましても調査船などを送り込んでいるという話を聞いております。

大きな可能性を秘めている広大な排他的経済水域を持っている割には、この島の人々は、過去の長い歴史もいろいろあるんでしょうけれども、新しくこの島に来た人達をはじめとして、世界自然遺産ののんびりと緩やかに時の流れるこの島をこよなく愛しています。国境の島という緊迫感というんですか、こういった緊迫感はあまり持っていないように私には感じられます。いいこ



となのか悪いことなのか、そこは今後検討していかなくてはならないと思いますが、国境の島の自覚を持っていく必要はあるかと思えます。

本当に目の前に朝鮮半島が見える対馬だとか、北方領土だとか、いろいろと緊迫した情勢を持っている国境の島々がある中で、非常に緩やかな時の流れる、のんびりとした世界自然遺産の島というイメージがこの小笠原にはあるんですが、つい最近も一昨年ぐらい前ですか、台湾漁船の乗組員が病気だったか、けがをしたかだったかで、この島に救いを求めて来ました。そして内地の方の病院に自衛隊の飛行機を使って搬送したという事例がありました。そのときは本当に上陸する船員たちに対しても、検疫、それから税関職員の立ち会い、こういったことがありました。やっぱり国境の島なんだという実感がありましたが、普段はあまりそういう実感がありません。ぜひこの会議の中で、さまざまな課題を討議しながら、意見を出し合いながら、この島の国境の島という認識を深めていけたらというふうに私は思います。

そして、こういった会議がそれぞれの地域で開催され、そして引き継ぎをされて、国境の島の持っている課題を話し合えるチャンスが継続するといいのかなと思います。

この「境界地域研究ネットワークJAPAN小笠原会議」、この会議の前身である「国境フォーラム」は、小笠原諸島の返還40周年記念のときに、ここで第2回目の会議が開かれたという、私にとりましても記憶に新しいところであり、身近に感じているところでございます。そういったこともありまして、少なからず国境意識を持ち合わせている我々が、ぜひ連携を取りながら、皆さんと一体となってこの課題を討議し認識を深めていけたらと思います。これからもどうぞよろしくをお願いします。

そして今日の会議が成功裏に終わる事を心から祈念しまして、開会に当たってのあいさつとさせていただきます。よろしくお願いします。(拍手)

(山上博信) 副村長、どうもありがとうございました。それでは引き続きまして、当方の岩下明裕、北大スラブ研究センター教授から、「JIBSNの活動と展望」と題しまして報告をお願いします。

(岩下明裕) 北海道大学スラブ研究センターの岩下です。もう1つ、北海道大学グローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」、つまり、ボーダーを研究する拠点をつくるプログラムの代表をしております。ボーダーは、一般に国境とか境界とかいった日本語をあてますが、研究者だけではなく、実務家、特に境界地域、Borderlandの実務に関わる方々と一緒に何かをやるネットワークをつくらうと考えて、境界地域研究ネットワーク JAPAN、略称JIBSNを設立しました。これを、ジブソンと読むかジェイブソンと読むかは好みの問題ですが、ジブソンだとジーパン、ジェイブソンだとウイスキー風なので、私はウイスキーの方を選びました。

お手元の1枚の紙をごらんください。これが作成中のホームページのトップページですが、裏に加盟組織などが記載されています。JIBSNを立ち上げようと思うに至った経緯ですが、先ほど副村長からもご紹介がありました「国境フォーラム」に始まります。最初は与那国でした。



当時、根室の長谷川市長と、対馬の市長を入れて鼎談をやる企画をつくったのですが、台風で対馬市長は来られない、根室の市長は来たのはいいが帰れないという事態に直面しました。ああ、これは1回ぼっきりで終わらせるな、ずっと続けなさいということだなと思いました。

島嶼学会の方々と相談したところ、小笠原の返還記念の年に当たるので、次は小笠原でやらないかという話がでて、2回目のフォーラムが小笠原で開催されました。ところが私はそのときセンター長なるものやっていた、小笠原に行って帰ると1週間ですからどうしても行くのが難しいことがわかりました。その日以来、いつになったら私は小笠原に行けるのだろうと思いつけてきました。渋谷課長に昨日お会いしたとき、「やっと来てくださいましたね」と言われて、私の心苦しい5年がようやく終わりました。

特にグローバルCOE初期の博物館展示で大東島と小笠原のコーナーを作ったときに、展示の解説文を書いたのは私でした。大東島は行ったことがあるのでまだしもいいのですが、小笠原に行ったことがない人間がその解説を書くという、自分でも気持ちがよくない思いをしました。そのときは延島先生にいろいろご指導いただいて何とかしのぎましたが。

その後「国境フォーラム」を根室と対馬でやって、一巡しました。そろそろ、お祭りではなく中身のある実務会議をつくり、研究者もここに入ろう。こうして、「国境フォーラム」を発展的に解消して、このJIBSNを立ち上げたのが去年2011年11月。その前の5月にプレJIBSN実務会議を与那国でやって、台湾にチャーター便を飛ばしたことで勢いがつきました。

今年度は年度の終わりに、実務会議を東京でやろうと予定していました。まあ、ここも東京ですけど、いわゆる東京で開催しますと、集まってちょっとしゃべって、懇親会が終わるとホテルに戻ってさようなら。これに対して、小笠原でやるということは、竹芝で船に乗ってから、ほとんど1週間近く寝食を共にするわけです。これはリトリート（合宿）です。

行って帰って旅をするということの意味ですが、例えば、今回も根室、福岡、与那国、竹富から実務者の方が参加されていますが、一緒に寝食を共にしながら交換する情報密度の濃さというのは違います。嫌でも、帰りもまた船に揺られながら一緒にいるわけです。これは今までと全く違う会議の形式だといえます。

こうして、なかなか機会を見つけることが難しい小笠原への旅が実現しました。これはJIBSNとしての記念すべき第一歩です。渋谷課長、湯村室長を始めとする、小笠原のみなさんのご協力と、今回のプログラムを作ってくださった山上さんのご尽力の賜物です。この会議には学者のみならず、ジャーナリストも参加しています。これまで通り、国境の島・小笠原のDVDも作るべく制作クルーも同行しています。

会議にさきだち、昨年11月のJIBSN設立大会の模様をおみせします。5～6分ものですが、この映像も北海道放送HBCフレックスの提供です。ではご覧ください。

[<ビデオ上映「JIBSN設立集会」>](#)

(山上) 各地域からさまざまな市町のみなさんが集っています。「国境地域における取組み」と題しまして、まず西から与那国町、竹富町、根室市と順番にまいります。そして北海道国際交流・協力総合センター、福岡アジア都市研究所と続けます。ではまず与那国町の小嶺さん、どうぞよろしくお願ひします。

(小嶺長典) こんばんは。与那国町から来ました小嶺といいます。今日はよろしくお願ひします。すみません、先におわびしておきます。小笠原に行けるといううれしさでちょっとはしゃぎ過ぎまして、ちょっとオーバーペースで声がこんなふうになってしまいました。昨日まではよかったです。

時間がありませんので、早速報告したいんですけど、まず今日はちょっと与那国の隣の台湾の原発の問題を少し取り上げたいと思いますが、その前に昨年の9月に与那国島から台湾へ泳いでいったんですよ。これは与那国町主催ではないんですが、有志の人が集まって行いました。大震災のときに台湾からの義援金が200億円を上回り感謝のメッセージを届けるということで、一番近い与那国島から泳いだということです。

■ 与那国島の近況報告

○ 日台黒潮泳断チャレンジ 2011 開催 台湾へ感謝のメッセージを届ける。

今回の東日本対震災における台湾からの義援金が200億円をこえていることで台湾の方々の温かい心づくしに対し、与那国島から6人のスイマーがリレーで台湾・蘇澳まで約150kmを泳ぎ切り、感謝のメッセージを届けるため9月16日(土)早朝7時に多くの町民が見送る中、ナーマ浜から出発した。

これは日台黒潮泳断チャレンジ2011実行員会の主催によるもの。出発の前日(金)は、地元の子どもたちへの水泳教室が久部良中学校プールで行われた。又、前夜祭として、午後6時から郷土芸能や映画上映会が行われた。

このプロジェクトは、日本の勇気のある若者たちが(公募された)世界3大潮流を乗り越え、台湾へ渡る前人未踏のチャレンジ。48時間後の9月18日(月)早朝に台湾側からのスイマーが蘇澳沖の洋上で出迎え両国の友好を深めた。

水泳教室
(久部良中学校)



前夜祭
(久部良多目的施設)

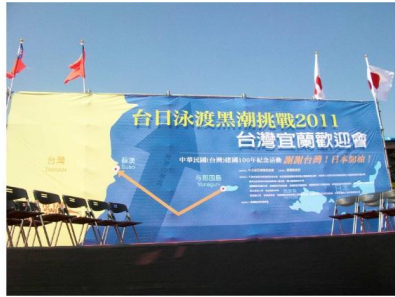


皆で一緒に頑張るぞー



9/16am7:05チャレンジ スタート

台湾側歓迎式場



もうすぐゴール
(台湾蘇澳鎮豆腐港)



栄光への架け橋



すごい数の台湾取材陣



無事到着して台湾tvのインタビュー

真っすぐ行くとだいたい110キロぐらいなんですが、これを真っすぐは泳げないんですね。黒潮があるものですから、それで少し南下してまた上へ上がっていくという、V字型にちょっと泳いでいったんですけど、その日は、私たちも半信半疑だったんですけど、台風が沖縄本島の方に近づいていまして、結構波があったんですよ。これは本当に行けるんですかと聞いたんですが、行きますということで決定しました。その前日は、先ほどプロのスイマーみたいなオリンピック候補の選手とか、そういう人たちが泳ぐということで、せっかくですの水泳教室とか、そういうのもやっています。

それで、取りあえず記念写真を撮って、9月18日、7時ちょっと過ぎですかね、そこから泳ぎをスタートしています。これは台湾側での歓迎式なんですけど、カメラ取材も何かすごいっぱいあって、48時間かかったんですよ。船を2そう付けまして、やっぱりサメもいますので、サメ対策に長い布を船で引っ張って、その上を泳いでいくという形を取りました。そのそばにカヌーも付けまして、カヌーからはサメよけの電磁波みたいなものも流して、そういう形でずっと伴走しながら泳いでいって、予定では10時ぐらいに着く予定だったんですけど、朝の7時ぐらいに着いて、ちょっと洋上で待っていたということですね。あの台風の中、信じられないという思いだったんですけど。その後、台湾で小学生とかいろいろな方に出迎えてもらいまして、台湾のテレビ局とか取材の方とかもいっぱい来まして、そこで（岩手、宮城、福島）3県の知事から預かった

メッセージを渡したということです。

早速私のレポートという形で、先週ちょっと慌てて取りまとめをしていました。実は、去年11月8日の『琉球新報』、地元の新聞ですが、台湾の原子力発電所が今、3カ所あるんですけど、今4カ所目を造っていきまして、それが与那国からの距離が130キロぐらいなんです。そこで今度、一番大きい原発ができる。いろいろな条件が整うと与那国は、そこで事故が起こると人口の半数ががんで死亡する可能性があるとか、そういうことが新聞で出たものですから、ちょっとこれは行政側としてもそのまま放っておけないだろうと考えて、まだ行政上では取り組んではいません。町長とか、総務課長とか、私とか、まだ内々で、じゃあ、これからどう情報収集をしていくかという段階でありまして、それで取りあえず今、インターネットとか、そういうもので調べようということを取り上げました。

これは与那国島の一番西の端、「西」の「崎」と書いて「いりざき」と読みます。これは去年の8月18日に私がちょうど撮った台湾の写真なんですけど、だいたいこんな感じなんです。こちら辺が玉山と言いまして、その下に太魯閣峡谷とかがありまして、阿里山、日本名ニタカヤマとかはたぶんこの向こう側のところです。もうちょっと北に行くと宜蘭とか、台湾の一番北の方ですね。基隆とかになります。

与那国島から望む台湾





それで、一応、資料はレポートという形で出している、その中の2ページ目に入っているんですけど、こういうのが、これは琉球新報のホームページからそのまま掲載しているんですけど、ほぼこの形でそのまま出ました。これによると130キロしか離れてない与那国島で、いろいろな条件がありますけど、累積で2.5シーベルトの放射線を浴びると、与那国町の人口の半数、今は1700人ぐらいですけど、この半分がガンで亡くなるんじゃないかということですね。これがそのまま新聞に出ていました(台湾原発、沖縄に警鐘 小出氏が研究「風向きで健康被害も」:『琉球新報』2011年11月8日付)。

それでもって、じゃあ、情報収集しようということで、これが一応、私が「Google Earth」から取った地図に、適当にだいたい50キロの同心円を作りました。そうしたら今、一番新しく造っている原発がここなんですけど、龍門、「龍」の「門」と書いて、ちょっと発音は分からないんですけど、50キロ、100キロ、これは与那国島なんです。150キロ、ちょうど100キロから150キロの間にあると。石垣まで250キロの圏内にすっぽり入っています。だいたい風は北西から吹いていますので、ほぼ真っすぐ与那国に来るんじゃないかなということでもあります。

それで、今、台湾の原子力なんですけど、一応1960年代から台湾は原発を造ろうということで政府が決定しているようです。アジアでは日本に次いで2番目。今、現在3カ所、6基の原発があります。規模としては日本、韓国に次いで今3番目の規模となっていて、ただ、中国に抜かれているのかどうかちょっと分かりません。

ここですね。今、6基あって、5144メガワットが稼働しているということですね。ちなみに福島第一原発の原子力発電所には6基の装置がありまして、それを合わせると4696メガワットですね。1号から3号機の出力を合わせると2018です。それで台湾4番目の原発が2700メガワットと規模がでかいのが分かるかなと思います。

原子力発電所の稼働についてなんですけど、第一発電所、第二発電所、第三発電所、第四発電所とありまして、現在その4番目を造っているというか、ほぼできていますね。これが実際に完成したとき稼働するかどうかということで、本当は総統選挙で民進党が勝ったらもしかしたら稼働しないんじゃないかということだったんですが、国民党の馬総統が当選しましたので、予定通り稼働させるんじゃないかということでもあります。

位置関係なんですけど、第一原発がこのシンシャン(金山)と言うんですかね。第二原発が国聖ですね。クオションと言うんですかね。第三は一番南の方にマアンシャン(馬鞍山)と言うんですかね。第三がありまして、そして今、問題になっている第四龍門、ここが今、与那国に一番近いところに造られるということでもあります。

「Google Earth」はすごいですね。何か「Google Earth」で調べていったら、ちゃんと分かりました。第一原発ですね。ここら辺に、これはちょっと見にくいですけど、送電線の何かそういうものがずっとありまして、ここら辺じゃないかなと思っています。建屋と制御室みたいなものですね。一番見つけやすかったのは、この排水の海に勢いよく水が流れている様子。それで探していったら、ちゃんと探せたということでもあります。



こっちの第一原発が、もう1978年に開始しております。2基ありまして、2基合わせると1282メガワットとなっています。次に第二原発ですね。これもさっきの第一原発の近くですね。東南に位置してまして、これが1981年に1基目が稼働しています。こちら2基合わせて1990メガワットということでありまして。こっちも排水の勢いがある。これは建屋で、制御室とかあります。

第三原発ですね。これがさっき言った恒春という町なんですけど、台湾でもずっと南の方ですね。これが典型的ですね。ドーム型のものが2つあって、たぶんこれが制御室でしょうねという感じでありまして。これはちょっと見えないんですけど、ずっとたどっていったらこちら辺で排出しているようなところがありました。そして今これが造っている第四原発ですね。これはよく分かりますよね。送電網がすでに引いてありまして、ほぼできているということです。これがちょっと気になったんですけど、何か廃棄物を処理するところかなというようなものですね。

次に、廃棄物の管理なんですけど、やっぱり高レベルと低レベルがありまして、実際に高レベルに関しては使用済みの燃料棒とか、そういうものは日本と同じように使用済みの棒を仮置きする燃料プールですかね。そのまま発電所の中にあるような感じですよ。低レベルに関しましては、蘭嶼という離島なんですけど、台湾の台東県ってありますけど、そこの沖合の方に島がありまして、そこに低レベルの廃棄物は管理されています。また、国内の何方かそこにそういうところを造ろうという計画があるんですけど、やっぱり住民がそういうことをさせないというか、そういう形でまだ計画中ということです。

ただ、低レベルの廃棄物の処理に関しましては、最初のころはかなりの量が出たんですけど、だんだん処理技術が進みドラム缶の本数でいうと少なくなってきたということです。

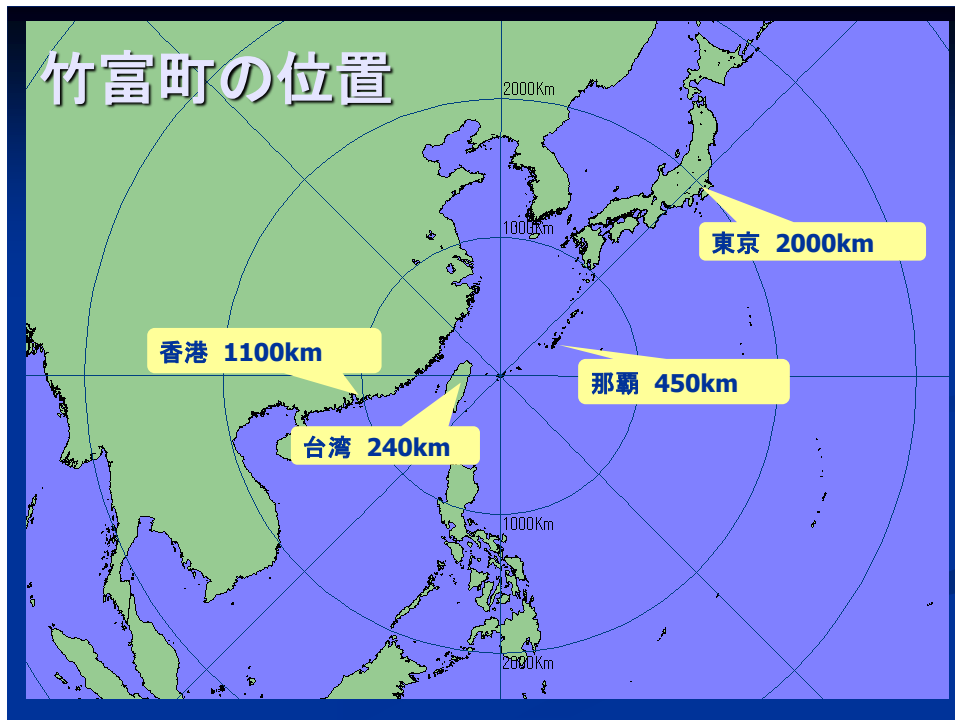
これは今、放射線の観測所ですね。それが台湾全土にありまして、現在34カ所という形になっていると。そのモニタリングセンターが高雄の方にあります。さっき言った蘭嶼島がここですね。与那国はこっちから海流がありまして、その上の方に真っすぐ与那国があるということです。

最後にもう1つ、私が何でこれを取り上げたかといいますと、福島の問題は国内の事故でしたから、やっぱり国がそれなりにちゃんと前に出て対処したと。だけどこれはすぐ近くでも国外ですので、その国外の事故に対して国がどう対応するのだろうか。リサーチはできても、海上保安庁とか自衛隊の船が本当に緊急のときに出動できるのか、今から考えておかねばならないということです。(拍手)

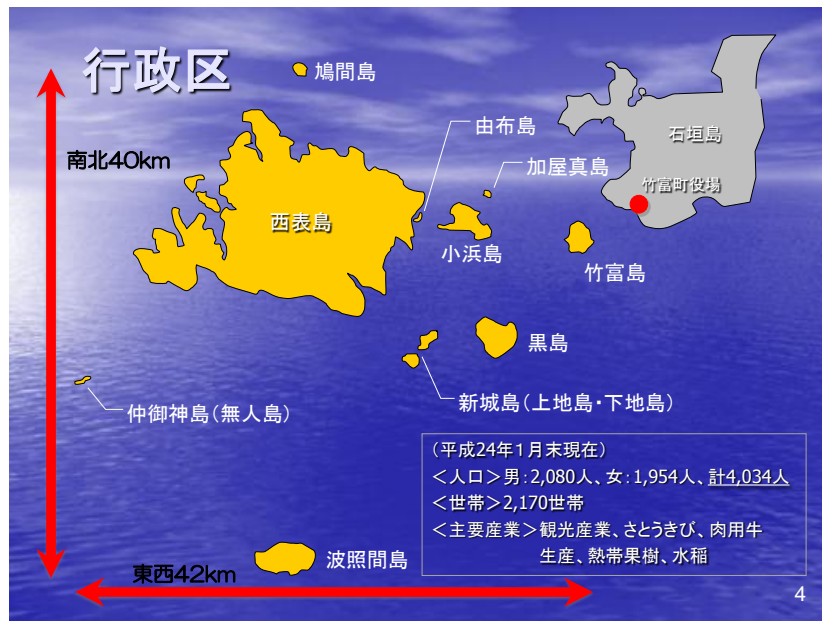
(小濱啓由) 日本最南端の町、沖縄県竹富町から来ました小濱といいます。どうぞよろしくお願いたします。時間がありませんので簡単に本町の概要から紹介したいと思います。

まず竹富町の位置です。東京から県庁所在地の那覇までが1550キロ、そのまた先に450キロ離れた地域にあります。北回帰線までは約65キロとなっております。東京よりも香港に近い位置にあります。行政区は、東西42キロ、南北40キロの広い範囲にわたり、役場は隣接する石垣市にあります。他の自治体に庁舎があるという特異な行政区域となっております。竹富島、小浜島、黒島、新城(アラグスク)島(上地・下地)、日本最南端の有人島、波照間島、西表島、鳩間島。無人島

ですが、仲御神島の島々からなります。



西表島は皆さんもすでにご承知かと思いますが、イリオモテヤマネコが生息する地域です。ここでイエネコを飼う場合は必ず登録しなければなりません。また、不妊や去勢等の繁殖の制限措置が条例でうたわれております。



次に小笠原村は、都庁所在地から1000キロも離れています。私たちも沖縄県内で県庁所在地から最も遠く離れている自治体です。日本列島のおへそになる部分、東経135度、北緯35度の交差

地点の兵庫県西脇市に県庁所在地の那覇市を置き換えた場合、私たち竹富町は九州の中央部に、同じ八重山地域の与那国町は長崎県付近に位置することから、地理的にも条件不利地域となっています。

それでは、竹富町海洋基本計画について説明いたします。まず施策体系です。理念を「町の未来と海洋立国のために」と5つの項目を掲げました。本日は時間がありませんので説明を省略します。その他竹富町の地域的課題、将来像、海洋立国への貢献を整理し、竹富町海洋基本計画の施策項目と国の海洋基本計画の関係を施策体系図としてまとめました。

施策項目では、1から23までの具体的な施策項目を掲げております。国の海洋基本計画は1から12項目まであり、国の計画とも整合性を合わせています。本町はこれまで沖縄振興特別措置法、過疎法、辺地法、復帰特別措置法等の恩恵を受けて発展してきました。しかし、こういった特別措置法を活用しても克服されない問題がまだあるわけです。特に高額な町民交通や各島々に整備する公共施設など高い行政コストの問題があげられます。そういった課題について海洋基本法を活用して補っていきたいと考えているわけです。

次に、どういった施策を実施するかということになるわけですが、先ほど説明した1から23の施策の中で下線部が先導やること項目で、平成22年からすでに実施しております。平成26年度までの5年間です。この計画は10年計画となっていますが、おおむね5年後に総合的な点検を考えています。黄色い部分で示した施策については着手している事業になっています。

1. 概要－(2) 具体的施策項目 (実施期間:平成22年度～平成31年度)

目標の区分	施策項目“やること項目” <small>(チャレンジ23;町の未来と海洋立国のために)</small>
①町および町民が施策・制度を自ら“創生”して“実行”	<u>1.海岸漂着ゴミ対策</u> <u>2.エコツアーリズムルール</u> <u>3.環境保全のための自主財源創出</u> <u>4.八重山広域圏海洋資源および亜熱帯自然・文化研究アイランド構想</u>
②町および町民が施策・制度を自ら“創生”して“実行”および国あるいは県に実施を“要望”	<u>5.安全な海域利用システム</u>
③町および町民が施策・制度を“提案”し、国あるいは県に制度制定を“要望”し、制度に基づき自ら“実行”	<u>6.主要農産品サトウキビの活用</u> <u>7.島嶼型医療体制の整備</u> <u>8.島嶼型教育体制の整備</u>
④町および町民が施策・制度を“提案”し、国あるいは県に制度制定および“実行”を“要望”あるいは補助等を“要望”	<u>9.バイオマスタウン構想</u> <u>10.総合リサイクル・自然エネルギー活用システム</u> <u>11.歴史・文化遺産の保全と活用</u> <u>12.外来生物対策および野生生物の保護</u> <u>13.国境離島伊弉利島の保護と調査研究</u> <u>14.竹富町版海洋保護区(MPA)の制定</u> <u>15.地方交付税算定面積に、生活に密接な海域(サンゴ礁等)を編入</u> <u>16.高価値魚種の増養殖を推進</u> <u>17.環境配慮型海岸保全施設の整備</u> <u>18.景観緑地島構想</u> <u>19.陸土流出対策</u> <u>20.ばいぬ島空港構想</u> <u>21.海底送水および海水淡水化施設の整備</u> <u>22.海洋深層水および地下水の活用</u>
⑤国あるいは県に実施を“要望”	<u>23.安全と環境配慮港湾構想</u>

**先導やること項目：
平成22年度～26年度**

それでは施策の詳細について紹介していきたいと思います。毎年、私たち竹富町には多くの漂着ごみが到達することから、地域のNPO等が率先して漂着ごみの回収に当たっています。平成19年には『24時間テレビ』を誘致して、その取り組みを全国にアピールしました。

次に、マングローブ林の保全です。この写真は西表島のマングローブ林ですが、近年では漁網やロープなどの漂着ごみが木々の根っこに絡まり、その周辺で生息する動植物などに影響を与え、自然生態系が乱れる問題が発生しています。そのようなこともあり、当方の自然環境課がマングローブに漂着ごみの侵入を防ぐネットを設置しました。この侵入防止ネットは干潮時、満潮時においても対応できる仕組みで、漂着ごみの侵入を防止するだけでなく、漂着ごみが回収しやすい浜辺に誘導するように設置されています。



そういった状況をかながみて、地域ではNPOが立ち上がり、自分たちで海岸漂着ごみ対策に取り組み始めました。海岸に漂着するごみは容積率で4割が発泡スチロールといわれています。その4割の発泡スチロールをエネルギーに変換する取り組みが始まりました。これはその平面図ですが、海岸で集めた発泡スチロールを専用の破砕機にかけて油化します。その油化した油を島内の各家庭や民宿等のボイラーで使用しています。

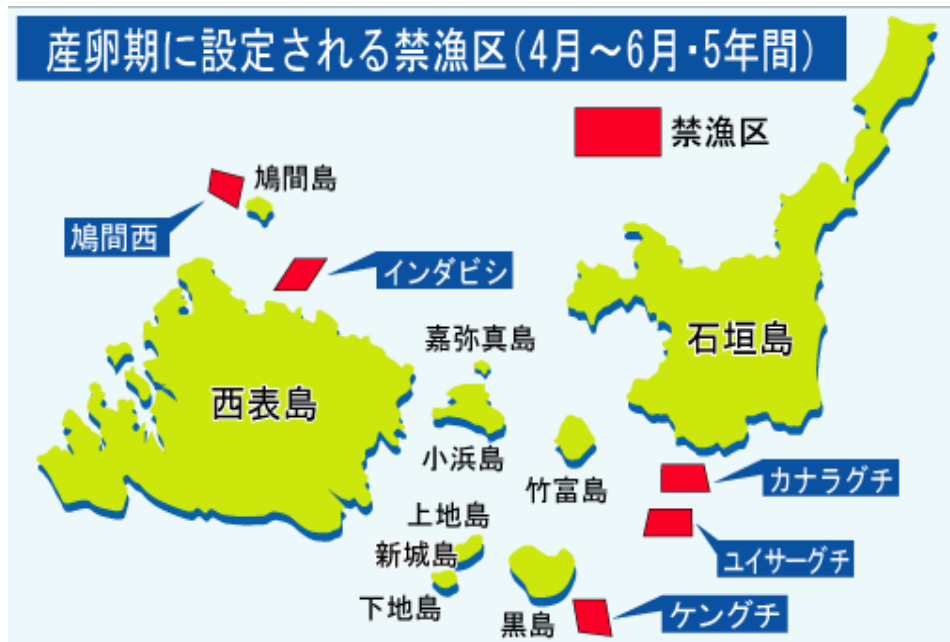


竹富町は9つの有人島で構成される島嶼の町ですから、先ほど説明した固定式油化装置のほか、移動式油化装置を開発し、各島々を巡回し、処理していく仕組みを検討しています。日本財団や日本海難防止協会のご指導を賜りながら、平成24年度までの社会実験に取り組んでおります。

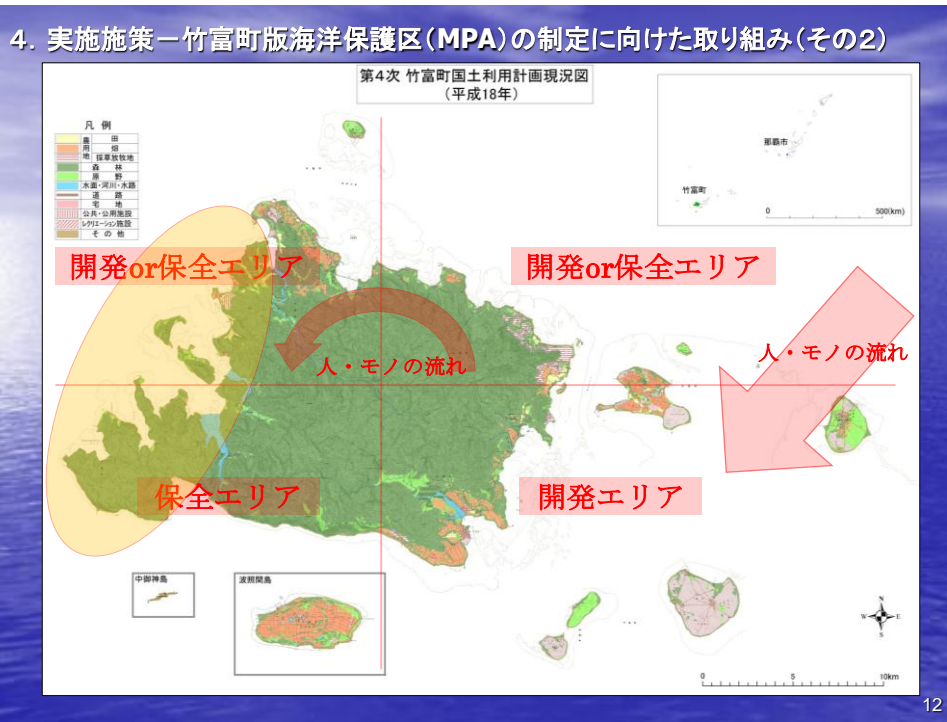
次に施策項目の中で実際に取り組んでいる、竹富町版海洋保護区（MPA）の制定に向けた取り組みを紹介いたします。MPAとはマリン・プロテクティド・エリアのことです。保護水面、海中公園、禁漁区、保護区などです。MPAの多面的機能としては、水産資源の管理、サンゴ礁生態系の保全、エコツーリズム利用などがあり、多様性としましては、完全禁漁又は多目的利用、国主体又は自治体主体などがあります。本町では自治体独自で取り組む方法を検討しております。また、永久設定又は期間限定、全魚種又は種を限定して海域を設定するかなどの取り組みを始めました。

国立公園について言えば、石西礁湖内に関しては、普通地域内に入っていますが、それほど拘束力はありません。国立公園の普通地域は、平成24年の4月以降に拡張される予定ですが、もう少し強制力のある規則が必要ではないかと地域で議論され始めました。引き続き環境省と調整しながら取り組んでいきたいと考えております。

これは八重山漁協が自主的に規制している海洋保護区の図です。産卵期に設定される禁漁区で、4月から6月の間に実施し、5年間継続しています。まだあくまでも自主規制なので、もっと強い縛りが必要ではないかという声が上がっており、それを踏まえて私たちは取り組みはじめました。



なぜこのMPAを海洋基本計画に位置付けたかについて、本町の土地利用計画図で説明します。平成21年度に策定し、現況が18年度で少し古いデータですが、原形はそんなに変わっておりません。凡例でも示していますが、赤色が農地開発、宅地開発、リゾート開発などの開発された地域です。



まず、本町で一番面積の大きい西表島を中心にして、本町を4面に分けて説明したいと思えます。本町の人、物の流れは、石垣島からほとんど流れてきます。石垣島は八重山の玄関口ですから、人、物の流れは、図上の右から左になるわけです。西表島の南側には道路がありません。東部から北西部にかけて1本の県道があるだけです。

それで人が来たり、物が来たりします。また、逆に人や物が出ていくときも、逆パターンです。4面右下の地域においては赤っぽいマークが多いので、私たちは開発エリアと位置付けています。

その上の面に関しては、開発されていますが、まだ自然環境が残されているということもあり、開発又は保全エリアとして位置付けております。4面左上も開発されているが、森林地域が残されている状態です。

図の左下に関しては、見ていただいて分かると思いますが、ほとんど開発されていない状態です。このエリアだけは何も手を加えず、ありのままの自然環境を残しておきたいと私たちは考えています。新石垣空港が来年の3月に開港いたします。それに伴って今よりもっと多くの観光客等が石垣を経由して町内に入ってくることが予想されます。石垣島と西表島との間の海域を、石垣の「石」と西表の「西」とをとって石西礁湖といいます。この海域では主に石垣市のダイビング業者が、観光客等に対してダイビングなどのマリンレジャーサービスを提供しています。この海域を観光資源として利用しているのですが、サンゴ礁の白化現象や水質低下などによる自然環境が悪化していくと、まだ手つかずの海域、西へ西へと場所を変えて行くことが予想されています。

そのような事態を考慮し、今のうちに図で示す西表島西側の沿岸域のエリアだけでもルールづくりに取り組まなければならないと考えました。特に石西礁湖に関しては、自然再生推進法に基



づく「石西礁湖自然再生協議会」という組織がありますが、その中でルールづくりがなされて来ております。航路の開発に関しても国が予算を付けて整備に取り組みはじめました。

当基本計画におけるMPAの取り組みについては、東京大学海洋アライアンスと、合同で取り組むこととなりました。昨年11月には西表島において合同でシンポジウムを開催しました。「海の利用で提言」という見出しで地元紙でも大きく報道されました（『八重山日報』2011年11月13日付など）。地元のステークホルダーを集めてのシンポジウムでした。そのときにアンケートを実施したのですが、本町の地域住民は、最も環境保全に興味を持っていることと、ほとんどの方がMPAの設定に関して必要性を感じていることがわかりました。

次に、来年度から取り組むことですが、サンゴ礁等海域内を地方交付税算定面積に編入していく基礎調査に取り組みます。本町の海岸総延長は約252キロメートルです。先ほど沖縄本島から八重山までが400キロ余りと説明しましたが、どれくらいの距離になるかだいたい想像できるかと思います。リーフ内面積が295平方キロメートルです。この区域というのは、私たちが昔から実質的に管理しているエリアです。漂着ごみを回収したり、あるいは流木等が流れてきたら回収したりと維持管理的な活動を行っているわけです。そういったのを含めて本町にとってサンゴ礁海域は漁業資源、観光資源、また航路は道路と同様の役割を果たしており、日常的な生活域としての位置付けであるということを訴えていきたいと思っています。

昨年の9月に地方交付税法に基づいて竹富町から沖縄県に対して申し出を行いました。沖縄県はそれを受けて、国に申し出を行っています。国が県に回答する期限が3月いっぱいということなので、その状況を注視したいと思っています。

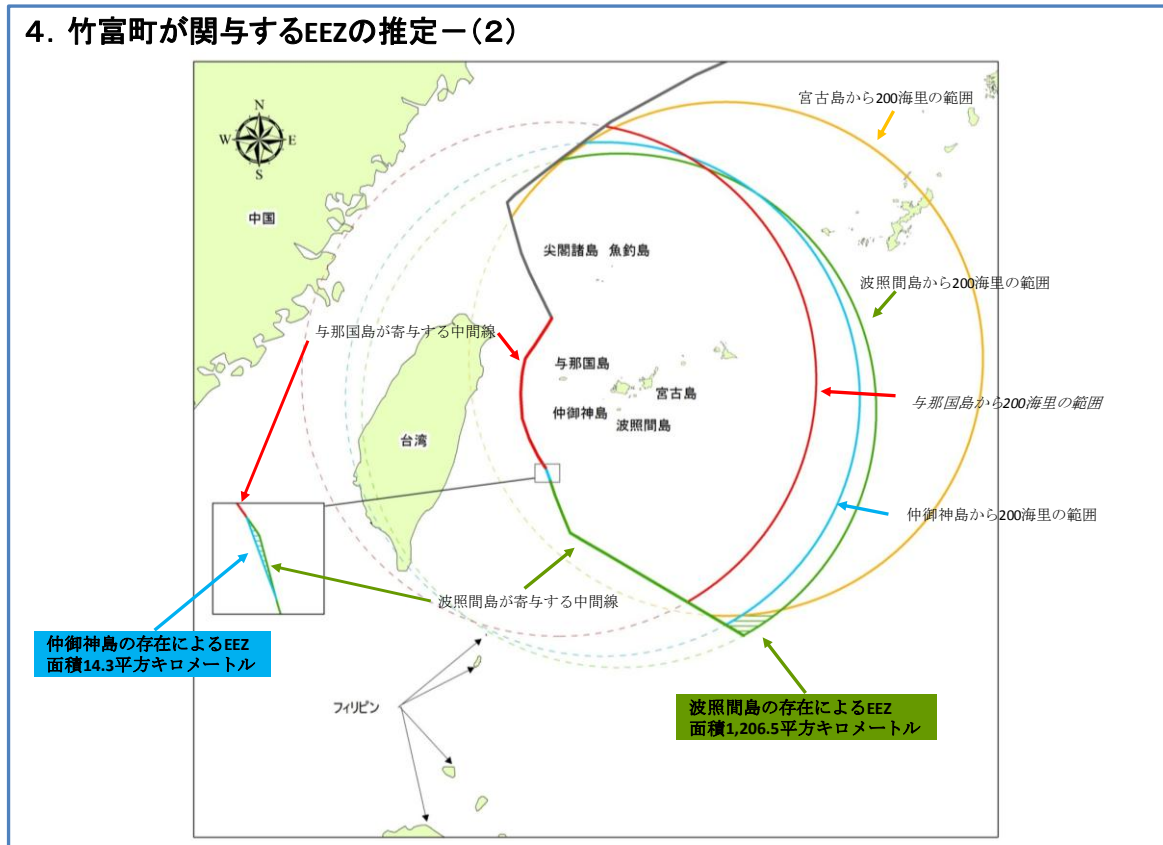
新年度には「サンゴ礁等海域における地方交付税算定面積基礎調査業務」を実施する予定です。簡単な事業概要としては、水域が地方交付税算定に含まれた滋賀県琵琶湖、島根県宍道湖、福島県猪苗代湖などの地域の実態把握調査に取り組みます。この湖沼に関してはすでに交付税が算定されている地域ですので、何らかの形で共通するものがあるだろうと考えております。次に海域の地方交付税算定根拠導入を検討している自治体調査を実施します。鹿児島県の奄美市もそういった取り組みをされているようで、今後一緒に取り組んでいければと考えております。その他地方交付税の試算や海洋島嶼自治体特別交付金（仮称）、低潮線所在地特別交付金（仮称）等の提案資料を作成していきたいと考えております。

低潮線というのは、排他的経済水域の基線となるものです。日本最南端の有人島、本町の波照間島には、排他的経済水域の基線が存在することから国益に大きな役割を果たしています。海域が交付税に算定された場合の効果としては、本町の自然保全に取り組んでいくための財源担保が図られるということです。

サンゴ分布図をみましょう。赤色で示している箇所がサンゴ礁といわれる海域があるところです。黄色で示すところが、サンゴ礁ではなくてサンゴ群と呼ばれる地域です。この海域を有する自治体と連携していきたいと思っています。日本の場合、暖かい黒潮に乗って海流が流れていますから、房総半島あたりでもサンゴが生息するというお話を聞いております。

次に本町が関与する排他的経済水域です。波照間島で約1200平方キロメートルあります。無人島の仲御神島は約14平方キロメートルです。本町を基点にした場合の排他的経済水域は台湾やフィリピンが主張する排他的経済水域とぶつかり合いその場所が中間線となりますが、波照間や仲御神島が存在することでわが国の排他的経済水域の確保に貢献しています。

4. 竹富町が関与するEEZの推定－(2)



最後になりますが、日本最南端の町、竹富町の思いを黒潮の流れとともに全国に発信していきたいと思っております。ご静聴ありがとうございました。(拍手)

(織田敏史) 日本の一番東の街といわれております、北海道根室市役所の織田と申します。私からは北方領土問題ということで簡単にご説明をさせていただきたいと思っております。今まで南の市と町が続きまして、今度は寒くなっちゃうかもしれませんが、今日は資料も PowerPoint も何も用意しておりませんので、言葉だけでご説明をさせていただきたいと思っております。

北方領土は、ちょっと人の資料を借りて恐縮なんですけど、今の竹富町さんの資料の、この4つの島であります大きな島から択捉島、国後島、色丹島、あとは小さな島と岩礁が複数存在するのが歯舞群島という1つの島ということで整理をして、北方四島ということで取り扱っております。

この北方四島ですが、距離といたしましては一番近い歯舞群島の水晶島で3.7キロしか離れておりません。まさにすぐ目の前です。一番遠いところでも144.5キロ、択捉島。納沙布岬からの距離



になりますが、その程度しか離れておりません。この北方四島、皆さんすでにご承知と思います。第2次世界大戦が終了した直後にソ連軍によって占拠されて、当時、住んでいた日本人1万7291人が強制的に4島を追い出されたと、島を乗っ取られたというのが北方領土問題で、今もまだ続いております。

島民1万7291人、昭和23年には全員強制的に退去させられまして、そのほとんどの方がすぐにも島に帰りたいと。当然、家も土地も財産もすべて残してきているわけですから、島に帰りたいという思いで私ども根室市地域、1市4町で北方四島を囲むように存在しており、これを隣接地域と呼んでいるんですけれども、ここに定住しております。

その方々も戦後66年、67年目になるかと思うんですけれども、その6割以上の方がもうすでに亡くなっておりまして、元島民の方の平均年齢も今年で78歳になることから、残された島民、島に帰れる自信も体力もないということで、最近は苦勞話しか聞こえてこないのが実情であります。

私は根室市役所の北方領土対策課、この北方領土問題を専門に扱う課の課長をしておりまして、専任職員4名、私を含めて5名で日々この北方領土問題に取り組んでおります。北方領土問題、我々は何ができるのかということですが、当然、北方領土問題というのは、日本とロシアの外交交渉になりますので、我々が直接外交交渉の中に入って元島民の声をロシア人に訴えるということではできません。私どもの仕事としては、元島民の声を国に届けて、あるいは北方領土問題を署名活動やさまざまなイベントによって世論喚起を図るといったことしかできないのが実情であります。

皆さんご承知の通り、北方領土問題がどこまで全国的に認知というか、知り渡っているのかというと、北海道の中でも札幌、札幌はまだ認知度は高いんですけれども、近くの釧路であったり、函館であったり、網走の方だったり、さほど何が困っているのというレベルでしかないようなちょっと悲しい事実があります。ということで、どちらかという沖縄返還ということよりも、今回初めて小笠原に来させていただきましたけれども、小笠原の返還の方にイメージ的には近いのかなど。強制疎開させられても島が返還されてから、皆さん島に戻られたということは、私どもは66年もたっちゃって本当に帰れるのかということちょっと自信がないんですけれども、元島民は当然、お墓も島にあるわけですから、俺が死んだら島に埋めてくれというのと、あと行きたいときに墓参りに行きたいというのが、おじいちゃん、おばあちゃん、元島民の方々の切実な声が今、響いているところです。

先ほど私ども自治体としては、啓発活動しかできませんと言ったところですが、その中でビザなし交流という四島との唯一の人的交流。お互いに行き来して四島の生活を目で見て、あるいは島に直接上がって、今の島の現状を見てくると。北方四島に実際に1万7000人以上の方々が今、ロシア人なんですけれども住まわれておりますので、その方々を日本側に呼んで、日本の暮らしを見せて、日本ってこんな良いところなんだよというのを見せつけるというのも、1つの目的だろうと思うんですけれども、そういった交流が去年で20年目の事業を終えております。

このビザなし交流が始まったときには、まったく交流がなかった四島側と根室側の住民が、顔

と顔を突き合わせて交流を続けることによって、領土問題解決のための環境をつくろうということで始まっております。それが実際20年終わって何が残ったのかということ、友好が高まったということは確かに言えます。ロシア人島民との友達ができたり、手紙のやりとりをしたり、行ったときにお世話になった方から来たときにお世話する。そういった交流、友好は深まったと思いますが、領土問題解決のための環境づくりにはなっていないというのが、我々、関係者の一致した意見であります。



(撮影：小嶺長典)

それで20年、先ほど言いましたが、元島民ももうこの先長くない、このままビザなし交流を続けていっても何かメリットがあるのかということで、原点に返って領土問題解決のための環境づくりのためになるビザなし交流をやるべきだという雰囲気が盛り上がってきております。

それは、去年の2月に当時の前原外務大臣とラブロフ外相が外相会談を行っております。その中で北方四島の共同経済活動について、ハイレベルで協議をしていきましょうという声がお互いというか、両国で一致したという報道があったこともありまして、じゃあ、それであれば経済交流を含めた新しいビザなし交流の形を模索しようじゃないかということで、この1年かけていろいろと元島民、あるいは水産関係者、産業経済界、あるいは公務員、いろいろな方から意見を聞いて、何をやれば一番メリットがあるのかということ今、集約しているところです。

経済交流1つではなく、人的交流、物的交流、そういったものをどんどんやっていきたいということで、今いろいろ取りまとめているところです。これも外務省の方とまだ正式に打ち合わせはしてないんですが、外務省もこういった根室市の動き、報道にも結構出ていますので、どうしているんだということを、いろいろ質問というか、問い合わせも入っております、外務省としては経済交流1つ取っても、日本の法的立場を害さないような交流しか認められない。ロシアと例えば、簡単に言うと商売を始めるに当たって、どちらの法律を使って商売をするんですかと。我々としては四島は日本なんだから、日本の法律で当然商売したいと。ただ、ロシア側としては、日本の法律に基づいて売買することはまかりならないと。当然ロシアの法律で物を持ってこいという立場であると思います。

そこはまだ溝が埋まらないので、これはなかなか商売、経済交流というのは簡単にはいかない、



それは重々承知はしております。その中で何ができるのか、どういうことが考えられるのか、どういった交流が、当然、経済交流ということで、隣接地域、我々が商売でもうければ、それはそれに越したことはないんですが、もうけはうんぬん、ロシアにとってもこちらにとっても、要するにフィフティー・フィフティーの交流がまずできればいいんじゃないかというようなところで、今、経済交流を含めてビザなし交流の見直しについての検討というものを進めております。

ロシア側としてはクリル諸島社会経済発展計画ということで、北方4島を含めた千島列島ですね。ハード、道路だとか、水道、港湾、空港、幼稚園、保育所、そういった社会生活基盤を890億円の多額の投資を掛けて整備していくという2015年までの計画なんですけど、私も去年、色丹島の方にビザなし交流で訪問させてもらったときに、道路は何一つ舗装になっていない。港湾は全然整備されてない。保育所は新しい保育所が1軒建っていた。ただ、よく見てみると手抜き工事じゃないかというような、かなりぼろぼろ、窓が隙間だらけ、ペンキははがれている、建ったばかりとはとても思えない保育所だったんですけども、どこにお金が掛かっているんだろうというところで帰ってきました。

そこで先ほど言った経済交流なんですけれども、ロシアが890億円どこに掛けているのか分かりませんが、道路工事だとか建築、そういったものがどんどんロシア側は第三国の資本も技術も入れて開発したいと。日本にも声を掛けてきていますが、先ほど言った法的な問題があって、国はうんとはなかなか言わないというところなんですけれども、やはり、このまま待っていても中国だ韓国だ、今、北朝鮮の労働者まで入って家を建てているという情報までありますので、このまま黙ってみているといつまでたっても帰ってこない。それであれば、日本がどんどん入って行って日本の技術をどんどん投資して、島を乗っ取ってしまえというようなぐらいの気持ちで、外務省といろいろと調整をしてみたいと考えています。

ビザなし交流、来年から21年目、ちょっとお話がそれちゃうかもしれませんが、来年、新しくバリアフリーの船を造っていただきまして、それを使って21年目の事業が始まると。できればそこまでに何とか間に合わせようと、動きを見せたいなと思っていたんですが、来年からすぐにこういった新しいビザなし交流ができるわけがなくて、まだまだ時間がかかるかもしれませんけれども、少しでも元島民が元気になるような、光が、ゴールが見えるというか、外交交渉が動き出すような経済交流というか、新しいビザなし交流、北方領土返還要求運動というのも、元島民を勇気付けるためにも、あるいは元島民じゃなくても、2世、3世、子供たち孫と一緒に島が帰ってくるまで運動できるように環境をつくっていききたいなと考えています。(拍手)。

(高田喜博) 高田です。長い名前ですが「北海道国際交流・協力総合センター」という、北海道で国際交流と国際協力を行う団体で調査、研究の仕事をしています。

北海道は、ボーダーという意味では、今、織田さんからお話のあった道東の根室市のすぐ目の前に、ロシアが実効支配している北方領土との間にボーダーがあり、また、道北の稚内市の北に、戦前は樺太と呼ばれていたサハリンとの間にもボーダーがあります。



織田さんから北海道の東のボーダーの話があったので、私は北のボーダーを挟んだ稚内とサハリンの交流についてお話をしたいと思います。

実はJIBSNでは、今年の8月下旬に稚内で会議を開き、そのままサハリンに行ってまた会議を開いて、ボーダーの両側から両地域の経済交流の問題を考えるという企画を準備しています。今日は、その前座みたいな話ができればと思っています。

北海道は広くていくつかの振興局と呼ばれるエリアに分かれており、道北には宗谷総合振興局があり、その中に稚内があります。実は、小笠原まで来る旅の途中で時間がたくさんあったので、小笠原でどういうテーマでお話をすれば良いのかを改めて考え直すことができました。まず、東京と北海道との関係という意味では、東京という日本の中心から遠く離れた北海道があり、それからもうひとつ、北海道の中でも中心である札幌から遠く離れた、宗谷地域、稚内市がある。そういう意味で、これは辺境の地域、沖縄とか、小笠原も同じように、中央から遠く離れた地域として共通の課題がある。そうした中心から離れた地域が、中心の方をいつまでも向いていてもしょうがないので、中心ではない周辺地域同士が連携して、共通する地域の課題を解決していくという方向があります。例えば、稚内がいつも札幌を、北海道は東京を見ているのではなくて、同じように中央から遠く離れた日本の各地域や、やはり周辺地域であるサハリンなどの地域同士が連携することによって、その自分たちの課題を解決していくということです。

実は稚内と、戦前は大泊と呼ばれていたサハリンの科尔サコフとの間に国際定期フェリーがあります。夏場だけの季節運航ですが、このフェリーを活用して、稚内とサハリンの間に人の流れ、物の流れをつくって、国境で接する周辺地域としてお互いに発展したいと考えています。具体的にどのような人の流れ、物の流れをつくるかということ、北海道は農業を基幹産業としていますから、農産品またその加工品を稚内経由でサハリンに輸出し、さらにサハリンを経由して極東ロシアへ、できればシベリアを通過してヨーロッパロシアまで送り込めないかというようなことを考え、いろいろな課題に挑戦しています。

また、人の流れでいうと、日本から稚内を経由してサハリンや極東ロシアへの観光アウトバウンドと、反対に、北海道へのインバウンドというように、観光を軸とした人の流れについて量と質を拡大していきたいと考えています。そのために、この国際フェリーをますます活用していきたいと考えています。また、質という意味には、人や物の流れの量だけでなく、観光客が地元でお金を使う仕組みについても、ちゃんと考えていかなければならないというような課題が含まれています。

また、もうひとつ、人や物だけではなく、資金や技術の面でも、交流を拡大したいと考えています。今は、サハリンプロジェクト関連の資金が入っていて、サハリンは非常に景気が良いのですが、このプロジェクトが終わると、地域の経済はどうなるのでしょうか。資源というのはいつまでもあるわけではないのです。

その意味で、サハリンとしては、プロジェクト関連の資金が動いているうちに、資源に依存しない産業構造に転換するため、地場産業を育成していかなければならないという課題があります。

そういうロシア側の課題に対して、北海道としても、例えば養殖や食品加工の分野で技術と資金を提供して、そこでお互いに経済交流を活性化していくという課題にも挑戦していかなければならないのです。

これまでの交流の歴史を振り返ると、北海道は、いろいろなことをやってきました。例えば、サハリンとロシアとの間では、1990年のパートナーシップに関する合意を結んで、それに基づいて合同委員会を設置して、現在も会議を継続しています。サハリンのユジノサハリンスク空港と最初は函館空港との間に、現在は新千歳空港との間に定期航空路が開かれています。先ほど述べたコルサコフと稚内との間の定期フェリー航路もあります。また、現地には、北海道や稚内市の事務所、北海道新聞の支局や北海道銀行の事務所が開設され、反対にサハリン代表部の事務所も札幌に開設されました。

先ほどお話をしたフェリーですが、これは「アインズ宗谷」というフェリーで、トン数が2628トン。「おがさわら丸」は約6000トンですから、これと比較しても小さい船です。北海道とサハリンの距離は、一番短いところで23キロですが、コルサコフ港はアニワ湾の奥にありますから、航路は159キロです。それを5時間30分で運行しています。ピークのときにはサハリンプロジェクトの関係で重機などを送るなど、かなりの需要があったのですが、最近では旅客も貨物も減少し、特に昨年の震災以降は放射能の風評被害もあって赤字が続くなど経営は苦戦しています。今、稚内市が補助金を出してなんとか維持をしていますが、なかなか厳しい状態が続いています。



「おがさわら丸」との違いは、「アインズ宗谷」は国際航路なので、海に出ると税金が掛からないので自販機で100円のビールが売っています。またもう一つの違いは、コルサコフに到着したら入国管理と税関があって、その手続きが必要だということです。フェリーが入港したときだけ、とても混雑するということもあり、非常に効率が悪く、普通で手続きに1時間程かかります。飛行機で行った場合にも、空港でそれぐらいの時間がかかることを覚悟しなければなりません。



ところで、昨年9月に、ユジノサハリンスクで道産食品の見本市をやりました。野菜などの生鮮食品は検疫の関係で持ち込めませんでした。道産米とか、味噌や醤油とか、ラーメン、お菓子類、それからジンギスカンや焼き鳥のたれなどを持って行き、見本市とニーズ調査を実施しました。

これは非常に好評で、毎日、予定よりも早く売り切れるほどでした。しかし、様々な課題も確認することができました。

それが先ほど述べたように、小笠原と東京との距離に比べたら、稚内とサハリンの距離はすごく短いのですが、経済交流のためにはすごく遠いということに関係します。どういうふうな遠いかというと、やはりそこに国境があるからで、東京と小笠原の距離は2000キロ、25時間。これに対してサハリンと北海道は159キロ、5時間半の距離しかないけれども、国境があるので、まずパスポートとビザが必要で、また輸出になるので通関、検疫に関する手続きが非常に煩雑でコストと時間が必要だという問題があるのです。

それだけでなく、海外なので、言葉の壁、情報不足、あるいは、生鮮食品を送る場合には、保冷設備の関係でコールドチェーンが不完全という問題。あるいは、日ロ間、北東アジアの政治や外交の影響を受けるというような問題があります。これに対して北海道とサハリンが連携をしながら、このような課題を片付けていかなければならないというのが現実です。

具体的には、道内の中小零細の企業や農家などの生産者が、ロシアビジネスを展開するには、大企業と異なり、絶対的に情報、資金、人材もすべて不足しています。そういう中小零細の企業や生産者をオール北海道で支援しなければなりません。しかし、道庁や各自治体とか、農協、経済団体などが、現状ではバラバラに行動しています。これを取りまとめてオール北海道体制を構築することが重要であり、さらに他府県の生産地と連携をすることも必要になると考えています。

また、サハリンには、道産食品に対する高いニーズがあるので、道産品のサハリンへの輸出はサハリン側にとっても利益であるというように、北海道とサハリン側とが共通の利益を明確にして、両者が連携して通関の問題であるとか、コールドチェーンの整備に取り組むことが必要だと考えています。

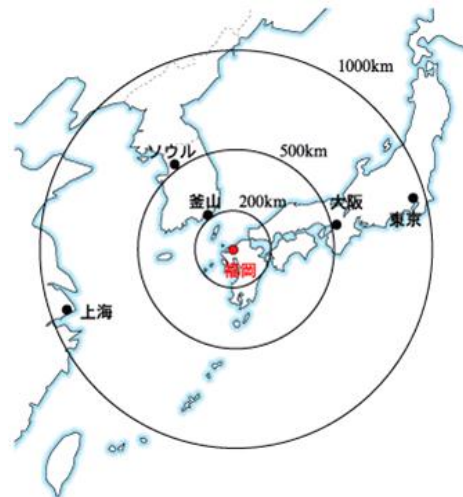
現在、そういう連携を鍵にしながら、先ほど述べたような課題を解決して、北海道、特に稚内を中心にした地域とサハリンの経済交流を拡大、促進していくために、いろいろ仕事をしているところです。私の報告はこれで終わります。(拍手)

(新井直樹) 福岡市の外郭団体のシンクタンクに勤務しています、福岡アジア研究所の新井と申します。今まで沖縄県や北海道の方から、国境問題に関して非常に緊張感のある話がされましたが、私がこれから話す内容は、今までの緊張感のある国境問題とは性質が違うのではないかと思います

実際のところ、日韓国境地域、具体的には日韓海峡圏地域、福岡と対馬の話をしませんが、日本の中でも一番垣根の低い国境と言いますか、福岡、対馬の人達も、日本と韓国の間には竹島問題が

あることは、もちろん認識していますが、その問題とは別に、福岡―釜山の両都市の密接なつながりや、韓国との交流に島の活路を見出す対馬の現実がありまして、今までの話とは、少し違った視点で話をさせていただきます。

まず、福岡市の位置ですが、釜山までが日韓海峡、対馬海峡を挟んで200キロ、広島と同じ距離ですね。それからソウルまでが大阪と同じ、500キロ位です。それから東京と上海までの距離が900キロと同じぐらいで、日本の中では、最もアジアに近い都市です。



実際に、私もこの研究所で、韓国を対象とした調査、研究をしております、釜山まで飛行機で30分位ですし、ソウルも1時間位ですから、東京に行くより釜山やソウルに行く方が近いので、韓国に関しては何度も行って慣れてくると、海外に来ている感じが薄れてきています。

歴史的にも、古代から日韓海峡を通じて、2000年ぐらい日本と韓国、北部九州と韓国南部は交流をして来ています。それから、国境問題を語る上では、日韓関係が、今、どうなっているかも関係すると思います。そして、現在の日韓関係は20～30年前と比べ、劇的に変化しております、一昔前は近くて遠い国と言われていたのが、21世紀になって日本で韓流ブーム、韓国でも日流ブームが同時に起きて、映画、テレビ、音楽、スポーツなど、両国民が老若男女を問わず、双方向に活発に交流していると言うのが今の現実だと思います。

さらに、今の日本がデフレ不況、人口減少に伴って経済の低迷が続く中、近隣の韓国、中国などは経済成長が著しく、そうしたアジアの活力を、どの様にして日本に取り込むかが、国、地方のレベルで課題となっています。そうした中、九州、福岡、対馬では、成長著しい韓国、中国を始めとするアジアとの地理的な近さを活かして、その活力を取り込んで、発展していくと言う取り組みが活発になっています。

今日は、そうした話をしたいと思いますが、まず、福岡市と釜山ですが、これは元をたどれば、1964年、日韓の国交正常化、日韓の基本条約が1965年ですから、その1年前に韓国の民団を通して、福岡市と釜山市の青年会議所（JC）が姉妹交流を始めまして、国交回復より先行して民間交流を始めました。その後、両市の行政交流も始って、姉妹都市になっていますが、現在は、両国

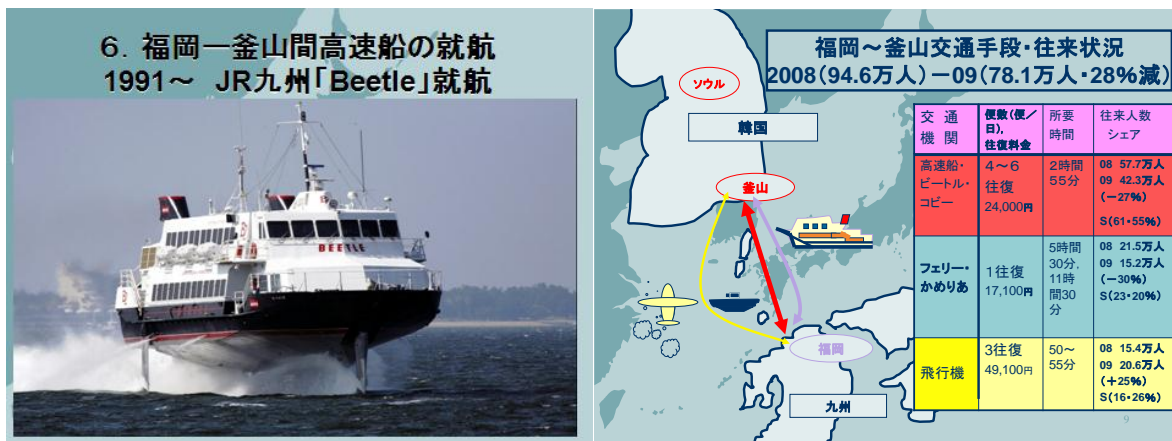
の行政、企業、教育機関、様々な民間団体同士が、色々な交流をやっていまして、福岡市も、いったいどれ位、福岡と釜山の間で交流活動がなされているのか、正確には把握できないほど、草の根の交流がされています。

さらに、最近では、福岡市と釜山市で超広域経済圏構想というのを打ち出したほか、福岡・釜山アジアゲートウェイと言う取り組みによって、観光分野などで中国人観光客を共同して、誘致する取り組みもされています。それから、政府の国際戦略総合特区に、福岡・釜山インターリージョナル国際戦略総合特区というものを提案もしています。これは、要するに国同士の枠組みじゃなくて、福岡市と釜山市である程度、経済活動などに関する規制緩和や権限を認めて欲しいという提案でしたが、国は認めてくれませんでした。

福岡・釜山超広域経済圏構想に関しましては、うまくいっている部分とうまくいっていない部分がありますし、経済協力分野なんて、別に行政がどうこうするのではなくて、企業間で動いている部分もあります。一番、うまくいっている部分というのは、主に人流、観光分野ではないかと思えます。例えば、両市が共同、協力してコンベンションを行うという合意もありまして、今年、2012年11月には、岩下先生のプロジェクト、福岡・釜山のBRITの開催に、両市が協力することになっています。

それでは、まず、人流、観光に関する話をしたいと思いますが、全国と比べて九州は、韓国人観光客が多くて、全国の外国人旅行者に占める韓国人旅行者の割合が、約30%であるのに対して、九州において約70%になっています。地理的に近いからという一言なんですが、全国に入境する韓国人の4分の1ぐらいが、九州に来ているということになります。

こうした九州と韓国の間の人の流れを大きく変えたのが、JR九州が始めたビートルというジェットオイルの船で、40ノット、時速、80キロで運航され、3時間弱で福岡と釜山を結んでいます。この船舶航路ができたことによって大きく変わったと思います。ビートルは1991年に就航して、暫く、乗降客は伸び悩んでいたのですが、日韓関係が21世紀に入って、日韓共催ワールドカップ、韓流ブームなどで劇的に良くなり、基本的に右肩上がり、日本人、韓国人共に乗降客が伸びています。





現在は、福岡—釜山のビートルを始めとする船舶航路（フェリーも含む）によって、日韓海峡間の人の往来が100万人以上になっています。

だいたい高速船ビートルだと3時間弱で、往復の正規料金が2万4000円。フェリーだと1万7500円、飛行機はもう少し高いですが、これもLCCが入って一挙に今、安くなっていますね。高速船とフェリーと飛行機、どれかを選んで、自分でコストパフォーマンスを考えて移動するというような現状になっていますね。

最安値のフェリーのパックツアーで9800円というのがありますね。船中1泊、釜山1泊の2泊3日で9800円です。オフシーズンになると高速船でも2泊3日1万9800円と言ったパックツアーがあります。

私は群馬県出身なのですが、東京から伊香保温泉や草津温泉に行く1泊2日の温泉ツアーが、だいたい2-3万円くらいです。そんな感覚です。だから福岡の人から考えると、釜山へ行って忘年会をやるとか、釜山の人も、ちょっと福岡へ行ってくるというのが当たり前になってきています。

福岡市は、海に開かれた九州、アジアの交流拠点都市を標榜していますが、今まで述べた韓国との船の往来とともに、最近では、中国発着の外国クルーズ船が、博多港に60隻ぐらい毎年、寄港しています。ここ小笠原も日本発着のクルーズ船の入港が増えていると聞きますが、福岡の場合は中国や韓国発着の外国クルーズ船が増えています。

あまり、時間もないので、要約して話をしますが、基本的に高速船で行ったり来たりしている日本人、韓国人の旅行者がどういう行動をして、どういう動向があるのかということ調査をしました。それで言えることは、博多港から釜山港へ行っている日本人と、釜山港から博多港へ来る韓国人というのは、いろいろな意味で、全然、違う観光行動を取っていて、日本人は釜山だけ行って、韓国料理のグルメと買い物中心、円高、ウォン安を利用して食べて、買い物をするというのが中心です。

ただ、次回以降、韓国でどういうことをしたいかという、グルメとか買い物は少なく、むしろ、祭りやイベントに参加、スポーツするとか、韓国人と交流するとか、語学を学ぶとか、「体験・交流」型の観光を韓国に行きたいという希望が多数でした。

それから韓国人は福岡、九州に来てどうしているかという、九州全体を2泊3日ぐらいで周遊するような形が中心です。日本人は釜山に行って1泊2日の都市観光、韓国人は2泊3日ぐらいで九州を周遊するような観光をしているということです。

そして、韓国人は日本人と比べると、買い物やグルメは非常に少なく、歴史、文化遺産を訪問したり、温泉に行くと言う人が大多数でした、ただ、次回以降、日本に来たら何をしたいかという、祭りやイベントに参加、スポーツをするとか、日本人と各種交流活動をしたいということで、日本人同様、共通して「体験・交流」型の観光をしたいという希望が多数でした。

九州の中でも、日本人向けの「体験・交流型」観光は数多くありますが、韓国人対象に、「体験・交流型」の観光をやっているというところは少ないのが現実です。

ただ、それを地域全体で活発にやっているところが、一つありまして、それが対馬です。

対馬はこのまさに日韓海峡の真ん中であって、釜山までが50キロぐらいですよ。よく晴れた日には島の北部から釜山を目視できるのに対して、福岡までが140キロという形で、地理的、歴史的にも韓国とのかかわりが強い地域です。

そして、離島地域として過疎化が進んでいまして、50年ぐらいで人口が半分になっています。それから、九州とか日本の国内から日本の観光客が来るかというと、全然、そういうツアーはありません。それでは、対馬と言う島が過疎化の進む中、いかにして地域経済社会の活性化を図るかと言う事で、どうしたかという、やはり地理的に近い韓国とのつながりを再び強化して活路にしようとして取り組んでいます。

現在、対馬から釜山との間に韓国の会社の高速船航路が就航して、大勢の韓国人が対馬に来訪しています。2008年には対馬の人口の倍以上の韓国人観光客が来島して、韓国資本のホテルも出来たりしていますが、それに対して、東京の報道は、センセーショナルに、対馬が韓国に乗っ取られるんじゃないとか、韓国資本に対馬は土地を買収されて韓国になるなんて言われているのですが、現地の対馬の人たちが現実的に考えていることは全く違って、日本国内から観光客が来るような状況もないのなら、近くの韓国との関係を強くしていくしか島が生き残っていく道はないのでは、という考え方でやっているといます。



そして、対馬で積極的に取り組んでいるのが、韓国人を対象にした「体験・交流型」の観光です。韓国人観光客を対象とした、朝鮮通信使を再現したアリラン祭、チング音楽祭って日韓のミュージシャンが共同した音楽祭、国境マラソンにも、韓国のマラソンランナーが多く参加しています。それから、史跡巡りや登山、ダイビング、シーカヤックであるとか、韓国人向けのツアーも多くあります。

こうした取り組みによって、対馬では年間で、宿泊費、飲食費、お土産代を含めて約22億円の経済波及効果があるとされていますが、過疎の島にとっては大きな経済波及効果です。さらに今は、県立の対馬高校が国際文化交流コースというのを設けて、韓国学を必要単位にして、将来の韓国との交流を担う人材を育成しようとしていまして、今後、そこで育った人材の活躍も期待さ



れています。

以上で、私からの日韓国境地域、日韓海峡地域の福岡、対馬の報告を終わります。（拍手）

（山上）引き続きまして、小笠原村から医療課長の樋口課長から、「今の南方域における医療」について報告をいただきます。

（樋口博）小笠原村の樋口と申します。皆様方、遠路はるばるお越しいただきましてありがとうございます。私は、医療課長として島の医療全般を、医療行政を担当しております。

今資料を配らせていただきます。その間にいろいろなざっくばらんなお話をさせていただきますが、先ほど来各地域の皆様方のお話を拝聴しまして、やはりそれぞれの地域の特性がある、それは承知しているんですが、小笠原と比較したときに、やはり課題に長い歴史があるんだなということ。それに取り組んでいらっしゃる皆様方のご苦労が、人であったり団体であったり地域であったり、やはりかなり歴史が積み重なっているんだなというところを、実感しながら拝聴していた次第です。

小笠原がそういう意味でまったく何も歴史がないかということ、そうではないんですが、やはり小笠原は小笠原の特異な歴史、あるいは地理的状况の中で、特有の課題を抱えているんだなというのをあらためて実感させていただいたような次第です。ちょっと座らせていただきます。

資料としましては、今、紙でお配りしたものをベースにお話を簡単にさせていただこうと思っておりますが、今日は小笠原の診療所の、一側面のご紹介をさせていただければと思います。

3年前ですか、返還40周年の際に、こちらで国境フォーラムを開催していただきました。そのとき、役場の総務課長だった渋谷がいろいろ発言をしているんですが、そのときの議事録を見させていただいて、率直な感想を言っているなと思ったのは、小笠原の我々が国境というものに対して、正直言って、普段何も感じたことがないということをつぶやいておりました。

それは正直言って、私も今現在そうだなというふうには思います。視覚的に見ても海の向こうに对岸が見えるわけじゃありませんし、ほかの地域の皆様方と同じように人的な交流があるかということ、そういった意味ではないというのが現状だと思います。

ただ、最近ニュース等で報道されておりますが、つい2カ月前の12月も、父島の北側の嫁島近海で、中国船が海上保安庁の立ち入り検査を忌避したということで逮捕されたという話がありました。今までは沖ノ鳥島のEEZ内であったり、その程度だったんですが、すぐその島でやはりそういうことが起こると、外交的あるいは国政的な観点、政治的な観点で意識せざるを得ない。そういった意味合いでは、国境というか、境界地域に小笠原もやっぱりあるんだなというのは身近に感じるところです。

本題の話ですが、私ども、父島、母島、いわゆる一般住民の方が居住しているのは父島、母島。そこに村立の診療所がそれぞれ1カ所設置してございます。それが、それぞれの島の唯一の医療機関という形になっております。



それを所管している中で、境界地域にある医療的な側面の紹介をちょっとさせていただきますが、診療所はそれぞれ村民の方、あるいは来島された観光の方々に医療を提供する場なんです、それ以外に小笠原の近海を航行する日本の船であったり、外国の船であったり、船の船員たちが航行中、操業中に急病になった場合に、まず小笠原の診療所にいらっしゃるケースが多くあると。全体でいうと多いのか少ないのか、数が分かりませんので何とも言いようがないんですが、こんな小さな島の診療所に日本の船籍、外国の船籍の患者さんが、救急患者として立ち寄る。そういうケースがあるということです。

数的に多いのかどうか。例えば与那国さんなんかの医療機関がどんな状況になっているのか、非常に興味があるところなんです、実は先月も、高知県の漁船の方が救急患者でこちらにお寄りになって、内地まで搬送したというケースも発生しております。

お配りしました資料は、年度ごとに、平成15年度以降のデータをまとめたものです。年度ごとに受診件数、人数、その内訳として船籍別に、日本船籍の場合、それから外国船籍の場合という形で区分けして、内訳を整理しております。

それぞれの船籍の内訳としましては、船の種類、それから船の種類ごとの人数、括弧書きで外国人の方というような整理の仕方をさせていただいております。

その1枚目の表を見ていただきまして、平成15年度が7件、7名の方が診療所にお寄りになって受診されていると。平成15年度につきましては日本の漁船の方と、日本の調査船その他、中身的には実習船なんです、合計7件7名の方が受診された。日本の漁船の方に、実際に受診された方1名はインドネシアの方でしたというふうに見ていただければと思います。

平成16年度が16件で30名、平成17年度が6件で8名、平成18年度が14件14名、平成19年度が9件10名、平成20年度が8件8名、平成15年度から、平成23年度はまだ途中ですが、過去9年間で72件90名の方が小笠原の診療所を受診されていると。平均でいえば、年間8件10名程度の方が毎年受診をされている状況になっております。

2枚目が、1件ごとの船の種別と、船籍の場所、それから患者さんの国籍と、何で受診したかというのを一覧にした表です。船の区分で、漁船ですとか、1枚目にも出ている船以外では実習船というものがありますし、あと、調査船、あるいは平成18年度の下の方、赤字になっている帆船、いわゆるヨットで寄られた方もおります。

そういうふうに見ていただくと、日本の漁船の場合は全国各地からと言えるかと思えます。北海道もあれば静岡、九州もございます。外国船の場合ですとやっぱり漁船が多いです。漁船がほとんど。しかもそれは台湾漁船がほとんどという状況になっています。中には、パナマ船籍の貨物船であったり、マレーシア船籍の貨物船であったりというのもございますが、外国船籍の方がこちらに寄るといのはほとんど台湾船籍の台湾人の方々です。

傷病名的には、非常に軽いもの、インフルエンザですとか下痢であったり、そういったものでわざわざ小笠原に寄るといケースもありますが、やはり色塗りをしたところは特に重症患者なんです、くも膜下出血であったり、気胸、低酸素血症であったり、つい最近でいきますと脑梗



塞というような方々。色塗りのところの10件の方々は、すべて内地に搬送したという事例です。

あくまで2000人の人口に対する診療所レベルのことですので、当然診療所で対応できない状態というのは多々ございます。対応できなければ、私どもの場合は、海上自衛隊の水陸両用の飛行艇US-1あるいはUS-2というもので、内地の、特に東京都内の病院に運ぶということで対応しているのが実態です。

それは観光客の方であっても運ぶと。実際にこういった外国船籍で外国人の方々も、小笠原の診療所を受診して対応できなければ、責任を持って運ぶという体勢にはなっているところです。

運ぶケースはほとんど海上自衛隊ですが、中には海上保安庁が直接運ぶケースもあります。日本船籍であろうが、外国船籍であろうが、どこかから立ち寄って診療所を受診されたときに、必ず地元の海上保安署には連絡しますし、海上保安署から連絡が来ることになっています。

そういう情報をやりとりしている中で、ケースによっては、海上保安庁独自の患者を運ぶシステム、洋上救急システムというのがありまして、そのルートを使って運ぶケースもございます。例えば父島に患者がいる、通常の上自衛隊じゃない形で保安庁が運ぶ際には、例えば羽田空港から海上保安庁のジェット機、ファルコンであったり、例えば硫黄島の滑走路まで飛び、待機する。その間に、硫黄島の自衛隊の協力を得て、硫黄島に駐機しているヘリが患者を父島まで迎えに来る。ヘリに乗せて硫黄島に連れて行っていただく。硫黄島で海上保安庁のジェット機に移し替えて羽田に運ぶ。それで救急車で病院に運ぶ。という形になります。

中には直接、海上で、海上保安庁がヘリなり巡視船なりで、患者をそのままピックアップして運んでしまう。そういうケースも小笠原近海で年に何件かは発生しているというような状況になっております。

今回の話の中身としては、小笠原の診療所は、こういった日本の南方海域にある唯一の診療所、医療機関ということになります。そして、小笠原が、たまたま、特に外国に出向くような、あるいは遠方で漁業操業をやるような日本の漁船、あるいは外国の船舶、そういった航行の航路に近いところに位置していると。

小笠原はそういった意味では、日本の医療受診の最寄りの地というか、寄港地という側面があるということです。

それからそういった形で診療所を受診したいという話があったときに、当然、拒否は私どもはできませんので受けざるを得ない。そういった船の受診ということになると、時間に関係なく診療所のスタッフは対応せざるを得ない。夜中であろうが朝であろうが対応せざるを得ない。また先ほど申し上げましたが、症状によっては内地の方に運ばなきゃいけない。

それが続けば村の負担も増えると。内地に搬送すると、村の財政負担も当然ありまして、US-1に飛んできてもらう直接の負担は当然ありませんけれども、患者さんを運ぶ際に、必ず内地の医療機関の医者を添乗させなきゃいけないというのがルールになっていまして、その人に対する謝礼金であったり、そういったものを含めて村の方で負担していると。件数が増えれば増えるほど負担は大きくなる。ただ、村が負担した経費の一部分については東京都からは補助金が出ている



のですが。

最後に、国境離島あるいは境界域における離島の役割についてですが、小笠原はそういった地理的環境にある、それから小笠原村の行政としても、そういったものを背負っていかねばいけないという環境にある、ということがあります。

平成15年改正の離島振興法で、法律の中で初めてと、たぶん言っているかと思うのですが、離島の役割的な位置付けが出てきたかと思えます。

その翌年に、小笠原の特別措置法の改正もありました。当然、離島振興法がどういう形で改正されるかというのを注視しながら、小笠原の特別措置法も、国交省と意見調整する中で改正してきたと。

そういった一連の流れの中で平成19年でしたか、海洋基本法が制定され、それに基づく基本方針、あるいは離島の保全管理のための方針の中に、かなり離島の役割、あるいは離島でやらなきゃいけない具体的なところがイメージしやすく、整理がされてきていると、そのこと自体は非常に喜ばしいことだと感じております。

小笠原もそういった意味では、あらためて、なぜこの小笠原で医療活動を続けなきゃいけないのか。その土台にある行政的、あるいは政治的な意義というのはどこにあるんだろうかと。法律では、確かに離島の役割というのはいよいよ始められておりますが、まだ具体的に、離島の役割というものが正直整理できない、もっと勉強しなきゃいけないなというふうに思っているところです。

村としまして、来年度、再来年度、村の総合計画の改正作業を始めるタイミングです。また、小笠原の特別措置法も改正するタイミングに入ってきております。先ほど竹富町の海洋基本計画ですか、非常に興味のある話の内容が出ておりました。

村も、今何も提供できるまとまったものはないのですが、そういったものを改正時期を通しながら、やはり境界地域におけるその役割的な視点も当然外せませんので、そういったところも村として検討をしていきたいと考えている次第です。

非常に雑ばくな説明で申し訳ありません。紹介ということで、この程度でとどめさせていただきます。ありがとうございました。(拍手)

(山上) では質疑応答でございますが、こちらに研究者もおりますし、また島内でさまざまに関心のある皆さんのお話もいただいております。わずかな時間ですけれども、自由にコメント、そして質問などいただければと思います。

(川久保文紀) 千葉県にあります中央学院大学というところからまいりました、川久保と申します。今日はコメンテーターというよりも、岩下先生の方から、自分の専門分野から見た小笠原にきた感想について少し話してくれということですので、その観点からお話ししたいと思っております。

まず、私はアメリカで勉強したことがあるんですけども、ニューヨークと東京を飛行機で往復しますとちょうど26時間です。ここは船で片道約25時間半、アメリカ往復を一気にやっ



まったというような感じです。

世界にはさまざまな「国境」が国の数以上にあると思いますけれども、北アメリカのアメリカとカナダ、それからアメリカとメキシコの国境の管理の問題について、特にテロ以後のそういう国境をめぐるマネジメントの問題について、勉強しております。最近ではアメリカとメキシコの国境というのは、各種のメディアにおいても、すごくホットなトピックとして取り上げられておりまして、アメリカとメキシコの国境というのは、3141キロ、東京とここ（小笠原）が大体1000キロということでその3倍以上あります。アメリカの4つの州とメキシコの6つの州が重なっているわけですが、特にテロ以後、国境の管理、警備というものが非常に強化されまして、私も滞在中に何度かその国境をめぐる現状を見にいきました。

アメリカとメキシコの国境沿いには、フェンスが一部建設されました。最初の計画では、鉄骨製のフェンスが、国境の約3分の1ぐらいのところまで建設される予定でした。それから国境警備隊というのもいまして、これは軍とか州兵とはまた別の部隊でして、テロ以後に著しく増員されました。パトロールしているわけですね。それから最近でいいますと、麻薬をめぐる戦争。ドラッグ・ウォーという戦争が非常に激化しておりまして、この10年くらいで約2万人がその麻薬戦争で命を落とし、戦争が国境間で行われているというような非常にハードで、殺伐としたというんですかね、そういう国境を一つの研究の対象としております。今回、小笠原にまいりまして、豊かな海と自然に恵まれた国境地域というものを体感することができました。日本の陸地面積は、世界で61番目ですけれども、排他的経済水域(EEZ)を入れた海洋面積というのは世界で6番目になると。小笠原がカバーする領域というのは、その3分の1にもなったというようなお話もございました。そういう国境地域、まさに離島とかに暮らす人々の生活感といいますか、いろいろなものがにじみ出ている国境地域がまさに日本の国境なのだということを、この小笠原に来て、それから今日ご報告いただいた自治体の方々のお話を聞いて、そのような感想を持ちました。

ここで非常に大事だと思うのが、海の国境をめぐる安全保障と申しますか、マリタイム・セキュリティ(maritime security)というふうにいわれている分野、これは日本政府も国連の海洋法条約というものを批准することによって、政府も海洋基本計画を作りました。それから内閣官房が事務局となって、総合海洋政策本部というものをつくったりして、ようやく政府としても海の安全保障と、離島の振興・保全を含めた海の総合的な管理というものについて取り組むようになってきました。

それからこういう境界研究ネットワークJAPAN (JIBSN) というものを通じて、境界地域にある自治体間の交流も非常に深まってきているのだと感じました。私も大学というか教育・研究機関に身を置く者として、日本でこういう海の安全保障をめぐる取り組みを、大学できちっとやっているとまだまだいえないのではないかと。先ほど東京大学の海洋アライアンスというものが出てきましたけれども、日本では、横浜国大とか東海大学とかいくつかありますけれども、まだまだこういう海をめぐる安全というものについて、取り組む体制が整っていないという感じを持っています。

そして、こういう離島とか境界自治体を「点」として位置付ければ、点と点をつなぐようなネットワーク型の国境とか、それから単なるボーダーとかラインではない、領土とか領域というものに対して、空間的というか立体的な認識、そういうものを持つことによって、そこで暮らす人々の生活空間も含めた、いろいろなものに肉薄することができるのではないかというような印象を受けました。

JIBSNのようなチームに、さまざまな分野の研究者や自治体関係者が集まって相互学習することも大切であると考えます。そういう取り組みが、海の安全保障をめぐる政府の取り組みの後押しにもつながっていくと思います。それがまたボーダーをめぐるさまざまな問題について、取り組むきっかけになるのではないかと、そのような印象を持ちました。まとまりのない話ではありますが、これで終わります。(拍手)



(黒岩幸子) 岩手県立大学の黒岩幸子と申します。私は北方領土に関心を持って見ているんですけども、何回かこういう境界地域のリトリートに参加させていただいたことを踏まえて、今日の感想を申し上げます。初めて小笠原に来て、今日の朝、小笠原の東京事務所の方が、超遠隔離島という確かそういう言葉が使われたと思うんですけど、確かに東京から1000キロあります。1000キロという距離は大したことはないと思うんですけども、それが船でしか来られないということが他の地域とは違います、まさに日本の海域の広さを実感する旅でした。

今日は、日本の境界の6つのポイントからとても興味深いお話を聞きました。それは一つ一つが非常に面白い、ユニークなお話でした。JIBSNができたということは、そういうお話をただ一つずつ聞いていって、ああ、こんなことがある、こんなことがあるというだけじゃなくて、いずれはこれを総合的に考えて、日本という国が今後どういう国境政策、境界政策といいますか、あるいは境界戦略でしょうか、それをどういうふうに構築していくか、どんなアプローチを取っていくかということ、考えていく必要があるんだろうなと思いました。

その中で、この6つのポイントの何か共通点を見つけ出すのは難しいんですけども、先ほどのお話とも重なりますけれども、あらためて思ったのは、中心と周縁という関係のあり方です。



周縁の方から変わってきていると。そういう周縁に住んでいらっしゃる方たちが、国の政策を超えて、もっと自分たちが生き残るためにどうするかということ、非常に実務的に考えていらっしゃるということです。中心はいつも東京にあるわけではなくて、あるいはソウルだとか、台北だとか、そういうところにも中心があると考えると、中心と周縁のポジショニングが変わってくる、そういう面白いことが起こるということです。

それから周縁であることは、いつも僻地だとか離島だとか離れていて不便だとか、そういう意識だけではなくて、境界を越えて他の地域と付き合うことで、デメリットだけでなくメリットもあるということがわかりました。今までは周縁で関心が持たれるところと言えば、国境問題があるところだけで、すぐそこで国境意識を丸出しにして、北方領土だとか竹島だとか言って揉めているわけです。そういうところだけじゃなくて、まあ、対馬、福岡なんかは一番いい例だと思うんですけど、東京という中心から離れていることは、境界を越えた別の中心に近いということで、そちらへどんどん進んでいこうという動きがあります。

領土問題を持っているところであっても、北方領土問題があるといっても、やはりその国境地域はロシアに近いのですから、そことの交流を何か考えていく必要があるのではないかと、そういうことを思いました。

最近、日本は海洋大国だということで非常に海に意識が向いています。尖閣の問題もあって、日本のEEZはとても広いんだということが強調されて、そのEEZをこれから囲い込んでいかなきゃいけない、海洋大国としての日本の権益を守らなければいけないという、そういう話をよく聞きます。むしろそれよりは、そのEEZを形づくっている離島が、点々とした島々が独自にまたいろいろな付き合いを境界の外に広げて交流していくことによって、EEZを囲い込むんじゃなくて、より外に広がっていく。そして、よりオープンな境界ができるようにしていく、そういう開かれた日本になってほしいなど、そういうふうに思いました。以上です。

(木村崇) 私は木村崇と申します。京都大学を4年前に退職しまして、今無職でございます。今日、小笠原の副村長さんはお話のなかで、確か「内地」という言葉を使われました。私はもう、その言葉を久しぶりに聞いて身が震えるような感動を覚えました。私は北海道出身者で、高校卒業まで18年間住んでいました。そのときは私自身も「内地」と言っていました。ああ、小笠原もそうだったんだということで感動したわけです。JIBSNというのは、要するに「内地」ではない人たちのネットワークなのだ気づいた次第です。

私は「内地」ではないというところに、かえっていろいろな価値があるような気がします。北海道出身者であるということもあって、やはり一番肩入れをしたいのは、根室です。ただ、専門が文学なもんだから、残念ながら知恵はあまりないのですが。ところで、よく考えてみると、根室のすぐ先にあるのは国境ではないといわれても、何ていうんですか、実体としては国境みたいなものですね。日本の政府はそれを国境じゃない、国境は択捉の先にあるんだというようなことを言うけれども、そんなことを言ったって、事実上それは国境となっているのは確かですね。



それを政府はかたくなに認めない。認めようとしな。そうやってどんどん時間がたってしまったわけです。国境がちゃんと確定してないから、実は根室という街はますます、疲弊して行くばかりであるという現実を、ほかの「外地」の人たちにも知っていただきたいのです。そしてぜひ知恵を授けてほしいと思っています。小笠原はうらやましい。どう見ても戦争の危険もあまりなさそうだし、国境線をめぐるトラブルもないし、というような、そんな幸せな境界地域に、根室もやっぱりなしてほしいと願っています。とはいってもこちらでも、中国の今後の動きは気になりますけれど。

そんな幸せな境界地域になるためには、できるだけはやく国境を確定してもらって、根室が国境をはさんでロシアと経済的な交流がどんどん進めて、町が元気になるようにしていくことが大事だと思っています。根室がいつか、韓国との関係を深めようとしている福岡ぐらいの存在になるような日を、やっぱり私は願っています。以上です。

(本間浩昭) 根室からまいりました毎日新聞の本間と申します。先ほど与那国島の小嶺さんから台湾の原発について問題提起がありました。北海道では今、青森県に建設中の大間原発が事故を起こした場合の影響というのが、北海道、特に30キロ圏内にある函館に甚大なものがあるということで問題になっております。大間の場合、自治体を越えた影響ということだけで大問題になっているわけです。小嶺さんの話で、国家とすら認めていない台湾から情報を入手することがいかに難しく、グーグルというものが非常に有効な武器であるということが良く分かりました。逆に言えば、国交がないがために、こういうものでしか情報を得られないというジレンマがあるんだな、と思いました。

実は根室でも今から12年ほど前に、ロシアの貨物船が北朝鮮のポートクリアランス、つまり、積み出し証明書という書類を使って水産物を運んできた事例があったことを思い出しました。ところが日本と北朝鮮との間は国交がありませんから、それを照会する手だてがない。それが正規のものであるか、偽物であるかが分からない。そこでノーズルの状態で水産物が“輸入”され、資源の枯渇に拍車をかけていたという苦い事例があります。

現在はそれが偽物だと判明したこともあって、北朝鮮からの貨物はなくなって、別の偽装形態帯に変わったのですが、北朝鮮との間で国交がないということだけで、アンダーグラウンドな経済が放置されてしまうという現実がありました。日本とロシアとの間には国交があるにもかかわらず、自由に行くことができないという北方四島がある。そうしたジレンマがあります。

そういうときに、新たな視点で物を考えていく必要があって、シンクタンク的なものを、JIBSNあたりが担っていく必要があるんじゃないのかなと、そういうふうに思いました。

(山上) では島にお住まいの方、村民の方、いかがでしょうか。延島さん、いかがでしょうか。もし質問が何かございましたら、ぜひ、よろしく願います。

(延島冬生) 急に振られまして、小笠原村に住んでいる延島と申します。福岡の方から空港なんか考えるよりも航路の問題というお話がありました。実際に世界遺産になって、定期船以外に、特に3月は十何回も観光船が那覇発とか岡山発とか、今までだいたい晴海とかそういうところしかなかったものが、それ以外からみえるわけですね。これが何時まで続くかというのがありますが、大型栈橋がないから、この湾内に沖がかりするわけです。

ということは、上陸するけれども宿泊は船ということで、島にお金が落ちるところは非常に限られています。ちょうど私はガラパゴスに過去2回行きました。それは行ったのは日本ガラパゴスの会主催ということで、全部島に泊まり島にお金を落とす。普通のガラパゴスツアーというのはクルーズ船で、全部船で島々を回って船に泊まると。ガラパゴスから帰るのは飛行機でしたけれどもね。

人がたくさん来ても、そういうかたちで上陸して宿泊してもらわないと島の経済はそれほど変わらない、そういうところの問題を考えなきゃいけないなど。ということは、私のホームページではまったく触れていません。私のホームページはむしろ自然の話とか、あと、先ほど内地という言葉が出てきましたけれども、そういう言葉、小笠原の言葉についても触れていますので、宣伝になりますが、私のサイトも見ていただけたらうれしいと思います。「月刊小笠原諸島」、検索していただくと出てきます。以上、感想と宣伝です。



(山上) ほかの皆さんいかがでしょうか。よろしいですか。では最後の締めを岩下の方からさせていただきたいと思います。

(岩下) 報告とコメントをありがとうございました。小笠原の方が何人かおられますけれど、初めて私たちの議論を聞くと、境界地域とか境界とかってみんな違うやないかと、こんな一緒にして議論をしてもしょうがないやないかと思われるかもしれません。よく言われます。我々は「国境フォーラム」から、もう5年ぐらい議論をやっていますので、そんなことは最初に分かっていて、違うのは当たり前で、別に何かを全部一緒にやろうという話ではなく、それぞれが学んだり



一緒にできる部分で、情報交換をして何かをつくってあげれば良いというスタンスです。これが前提です。

ただし、ではお互いがまったく違って、関係ないかということ、必ずしもそうではありません。ある種の「段階」という考え方を使えば、もっとすっきりします。つまり、国境が決まる前の段階、決まった後で交流を始める段階、決まってはいるのだがいろいろな問題が起こり、それらをマネージする段階といった分け方です。私たちの仲間に根室が入っているのですが、たぶん織田さんは今日もすごくフラストレーションがたまっておられるでしょう。根室の方はこの会議ではいつもフラストレーションがたまります。なぜかということ、交流ができない段階だからです。ほとんど自分たちで何もできない状況に置かれていて、他の地域先の話、交流やマネージの話ばかりを聞かされるのですから。

我々は国境が決まっているということの意味をおさえるためにも、やはり根室のことを忘れてはいけません。また根室の方々にとっては、決してあきらめない、そして国境が決まったときに何をするかということは今から考えてもらう場としてこの会議は意味があるでしょう。国境地帯がさまざまなシーンで直面する段階やその境界の機能というものを、総合的に議論しておく必要があると思います。つまり、みんなが同じ段階にあるのではないにもかかわらず、境界地域の役割や機能についての知見や問題意識を共有することが大事だろうと考えます。

私も小笠原に初めて来たのですが、今日は多くを啓発されました。みなさんの議論を踏まえて、木村さんが言ったことを逆に考えてみました。「小笠原みたいな平和な海」という表現です。いま私が考えているのは、陸の紛争が落ち着いて海に紛争域がシフトしてきているということですが、日本はその最前線にあります。ロシア、韓国、中国、台湾との関係を考えてきたとき、北方領土、竹島、尖閣と未決の問題がある。竹島に問題はないと韓国はいい、尖閣に問題はない日本はいいですが、係争中であるというのが国際的には普通の見方です。

福岡、対馬、釜山のあたりだけが、大陸棚も含めて全部が決まって、唯一安定しかつ協力がしやすい場所といえるのですが、まだまだみなその認識を持ってはいません。地図をみると、オホーツク、日本海、東シナ海のラインが対馬のところ以外は難しいのが現況ですが、将来的には中国と米国の動向をみるとこれがおそらく太平洋域にシフトしていくのではないかと思います。

要するに、いま日本海とか東シナ海で起こっていることが、将来、小笠原の海に起こるのではないかと危惧します。今日、国境の島だと副村長が言われるのを聞いてびっくりしましたが、「国境意識なき小笠原」というのが定番だときいていたのですが、小笠原の意識が変わりつつあるのを実感しました。そういう意味で、将来、起こり得ること、つまり段階という考え方をもう一度使えば、これを先取りするかたちで、今回、小笠原の方と交流できる機会をもてたのは素晴らしいことだと思います。

実務会議ということで、感想をいくつか。小嶺さんの台湾原発が近いという話は、福岡でいえば玄界原発の次に近い原発はたしか韓国にあるはずで、境界を越えた原発問題への対応なども、JIBSN的なテーマの一つになるのだろうなと思いました。



それから、小笠原の医療課長の意見に触発されたのですが、島嶼型医療体制みたいな話。これはJIBSN的に言うと、境界地域型医療体制といったものを考えるということでしょう。それは北方領土で何かあったときに根室に連れてくる、サハリンに何かあったときに稚内に連れてくる。そこで対応できなければ札幌に来る。しょっちゅうじゃないですが、たまにあります。与那国からは台湾に行くのでしょうか。それはこの小笠原でやっていること、外国の方を助けること、これらも参考にしながらコンセプトをつくれるのではないかと思います。

今日の会議は、小笠原から学ぶ、境界地域間で意見を交換するというに加えて、具体的なテーマの発見ということでも成果がありました。JIBSNは若い組織です。取り組むべき課題を洗い出していって、より実りある会議の形をつくっていかれたらと思っています。次はこういう会議を、稚内とサハリンでやります。ハイエックからも全力を挙げて支援するという声がありました。2週間ほどかかるとは思いますが、ぜひ今度は小笠原からもご参加ください。今日はどうもありがとうございました。(拍手)



**JIBSN、
小笠原で会議します。**

日時 2012年 **2/14** 火 17時～20時
会場 小笠原村地域福祉センター 2階会議室

境界地域研究ネットワーク JAPAN 小笠原会議
JAPAN INTERNATIONAL BORDER STUDIES NETWORK (JIBSN)

【プログラム】
16:45 開場 受付開始
17:00 開会 挨拶 石田和彦(小笠原副村長) 司会 山上博信(日本島嶼学会)
17:05 「JIBSNの活動と展望」 岩下明裕(北海道大学スラブ研究センター)
17:15 「国境地域における取組み」 小嶺長典(与那国町) 小濱啓由(竹富町) 織田敏史(根室市)
高田喜博(北海道国際交流・協力総合センター) 新井直樹(福岡アジア都市研究所)
18:30 質疑応答
18:40 「日本の南方域における医療」 樋口博(小笠原村医療課長)
19:00 質疑応答 総合討論

* 資料（「小笠原村の医療」平成23年版より）

小笠原村～東京間の交通手段は、約6日に1便、片道約25時間の定期船「おがさわら丸」しかなく、当村診療所に対応できない救急患者が発生した場合は、東京都を通じ、海上自衛隊の救難飛行艇（水陸両用）を要請し、都内病院へ搬送していただいている。

急患搬送は、村民のほか、観光客、仕事での来島者、近海で操業中の他県の漁業従事者、遠洋航海の船員の患者も少なくなく、外国船籍の乗組員を搬送することもある。

日中における急患搬送は海上自衛隊の救難飛行艇（US-1,US-2）により搬送されるが、救難飛行艇は有視界飛行であり、照明のない海上に着水できず、日没後の搬送はできないため、夜間における急患搬送は、硫黄島の海上自衛隊のヘリにより患者を硫黄島に搬送し、滑走路を有する硫黄島の基地から救難飛行艇等で内地に搬送される。

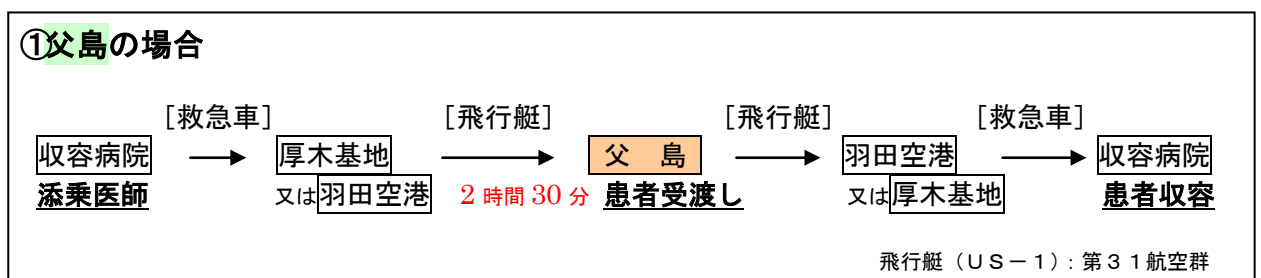
このヘリによる夜間搬送は、父島では平成13年度から、母島では平成14年度より実施されており、これにより日没後の搬送が可能になったばかりでなく、要請から病院に收容されるまでの平均所要時間が短縮された。

〔急患搬送〕

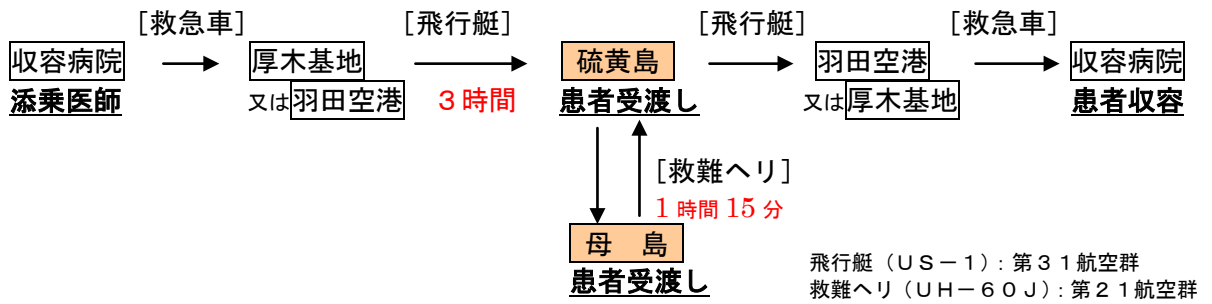
【過去10年間の救急患者搬送実績】

年度	年間搬送実績				島別内訳				
	件数	人数	病院收容までの平均所要時間	(内) 夜間 件数	父島		母島		硫黄島他 件数 (夜間)
					件数	(夜間)	件数	(夜間)	
H13	25	26	9時間06分	(12)	23	(12)	2		0
H14	35	37	9時間21分	(9)	29	(8)	5	(1)	1
H15	39	44	9時間27分	(14)	34	(12)	4	(2)	1
H16	28	29	9時間06分	(6)	23	(5)	4	(1)	1
H17	24	27	10時間13分	(11)	21	(11)	2	(0)	1
H18	20	21	9時間32分	(12)	15	(8)	5	(4)	0
H19	32	34	9時間58分	(16)	29	(15)	3	(1)	0
H20	36	39	11時間02分	(8)	24	(6)	5	(2)	7
H21	22	23	9時間40分	(12)	15	(10)	7	(2)	0
H22	21	23	9時間16分	(5)	15	(3)	4	(1)	2(1)

〔搬送経路〕



②母島の場合



③夜間の場合 (父島、母島とも)

搬送経路 ⇒ ②と同じ

[夜間搬送運用開始] 父島 平成13年5月 9日

[外国船・他県船の救急受診状況]

当村は、日本国の南方海域に位置していることから、当村診療所には、南方域において操業する他県船籍の漁船、作業船、調査船、実習船などのほか、外国船籍（多くは台湾）の漁船等の患者が、救急で受診するケースもある。

【過去8年間の救急受診実績】

年度	年間受診実績			船籍別内訳					
				外国船	日本船				
	件数	人数	内地搬送	漁船	漁船	作業船	調査船	実習船	その他
H15	7	7	0	0	5(5)	0	0	2(2)	0
H16	16	30	2件2名 (日本船籍)	3(3)	10(21)	2(2)	0	1(4)	0
H17	6	8	1件1名 (日本船籍)	0	5(7)	0	0	1(1)	0
H18	14	14	0	2(2)	7(7)	3(3)	1(1)	0	1(1)
H19	9	10	1件1名 (日本船籍)	3(4)	3(3)	1(1)	1(1)	1(1)	0
H20	8	8	2件2名 (台湾船籍) 1件1名 (日本船籍)	4(4) 1件1名は 貨物船	2(2)	1(1)	1(1)	0	0
H21	5	5	1件1名 (パナマ船籍)	1(1)	4(4)	0	0	0	0
H22	5	6	1件1名 (日本船籍)	1(2)	3(3)	0	1(1)	0	0

()内は人数



小笠原会議リトリート2012

2月12日 (日)

- 08:30 竹芝旅客ターミナル集合
10:00 東京出港
打ち合わせ
洋上セミナー「小笠原の歴史と現在」(講師：山上博信)
GCOE・DVD上映会(解説：岩下明裕) 船中泊

2月13日 (月)

- 11:30 父島入港 / 12:30 父島出港 / 14:40 母島入港
午後 **母島：フィールドワークⅠ 戦跡調査を中心に**
19:00 **経験交流セミナー**(小笠原村母島支所大広間：安藤重行村民会館館長) 母島泊

2月14日 (火) 母島：フィールドワークⅡ 境界離島の課題

- 午前 聞き取り調査 母島小中学校(へき地教育について：日野元信校長)
営農研修所(佐藤澄仁所長)
医療(急患搬送ヘリポートほか視察)
開拓と欧米系住民についての調査(ローズ記念館ほか)
海洋環境開発など
12:00 母島出港 / 14:10 父島入港
午後 村役場表敬訪問, 打ち合わせ, 父島視察
17:00 **「境界地域研究ネットワークJAPAN」小笠原会議(別添)** 父島泊

2月15日 (水) 南島ほか：フィールドワークⅢ 戦跡と世界遺産

- 午前 海上視察(自然遺産・南島、戦跡・戦前の民有地・捕鯨基地跡など)
地元研究者によるレクチャー
欧米系住民との対話(南スタンレー)
午後 視察(亜熱帯農業センター, 海洋センター, 水産センター) 父島泊

2月16日 (木)

- 14:00 父島出港 (遊漁船団見送り) 船中泊

2月17日 (金)

- 15:30 東京入港
16:00 **JIBSN小笠原会議総括セミナー(森下一男小笠原村長ほか)**

[ジャーナリストの眼]

動物が人間を動かしていた時代

本間浩昭

野生動物が人間を動かしていた時代があった。帝政ロシアの毛皮商人は最高級の毛皮獣・クロテンを追って広大なシベリアを東進した。クロテンの資源に枯渇の兆しがみえたころ、標的はラッコに移った。黒いビロードの毛皮は、淑女にとって自らを着飾る美の極致であると同時に富の象徴でもあった。とりわけ「世界一高価な毛皮」（ステン・ベルクマン『千島紀行』）とまで言われたラッコは乱獲される運命にあり、絶滅の淵に追い込まれた。ラッコを追いかけて千島列島を南下した毛皮商人らは、開拓した領土を維持するための補給路を求め、日本に通商を求めた。18世紀末のことである。

同じころ、米英は鯨を追って太平洋に進出。やがてマッコウクジラの群泳する海域を日本の南側に見つけ、捕鯨のゴールドラッシュが始まった。鯨油は街路を照らすランプの灯となり、ろうそくは、寝るしかなかった夜の暮らしに、余録の時間と彩りを添えた。「鯨油は闇を払い、文明をもたらす光そのものだった」。ジョン・アダムズ米国第2代大統領がそう演説したほどである（森田勝昭『鯨と捕鯨の文化史』）。中でもマッコウクジラの脳油は1850年ごろ1バレル100ドル強の値が付いたという。これは当時の価格である。現在の原油価格とほぼ同じというのも奇妙な一致だが、なんとも高価な灯りであった。巨大な頭部からくみ出した脳油は、さらさらした上質の工業用油で、織機など精密機械の潤滑油として重宝され、英米の産業革命をも支えた。-60°Cの超低温でも凝固しにくい性質から、ロケットエンジンや潜水艦の位置測定システムの潤滑油などとして現在も使われている（副島隆彦『エコロジーという洗脳』）。

日本は鯨族に開国させられた——桑田透氏は戦前、『鯨族開國論』でそう看破した。もちろんペリーには、太平洋を横断する最短航路づくりという狙いもあったが、一義的には捕鯨船の薪水・食糧の補給拠点を求めて、である。



手つなぎラッコ（納沙布岬）



並んで泳ぐマッコウクジラ（知床）



ラッコやマッコウクジラに象徴される動物が人間を動かした結果、それまで漠然としていた境界（ボーダー）の均衡も崩れた。ある意味で「資源としての動物」を追い求めた人間が、ボーダーという灰色の領域に足を踏み入れ、鎖国・日本の扉を半ば強引にこじ開けたのである。

ラッコの利権などをめぐる千島列島でのロシア・アイヌ・日本という三者の接触が日露の国境画定の背景にあったことはよく知られている（渡辺京二『黒船前夜』）。旭川市博物館学芸員、瀬川拓郎氏の表現を借りれば、アイヌは「境界集団」である（『アイヌの歴史』）。小笠原を今回訪れ、鯨を追って住み着いた欧米系住民の歩んだ歴史と現在を目の当たりにし、つくづく思った。「動物が人間を動かし、結果として、海に“見えない壁”を築くことになった」のだと。

海のゴールドラッシュ

日本が鎖国をしている間、世界は大きく動いていた。ポルトガルやスペインが七つの海を股にかけていた大航海時代が終わり、米英仏が鯨油を求めて世界の海を荒らし回っていた。米国の捕鯨船が南米大陸南端のホーン岬をかわし、太平洋にマッコウクジラを追い始めたのは 1791 年のこと。折しも、帝政ロシアの女帝・エカテリーナ 2 世から「不凍港を確保するため、日本と交易を行うべし」との密命（須藤隆仙・好川之範編『高田屋嘉兵衛のすべて』）を受けたアダム・ラクスマンが根室に来航する前年であった。捕鯨船はチリ沖、南インド洋、ニュージーランド沖などで乱獲の限りを尽くした末、1820 年に日本の南方にマッコウクジラの豊かな海域を見つけ、「ジャパン・グラウンド」と名付けた。最盛期には米国船だけで 735 隻（1846 年）がひしめき、推定 2 万人が乗り組むという「海のゴールドラッシュ」にわいた（川澄哲夫『黒船異聞』）。当時の捕鯨産業は「米国商業史上最大のビジネス」（山下渉登『捕鯨Ⅱ』）だった。それは、カリフォルニアで金鉱が発見（1848 年）され、労働市場の陸へのシフトを経て、ペンシルバニアで油田の採掘が始まる（1859 年）まで続いた。

長らく無人島だった父島に欧米系とポリネシア系の人々が定住するに至った経緯については、毎日新聞北海道版「小笠原から見た北方領土」②（2012 年 3 月 31 日朝刊掲載）で触れた。米国のチャールズ・タウンゼント氏が集計したマッコウクジラ 3 万 6908 頭（1761~1920 年）の捕獲位置をドットで落とした「アメリカ捕鯨船の航海日誌記録が示す特定のクジラの分布」（日本鯨類研究所提供、再掲）は、実に興味深い。この図は、北緯 25~40 度線に沿ってハワイの東方沖まで長く延びる海域と三陸沖とをつなぐ巨大な三角形の海域「ジャパン・グラウンド」に、いかに多くのマッコウクジラが生息し、その西端に近い小笠原が、捕鯨船に薪水を補給する拠点として不可欠な存在であったかを如実に物語る。

『アメリカ捕鯨産業史』をまとめたアレクサンダー・スターバック氏の推計では、アメリカ捕鯨全盛期の 72 年間（1804~1876 年）に全世界で捕獲された鯨は、約 42 万頭（マッコウクジラ約 22.5 万頭、セミクジラ約 19.3 万頭）だという（森田、前掲書）。このうち 1830 年ごろから十数年にわたって中心となった漁場が「ジャパン・グラウンド」であった。当時は 1 航海平均 42 カ月（1842~57 年）という長い航海（山下、前掲書）だったが、東端に近いハワイまでの間に良質

の水と食糧を供給できる有人島は他になかった。それまで誰も住んでいなかった小笠原に人々が住み着き、マッコウクジラを狙う捕鯨船相手に経済行為が始まるのは当然の流れであった。

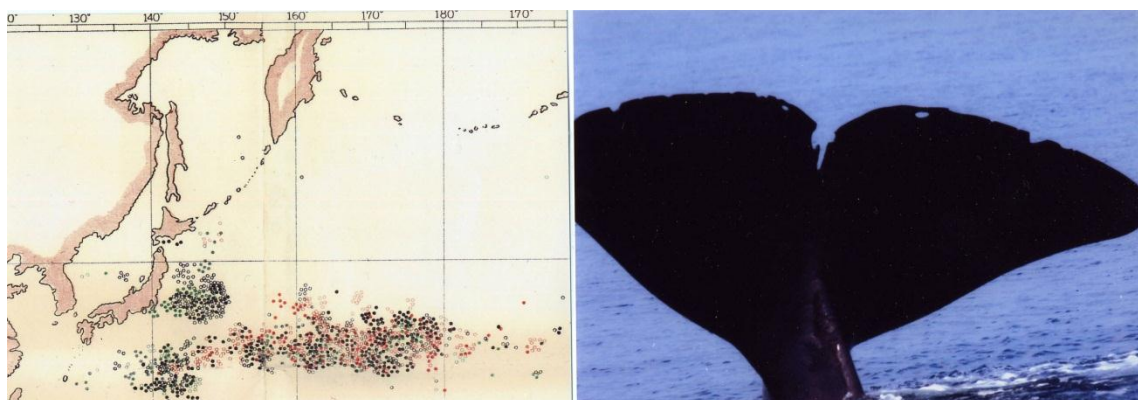
中でもアオウミガメは重要な動物性たんぱく源として重宝された。餌や水をやらなくても1年以上生きるので、狭い船内でも非常に飼いやすかった（ナサニエル・フィルブリック『復讐する海』）。スープは絶品だし、肉も油も美味。油はランプの灯にもなった。嘉永6（1853）年当時の価格で1頭2ドル。油は1樽10~20ドルで取引されたという（倉田洋二編『寫真帳小笠原』）。

一衣帯水の深海の回廊・日本海溝

マッコウクジラの頭に詰まった脳油は本来、この鯨が好物のイカ類を求めて深海に潜るためのものである。英国王立海洋研究所のM・R・クラーク博士の説によると、脳油は約33℃で液体となり、約29℃で固まる。深海に潜りたいときは鼻道から冷たい海水を吸い込んで脳油の比重を重くし、浮上したいときには脳油の周囲に張り巡らされた毛細血管に血液を通して温め、脳油の比重を軽くする（加藤秀弘『マッコウクジラの自然誌』）。大型のオスが3000メートル以上も潜水できるのは脳油が潜水時の浮力調整に大きく寄与していればこそである。

東日本の太平洋側は「日本海溝」（最も深いところは水深8020メートル）が連なり、南側に「伊豆・小笠原海溝」（同9780メートル）、北側に「千島海溝」（同9550メートル）が延びる。さらに知床から北方領土にかけてのオホーツク海も水深1000メートル以上で、夏にオスが索餌回遊する海域に当たる。近年はマッコウクジラ・ウオッチングの拠点にもなっており、いずれ写真などの個体識別で小笠原との行き来も確認されるであろう。なにしろ三つの海溝を「深海の回廊」として、小笠原と北方領土は一衣帯水の関係にあるのだから。

この時代の捕鯨船がマッコウクジラを標的にしたのは、もう一つの理由があった。大半の鯨は海水より比重が重いため、死ぬとすぐに沈んでしまう。へたをすれば捕鯨船もろとも海の底に引きずられかねないため、沈む鯨の捕獲は極力避けた。ところがマッコウクジラは厚い皮下脂肪と脳油を有するため、体が浮きやすい。やがてマッコウクジラから「標的トップ」の座を奪ったセ



マッコウクジラの捕獲位置図（日本鯨類研究所提供） 個体識別の参考になる穴の開いた尾びれ（知床）



ミクジラも沈まない。皮下脂肪が厚いため、同じ理由からホッキョククジラも沈まない。おまけに動きも緩慢ゆえ、いずれも執拗に狙われる運命にあった。

それでも乗組員が命を落とすことはあった。当時、捕鯨船に乗った一人であるハーマン・メルヴィルは、1851年出版の小説『白鯨』に、ガラパゴス諸島沖で1820年にマッコウクジラの攻撃を受け、乗組員20人が3カ月間漂流した捕鯨船エセックス号の実話を折り込み、沈まない鯨でさえあなどれないことを伝えている（フィルブリック、前掲書）。

前払金や支度金が用意され、給料を受け取りながら世界の海を見て回れるとはいえ、労働は過酷でハイリスク・ハイリターン、しかも荒くれ者が長期間、狭い船倉で暮らすという劣悪な環境である。脱走して小笠原に安住の地を求める船員がいても不思議ではない。「欧米系」と呼ばれる人々の中には、そうした経緯で定着した人もいた（石原俊『近代日本と小笠原諸島』）。

船の性能が向上すると、人類は射止めた直後に沈んでしまう鯨まで狙えるようになった。やがて国際捕鯨条約（1937年）で捕獲頭数が決められ、「シロナガスクジラ換算単位（BWU）」が導入された。ところがこれは、種の保存や持続的活用という観点からではなく、鯨油の価格暴落を防ぐために作られた条約だった。国別による捕獲頭数の制限もなく、BWUの上限に達し次第、その年の操業を終了するという「オリンピック方式」のため、かえって大型鯨類の捕獲競争を煽る結果となった（小松正之『クジラ その歴史と科学』）。

砲手らの給与も、出来高払いの「レイ・システム」（山下、前掲書）のままだった。条約で捕獲頭数が割り当てられてしまった以上、鯨油の産出量が多く見込まれる種から狙われるのは必然だった。最初の標的とされたのが体長30メートル前後もあるシロナガスクジラで、中でも妊娠中のメス→メス→オスという図体の大きな順に捕獲された。こうして世界最大の哺乳類を絶滅の淵へと追い込んで行った。小笠原を繁殖海域にしているザトウクジラも当然のことながら乱獲された。鯨油の産出量の多い巨大な種、それも体の大きな順に標的にされたのである。

北からはラッコを狙う毛皮商人が

帝政ロシアは12世紀以来、毛皮商人にクロテンをはじめとする毛皮獣をシベリアに追わせ、毛皮税（ヤサーク）を納めさせた。毛皮は16~17世紀のロシア最大の輸出商品で、17世紀はじめには国庫収入のトップ（約11%）を占めた（和田一雄・伊藤徹魯『鱈脚類』）。「シベリアは毛皮によって拓かれ、ロシアは毛皮によって富んだ」（山中文夫『シベリア五〇〇年史』）のである。

ラッコは「都爾格（トルコ）と交易するに、上品なるは一張価銀八、九百枚、下品なるものも二、三百枚に下らず」（桂川甫周『北槎聞略』）。一方、クロテンは「都にては上品なるもの一枚銀百二十枚、下品なるは六、七枚なり」（桂川、前掲書）としている。江戸後期に嵐に遭い、漂流8カ月でアリューシャン列島・アムチトカ島に流れ着き、10年の歳月を経て帰国した伊勢の船頭、大黒屋光太夫からの聞き書きにそうある。

毛皮商人はクロテンを追ってシベリアを東進、やがてオホーツク海に出ると、ラッコやオットセイの海獣猟に長けたアリュートや千島アイヌに捕らせ、ヤサークを納めさせた。毛皮獣をとり

尽くすとロシアは、アラスカとアリューシャン列島を米国に二束三文（720万ドル）で売り渡した（1867年）。毛皮獣のいなくなった大地は、彼らにとって価値ないも同然であった。だがその29年後、アラスカで金鉱が発見され、ゴールドラッシュに湧くのみならず皮肉なものである。

狩猟の標的が海獣のラッコへと切り替わったのは、ベーリングの探検以降である。ロシア皇帝・ピョートル1世はアジアと米国の両大陸がつながっているかどうかを見極めさせるため1724年、スウェーデンの海軍大佐・ベーリングに探検を命じた。第2次探検の途中で大佐は命を落としたが、1741年にカムチャツカに帰還した隊員は約900枚（カラー・スサンネ「安永年間のロシア人蝦夷地到来の歴史的背景」）のラッコの毛皮（当時の呼び名は「カムチャツカ・ビーバー」）を持ち帰った（森永貴子『ロシアの拡大と毛皮交易』）。漆黒の毛皮は一攫千金を狙うコサックや毛皮商人の野望に火をつけた。ラッコがクロテンに代わって国を動かすようになったのである。植民地・アラスカを経営するため皇帝は1799年、半官半民の特権株式会社「露米会社」を創らせ、独占的な猟業と毛皮商業権を与えた。正式名称は「皇帝陛下の庇護下にあるロシア・アメリカ会社」である（森永、前掲書）。

毛皮の独占権を与えるに当たってロシア皇帝は露米会社に対して条件を提示した。「拡張した植民地の経営に責任を持つ」と。その当時、植民地の生活必需品を調達するのに、モスクワ～シベリア～オホーツク～ベーリング～アラスカという気の遠くなるようなルートで運んでいた。この世界最長の輸送路を短縮するため露米会社の支配人・レザノフは、南米のホーン岬経由のショートカットの航路を開発した（和田ら、前掲書）。当時はパナマ運河やスエズ運河はなく、短縮航路といえども片道1年を要したのだが、日用品を補給するための重要拠点と目されたのが日本だった。極端に言えば、帝政ロシアが日本に開国を迫る遠因として、ラッコなどの毛皮獣の存在があったともいえる。

ラッコ猟と食糧としてのステラーカイギュウ

「泳ぐぬいぐるみ」に狙いを定めた狩猟者は、コマンドル諸島周辺に生息していた海牛類の一



ミナミセミクジラ（日本鯨類研究所提供）



アオウミガメ（山上博信氏提供）



種・ステラーカイギュウを絶滅に追い込んだ。体長 7~8メートル、体重 7~8 トン（神谷敏郎『人魚の博物誌』）という巨大な人魚（セイレーン）は警戒心が乏しく、捕獲しやすいばかりか、美味でもあった。「狩人たちのタンパク源は、大海牛を狩猟することによって現地調達された。この結果、大海牛はラッコの毛皮を得るための怒濤の下敷きとなって絶滅してしまう」と神谷氏は書いている（前掲書）。ラッコやオットセイを追う荒くれ者が、タンパク源として食べ尽くしてしまったのである。

医師兼博物学者の G・W・ステラーは、ラッコをはじめとする海棲哺乳類の克明な観察記録「海獣について」を『ロシア科学アカデミー紀要』に発表、「大海牛は人間を少しも恐れないので、その背中を岩礁の上から長い棒で叩いたりしても逃げることもなかった」と書き残した（ジェシー・ホワイト『マナティ、海に暮らす』）。優れた博物学者として知られるステラーも、この動物の運命は見通せなかったとみえ、「今後その肉や脂を十二分に利用しても大海牛の数はそう減ることはなかろう」と楽観視していた（ホワイト、前掲書）。

米国国立自然博物館のレオンハルト・ヘス・スティネゲール氏は、発見当時（1741年）の生息数を推定 1500 頭としている。だが 27 年後の 1768 年を最後にこの世から姿を消した。ラッコもまた、ベーリング一行の発見から 126 年間に 80~100 万頭、一説では 150 万頭が犠牲になったと推測され、絶滅寸前まで個体数を減らした（吉川美代子『ラッコのいる海』。「資源略奪の時代」である）。

露米会社設立の翌年、日本側もラッコの捕獲に着手

幕府は寛政 11（1799）年、松前藩から蝦夷地の支配権を取り上げ、直轄管理することにした。その翌年、高田屋嘉兵衛は、場所請負人として択捉島でラッコ猟を始めた（北水協会編纂『北海道漁業志稿』）。帝政ロシアの庇護の下で「露米会社」がラッコ猟に本格着手したのと同時期に、幕府も直轄で捕獲し始めていた。まるでシンクロシティ（共時性）のように。1801 年からは栖原小右衛門と伊達林右衛門がラッコ猟を引き継ぎ（『函館市史』）、税舗が設けられた。会所で上皮 1 枚を玄米 8 升入り 20 俵と交換（和田、前掲書）したという記録もある。幕府の狙いは、ロシアの脅威に対して、ある種の防波堤を築くことであったが、ロシア南下の背景に見え隠れするラッコという毛皮獣の存在に特段の注意を払った形跡はうかがえない。

高価なラッコの毛皮に目をつけたのは、ロシアと日本だけではなかった。やがて米英も千島列島でのラッコ猟に参画するようになった。明治政府が誕生して間もない時期、ラッコを枯渇寸前まで追い込んだのは、まさに米英の密猟船だった。「ジャパン・グラウンド」でマッコウクジラの資源を乱獲したのと同様、ボーダーの警備体制が整わないうちに、他国の船が日本の国境を侵し、高価な動物資源を荒らし回るという構図がここにもある。

中でも英国人ヘンリー・ジェームス・スノーや米国人キンバリーらは 1872 年から 10 年間で計 8325 頭のラッコを捕獲した（スノー『千島列島黎明記』）。明治政府は 1873 年、択捉島に「海獣密猟取締所」を設置し、ラッコ猟を官営の産業とする一方で、砲艦 2 隻を派遣して外国密猟船の



尾びれを上げるザトウクジラ（小笠原）



雪の上に現れたクロテン（知床）

取り締まりに当たった（スノー、前掲書）。

ラッコの生息域は主に海岸線近くの岩場だが、沿岸が騒がしいと沖合に出る。当時は領海 3 カイリで、外国船はそれより沖に出たラッコを合法的に仕留めることができた。ところが日本の取り締まりが手薄だったため、外国船は沿岸まで入り込んで平然と猟ができた（スノー、前掲書）。

さらに幕末に米英仏露蘭などと結んだ不平等条約が取り締まりを骨抜きにした。領事裁判権がこれら諸外国に認められていたため、いくら密猟船を捕まえても、函館の領事に引き渡すことしかできなかったのである。スノーは『北千島調査報文』の中でラッコなど毛皮獣の枯渇にふれ、「もし日本政府が適切な保護策を採っていたら、永久の財産になったであろう」と保護政策の遅れを指摘しているが、それができるような環境になかったのも事実である。

小笠原の欧米系住民も千島列島のラッコ猟に

実は、千島列島で繰り返された外国船によるラッコの乱獲・密猟に、はるか 2000 キロ以上も離れた小笠原から欧米系の住民も参画していた。有吉佐和子『日本の島々、昔と今。』にジュリー・セーボレ氏（1970 年当時 65 歳）の話が出てくる。セーボレ氏の祖先はメイフラワー号で英国から米国・ボストンに渡って来たという。有吉女史に父の職業を問われてセーボレ氏は「ラッコやオットセイとっていて、漁民でしたよ」と答えている。

小笠原滞在中にこの話の信憑性を確かめたかったが、時間的制約もあって調べきれなかった。半ば諦めていたところ、「月刊小笠原諸島」の延島冬生氏が二つの文献を探して下さった。一つは、英国の帆船「トリー号」でセーボレー、ロヒンソンら 3 人が、日本人水夫各 3 人の乗る 3 隻のボートにそれぞれ乗り込み、セキレテン地方沿岸で合計 98 頭（多いときは 1 日 27 頭）のラッコを猟銃で捕獲した、とある。尋問の時期は 1878 年 11 月以前。横浜発着で、約 5 カ月の航海だった（小花昨助「六一 島民帰島届ラッコ猟尋問ノ件」、『小笠原島要録』第三編 55 収録）。英国の帆船（スクナー）ではあるが、乗組員計 12 人のうち、日本人水夫が 9 人を占めている（前掲書）。どうやら船を仕立てたのは英国であっても、そこに日本人や小笠原の欧米系住民も乗り込み、密

猟に加担していたという構図が浮かび上がる。

もう一つの文献も、同じ小花氏による聴き取りである。小花氏は、幕府の外国奉行定役元締佐として小笠原島開拓の御用を務め、後に新政府の小笠原島内務省出張所長で裁判所の判事も兼ねた開拓草創期の功労者である（田畑道夫『小笠原ゆかりの人々』）。こちらの文献には乗船した日付と姓名も記されている。1879年3月6日、父島に入港した郵船豊島丸に5人の外国人が乗船、横浜から北海道のラッコ猟に傭われたとして、英国人チャーレス・ロビンソン、同、デーベス・ウェブ、米国人ホーレス・セーボレー、同、ロベルト・セーボレー、スペイン人ゼム・チュクラブの名がある（「百五 在住外国人出稼ノ件」、『小笠原島要録』第四編 81 収録）。

『千島列島黎明記』には、「三月初旬に射手三人を雇うために小笠原諸島へ行くことにし、蒸気船トヨシマ丸に乗った」との記述があり、スノーが父島でスカウトしたという史実が、有吉女史の聴き取り、小花氏の記録と一致した。「諸島には、野豚、山羊、鹿が生息していて、土地の若者たちの狩りの対象となっていた。これが彼らを優秀な射撃手にすると同時に、ボートやカヌーでの海亀狩りや漁業が彼らを優れたボートマンにもしていた。こうした理由で、彼らは、ラッコ射手としてもはやされていたのである」とある。ただ、父島で契約したのは「二人の射手」とあり、5人の名を記した小花氏の記録との齟齬もある。

海に生きる千島アイヌも再び海に

1875年に樺太千島交換条約が結ばれ、日本国民として生きて行くことを選んだ北千島・占守島の千島アイヌ 97人は色丹島に移住させられた。彼らは「昔からこの島の住民で、よそへ転ずることは望まない」といったんは断ったが、「遠隔の地にあり、航路も危険で撫育が行き届かない」という明治政府の一方的な理由で強制移住させられたのである（小坂洋右『流亡』）。

移住先の色丹島で千島アイヌは、開拓使から住居や農地をあてがわれた。だが、毛皮獣を追って海で生きていた男たちに、農業や沿岸漁業、牧畜をやらせるのは無理があったのだろう。彼らは新しい生活に適應できず、北千島へ「出稼ぎ猟」に行くようになった。ラッコやオットセイを追う元の暮らしに戻ってしまったのである。「シコタン良くない。ウシシル良い。トドたくさん、ラッコたくさん、オットセイたくさん、鳥たくさん、シコタン良くない」。スノーは1889年、色丹島で千島アイヌの男性からそう聴き取った（小坂、前掲書）。やがて色丹島の千島アイヌの男女比は1対2になった。病死する者も相次ぎ、人口は激減した（ザヨンツ・マウゴジャータ『千島アイヌの軌跡』）。ボーダーに暮らす人々の悲哀が凝縮して見える。

北千島から色丹島に強制移住させられ、不遇をかこっていたアイヌの狩猟本能と小笠原の欧州系住民が「昔取った杵柄」で海獣狩猟に参画した事例を同列に論じる気はないが、海の獣を追って生きてきた男たちの「生きる場」は、いずれもグレーな霧の立ちこめるボーダーの海だった。

幕末のボーダー包囲網

日本の北西のボーダー・対馬も幕末、ロシアと英国に狙われていた。1861年2月、ロシアの軍



遊泳するオットセイ（噴火湾）



聳島のアホウドリ（中山隆治氏提供）

艦ポサドニック号は船体の修理を名目に浅茅湾に来航。対馬藩や幕府の再三の抗議にも耳を傾けず、6カ月以上も居座り、退去しなかった（ポサドニック号事件）。居座りに神経をとがらせていた英国のオールコック総領事が幕府に協力を申し出たほどである。「ロシアの侵略的行動を阻止する用意がある」と（田中弘之、『幕末の小笠原』）。一方で、本国には英国による対馬占領を提案していた。「もし、露艦がこれを拒む場合は英国自身がこれを占領すべきである」として（坂本藤良『小栗上野介の生涯』）。

英軍艦サラセン号とアクティオン号はすでに1855年と59年、対馬の近海を測量していた。59年の来航時には上陸し、対馬藩に租借権を要求するほどであった。函館の英国領事ホジソンは「満州、朝鮮が一度ロシア化されたならば、それは必ず対馬を必要とする。ゆえに我々（英国）の急務は、この対馬を極東のペリム島とすることである」と日記に残した（田中、前掲書）。ペリム島は紅海の入りに位置し、スエズ運河につながる戦略的な要衝で、当時は英領（現イエメン領）であった。対馬は東アジアの戦略的な要衝として、間違いなく英露に狙われていた。後の日露戦争で日本海軍がバルチック艦隊を迎え撃ったのは、まさに対馬沖だった（日本海海戦）。

その32年前の1827年、英国は小笠原の領有を宣言していた。海軍の探検調査船「ブロッサム号」のフレデリック・ビーチー艦長は「国王ジョージ4世の名においてこれらの島々の領有を宣言する」と記した銅板を父島・洲崎の海岸の樹にクギ付けし、二見湾を「ポート・ロイド」、父島を「ピール島」、母島諸島を「ベイリー群島」などと命名した（田畑、前掲書）。翌28年にはロシアの探検調査船も来航した。米国のペリーは日本に開国を求める直前直後、父島に寄港した上で、水場のある土地を貯炭所用地として買い取った。さらに母島の領有宣言を行い（1853年）、米国人を首長とする“自治政府”を設立した。統治機関の名前は「ピール島コロニー」である（田畑、前掲書）。

日本に開国を迫るペリーの艦隊が二見湾に到着したのは同年6月14日。一方、プチャーチン率いるロシアの黒船が同湾に到着したのは7月3日だった。わずか19日間の差でペリーが早かった。実はロシアは、米国議会が「日本を開国させるための使節の派遣を議決した」との情報（田

中、前掲書)を得るや、1852年10月19日、サンクトペテルブルグに近いバルト海のクロンシュタット港から「パルラダ」を出帆させていた。それはペリー提督率いるフリゲート艦「ミシシッピ号」がバージニア州ノーフォーク港を出帆(11月24日)するより36日も早かった。ところが、旗艦「パルラダ」は建造21年の老朽船のため、英国・ポーツマス港で船体修理に約2カ月を要し(田畑、前掲書)、小笠原への到着が遅れたのである。プチャーチンは10日間かけて小笠原を調査した後、長崎に向けて出港した。その翌日の7月14日、浦賀ではペリーが幕府に大統領親書を手渡していた(田畑、前掲書)。

イソップ寓話の「ウサギとカメ」をほうふつとさせる史実だが、ひと足先にスタートしても、途中でもたもたしていると抜かれてしまうという結末からは、どのような教訓が得られるのだろうか。プチャーチンは翌年、下田で「安政東海地震」に遭遇。その際、津波で流された日本人3人を救助し、被災者の治療に当たる船医の派遣まで申し出た。

ところが震災で破損した自船は回航途中に沈没してしまう。そうした最悪の事態の中で、幕府と冷静に交渉をまとめて日露通好条約を結んだのであるから、大人物である。さらには村人と共に代船を建造して帰還、その後も陰に陽に日露の友好に尽くした。こうした功績から明治政府は1881年、勲一等旭日章を贈った。白石仁章『プチャーチン』のサブタイトルには「日本人が一番好きなロシア人」と添えてある。塞翁が馬である。

とはいえ、日本に開国を迫った二つの艦隊がこの時期、いずれも小笠原を足場とした(田中、前掲書)のは、戦略拠点として父島がいかに重要な島であったかの証左で、まさに「幕末のポーター包囲網」である。そこには領土の拡大を目論む帝国主義と、動物を追って一攫千金を夢見る荒くれ者とが阿吽の呼吸でうごめく構図がほの見える。

そもそも小笠原は、幕府の探検船が1675年、領有宣言をしていた。その5年前、阿波のミカン船が遠州灘で遭難して母島に漂着。半年後に帰還した乗組員らの報告に基づき、幕府は探検船「富国寿」を派遣。巡検の末、父島の宮ノ浜に祠を造り、脇に「此島大日本之内也」と記した。国境に対する意識がまだまだ希薄な江戸の前期に、幕命を受けた探検船が領有を宣言していたのである。「時代背景を考えても、これは実に画期的なことであった」と田中氏は指摘する。

だが、その後幕府は小笠原を事実上放置していた。幕末～明治初期に英米露がしやにむに自国の版図としなかったのは僥倖だったと言うしかない。英国はアヘン戦争の結果、香港の割譲に加え、広東、厦門、福州、寧波、上海の開港を認めさせ(1842年)、米国もペリー艦隊が日米和親条約(1854年)と琉米修好条約(同年)を締結したことで、補給基地が別に確保され(長谷川亮一『地図から消えた島々』)、小笠原の地政学的な重要性は低下したからである。

漂流民の帰還と捕鯨船の意外な相関関係

捕鯨船のワッチ(見張り)は、ものすごい視力の持ち主が抜擢される。高いマストの上から目を皿のようにして広大な海原を探鯨する。30メートルのマストの上にある見張り台からは6~9キロ先の潮吹きが見えるほどで、漂流船の発見にも絶大な力を発揮していた(山下、前掲書)。そ

うして見つけた漂流民を送り届けるという名目で、諸外国は後に鎖国・日本の扉をこじ開けたのであるから、これもまた「動物が人間を動かした」ダイナミズムの一例といえよう。

マッコウクジラを追いかけていた米国の捕鯨船「オーロラ号」は文政7(1824)年、小笠原諸島・南鳥島の東(北緯30度、東経174度)で大坂の漂流船「安隠丸」を発見、9人を救助し、小名浜の沖合で日本の漁船に引き渡した(吉村昭『漂流記の魅力』)。また、1838年には、越中の「長者丸」もミッドウェー諸島付近で米国の捕鯨船に救助され、ハワイ、オホーツク、シトカ、択捉島経由で5年後に6人が帰国するなど、日本の船が相次いで捕鯨船に助けられている(小林、前掲書)。漂流について網羅した川合彦充氏の労作『日本人漂流記』から数字を拾うと、幕末までの43年間に捕鯨船が計16隻(うち1隻は無人)の日本の漂流船を洋上で発見している。洋上での発見ではないが、漂着先の伊豆諸島・鳥島でアホウドリを食べて約5カ月間生き長らえていた土佐の中浜万次郎ら5人が助けられた(1841年)のもマッコウクジラを追っていた米国の捕鯨船だった。

「見て見ぬふり」をする幕府

欧米系5人とハワイから二十数人が父島に移り住んで十数年が過ぎた1846年、長崎のオランダ商館長は長崎奉行に対し、「日本の領土といわれる小笠原諸島に、外国人が許可なく定住しているのを放置しておくことは、後日の紛争のもとであり、特にアメリカ・中国間の航路の要地に位置する同島は、将来艦船の薪水補給港として重要度を増すであろうから、速やかに対処すべきであろう」などと忠告(田中、前掲書)。これは直ちに江戸に報告されたが、幕府は何らの措置もとらなかった。海防に詳しい歴史家、田中氏は「日本人は見て見ぬふりをする。外国に関わり合いたくない、という意識が働いたのではないか」と考える。

田中氏は他にも傍証を挙げる。天保11(1840)年、気仙沼の6人が乗り込む「中吉丸」が鹿島灘で遭難、小笠原諸島・父島に漂着した。そこで6人は欧米系の住民に助けられて2カ月余り滞在。船を修理して翌年3月、生還した。取り調べに対し、島には12~13軒の人家と男女30人ほどが住んでいるが、言葉が通じず、手真似で空腹を訴え、施しを受けたことを取調書(『通航一覧続輯百五十・漂流記・異国部...四』)の中で述べている。「人々の色は黒くて目は赤く、衣類は柿色木綿の筒袖を着ている」と語る船頭の記述は、明らかに外国人の特徴を示している。

彼らが漂着した島は、銚子湊から370~380里で、持ち帰った英語の小冊子は、蘭学者、宇田川榕菴が幕命で翻訳した。田中氏は「この事件について『通航一覧続輯』には、同船が「異邦の一島に漂着し」とあることから、取調べの役人は中吉丸が漂着した島が、幕府が延宝3(1675)年に領有を宣言した無人島とは気づかなかったのか、それともあえて無視したのか(『蛮社の獄のすべて』)と指摘している。

さらに、越後高田藩の儒者・東条琴台は嘉永元(1848)年に著した『伊豆七島図考』の中で、「小笠原島を放置しておく、外国人がそこを足場に伊豆諸島を脅かす恐れがある」と警告していた。だが幕府は、東条を藩邸に幽閉してしまう(田中弘之『幕末の小笠原』)。



これらの傍証からうかがえるのは、田中氏が指摘するように、「見て見ぬふり」をして現実を直視しようとしないう幕府の姿勢である。もちろん幕府は、18世紀末から19世紀にかけて日本近海に異国船がしばしば姿を現し、そのたびに海防令を発して諸藩に警戒を呼び掛けていた。だが、その一方で、着々と既成事実が進んで行く現実そのものには目を背け続けた。

北のボーダーも「見て見ぬふり」

実は、南のボーダー同様、北のボーダーも幕府は「見て見ぬふり」を決め込んでいた節がある。「シュパンベルグ以来、ロシア人がしきりに日本北辺をうかがっていることを鎖国の江戸幕府はうすうす知ってはいたが、みてもみぬふりをし、崩壊寸前の体制保守に汲々として、外交に方針をもたなかった」。和田一雄氏は『鰭脚類』の中でそう指摘している。

江戸中期、ベーリング第2次遠征隊の分遣隊長だったマルティン・シュパンベルグは、「千島の地図作成」という任務を与えられ、元文4(1739)年、男鹿半島の気仙沼、仙台湾、房総半島に上陸、銀貨と食糧を交換し、その後、伊豆下田の沿岸を通り、紀伊半島まで南下した。幕府はこのとき交換した銀貨を長崎・出島のオランダ商館に照会。その結果、帝政ロシアの通貨と判明した。「元文の黒船」とも呼ばれるこのロシアとの接触で、幕府は南進の機会をうかがうロシアの動きを初めて知った。

明和8(1771)年春、ハンガリー人の流刑囚ベニョフスキーがカムチャツカ半島でロシア軍艦を略奪し、日本列島を南下、四国の阿波と奄美大島に寄港。ベニョフスキーが長崎のオランダ商館長に宛てた書簡には、日本への警告が書かれていた。「ロシア帝国に松前島(蝦夷地)攻略の野望あり。すでにカムチャツカ半島近くの千島列島には要塞も築かれている」と(山下恒夫『大黒屋光太夫』)。いわゆる「はんべんごろうの警告」である。

ドイツ語からオランダ語、日本語へと翻訳された書簡が幕府に届いたのは秋の終わりごろ。文章は要領を得ず、情報の信憑性も確かでなく、脚色に富み、おまけに翻訳もずさん(渡辺京二『黒船前夜』)という点を割り引いたとしても、「幕府の対応は静観をきめこむのみだった。田沼意次以下の幕閣首脳陣には、ロシア帝国そのものがチンプンカンプン、カムチャツカ半島も千島列島も霧の中の存在。第一、蝦夷地自体が幕府の干渉の手が及ぶことを恐れる松前藩の長年にわたる秘密主義のせいで、確かな実情など皆目つかめなかったからであった」(山下恒夫、前掲書)というのでは、あまりにおそまつすぎる。

そのころ仙台藩の藩医で経世家の工藤平助は、松前藩を追われた元勘定奉行、湊源左衛門からの聴き取りで、ロシアの千島進出は、すでにウルップ島まで達し、ロシア人はすでに2度も蝦夷地に来航、交易を求めていた、という事実を知り(山下恒夫、前掲書)、ことロシアの南下に関する限り、「はんべんごろうの警告」がそれほどの外的外れではないことを確信する。

1度目の来航とは、イルクーツク商人のシャバリンが指揮する「ナタリア号」が安永6(1777)年、ウルップ島で越冬、翌1778年、国後島のアイヌの首領・ツキノイを水先案内人に、根室半島のノツカマップに来航、場所請負人の飛驒屋の手代に交易の希望を語り、松前藩との正式交渉



を翌年行うことを決めた事件。2度目は、翌1779年夏、厚岸に来航したシャバリンが、鎖国を国是に松前藩の役人から拒絶された事件を指す（山下恒夫、前掲書）。

工藤は、ロシア南下の事実とその行く末を分析した上で、蝦夷地を幕府自身が開発して、直接ロシアとの交易を始めるべし、とする建言『赤蝦夷風説考』を天明3（1783）年に著し、老中・田沼意次に献呈した。

田沼は北辺のボーダーのただならぬ状況を読み取り、蝦夷地の調査を始めさせたが、やがて失脚。後任の老中・松平定信は、伊能忠敬、近藤重蔵、松田伝十郎、間宮林蔵、最上徳内、和田平太夫らを派遣し、日本の北辺の実態を調べさせた（童門冬二『田沼意次と松平定信』）。

その松平でさえ、ラクスマンが通商を求めて根室に来航した際の手記『魯西亜人取扱手留』には「ネムロに御下知をまつといふは、日本地にあらざれば、追ひ払ふ事もなきをしり、ネムロにまちても下知なくば江戸へのり来るべしといふは、是亦彼の方直なり」と書き留めている（小坂、前掲書）。東蝦夷地に位置する根室でさえ、「日本地にあらざれば」という境界外の認識であったことがうかがえる。

林子平や本多利明らも北辺警備の必要性や蝦夷地開拓の重要性を説き、海防論議が高まった。だが、「当時の徳川幕府はこの脅威から人々の目をそらし、結局、正面からこの問題に取り組むことはなかった」（富坂聡『平成海防論』）というのである。

鎖国・日本のボーダーにいくつもの抜け穴

そもそも江戸幕府は、外国貿易を独占するため長崎・出島だけを開港し、鎖国という形で国を閉ざした。だが、幕府の貿易統制は、それほど強いものではなく、いくつかのボーダーは文字通り「グレー」極まりなかった。①薩摩藩が中国と密貿易をしていた琉球②朝鮮と交易していた対馬③アイヌを仲介としてロシアと交易していた蝦夷地——がそうである。「抜け穴」とまで言えないかもしれないが、南のボーダーも、小笠原の事実上の放置が、欧米人の居住を許すことになり、結果として領有権がゆらぎ、動物資源としてのマッコウクジラも米英に収奪されていた（④）。位置的には、日本の北（③）と南（④）、南西（①）北西（②）のボーダーに当たる。その「抜け穴」に幕末の英米露は目をつけた。幕府が「見て見ないふり」を決め込んでいるうちに日本のボーダーは、いずれも外縁から狙われていたのである。

幕府は、ボーダーを放置するだけ放置して、事態が「いよいよのっぴきならぬ」となると突然うろたえ、思考停止に陥った。昨年の東日本大震災で、福島第1原発がメルトダウンしてはじめて津波に対する度重なる警告を無視、あるいは「見て見ぬふり」をして放置し続けた無策のツケがにわかにクローズアップされたが、さまざまな形で警告があっても、「見て見ないふり」を決め込むと、大きなツケとなって跳ね返ってくるものなのである。懲りないというか、歴史に学ばない国である。

平成のボーダー包囲網

日本のボーダーは平成になって再び浸食され始めている。中国が尖閣諸島で石油開発を始めたのは、1995年末のことであった。石油掘削船「勘探三号」が尖閣諸島の北北東、約320キロの日中中間線より570メートル日本側の海域に入り込んで海底油田を試掘し、ガスの燃焼煙のようなものが吹き出している写真を海上保安庁が公開したのは翌96年2月だった。

韓国も、竹島の実効支配を着々と進めている。国立公園の指定、竹島切手の発行、ヘリポート基地の建設、大型ふ頭と「海中展望台」「海中庭園」の建設など、ここに来て既成事実化が加速している。

「小笠原から見た北方領土」①で、中国漁船による聳島列島・嫁島での宝石サンゴの密漁事件について書いたが、中国漁船は昨秋、すでに日本と韓国の境界に近い長崎県五島列島沖に出没、11月6日と12月19日に長崎海上保安部に摘発されていた。12月21日の小笠原での摘発も含め、実に短期間に3件も密漁事件が起きていたことになる。

中国は近年、宝石サンゴを禁漁とした。自国の周辺海域で漁ができなくなるや、一攫千金を狙って日本のボーダーを侵し、越境操業を手がけるといふ新たな構図が浮かび上がる。そこには、経済価値のある野生動物を乱獲し、絶滅や絶滅寸前に追い込んで別の漁場に移る、という「かっつての乱獲の構図」とは次元がやや異なる。産油国の米国が、わざわざ中東から原油を買っている構図とどこか似ていないでもない。絶滅のおそれのある野生動物の国際取引に関するワシントン条約(CITES)では宝石サンゴの国際取引を規制しようとする動きもあり、投機的な背景もちらつく。

北方領土では2010年11月、ロシアのメドベージェフ大統領が国後島を訪問し、実効支配の現実を見せつけると同時に、連邦政府が巨額の予算を投入して2006年に始めた新しい「クリル社会経済発展計画」に、さらなる予算の上積みを約束した。

ロシア科学アカデミー極東研究所は2011年6月、クリル諸島に海底油田があると発表。埋蔵量は3億5000万トンと試算されている。海底油田の存在は、すでに2008年、ロシア科学アカデミー極東支部海洋地質学・地球物理学研究所のアレクサンドル・イリエフ主任研究員らのグループが指摘。歯舞群島から千島列島中部にかけての太平洋側の大陸棚で、当時の推定埋蔵量は「少なくとも12~16億トン」としていた。今回の発表は、やや下方修正した数字になっている。旧ソ連時代の1980年代初め、道東沖で石油と天然ガスが見つかり、同氏らが調査した。87年に論文発表も計画したが、資金難などで研究が中断していたという(北海道新聞2008年7月8日朝刊)。

ロシアは昨年3月の東日本大震災を受けて日本に対し、領有権を巡って日露が係争中のこの海域で日露の共同採掘プロジェクトを提案した。その一方で、中国や韓国に対しても、「クリルでのプロジェクトに融資するあらゆる外国企業に特恵的な条件を与える用意がある」と述べており、油断はならない。

尖閣諸島沖で2011年に起きた中国漁船による海上保安庁巡視船衝突事件は記憶に新しい。あちこちのボーダーで吹き上げる問題に、日本政府は当該国に形だけの抗議する程度で、解決に向

けて具体的に動こうという姿勢は、うかがえない。

マッコウクジラは深海利用のパイオニア

日本の排他的経済水域（EEZ）は、世界第6位の広さをもつ。これに深さという要素を加え、三次元的に見ることの重要性を指摘するのは東海大の山田吉彦教授（海洋政策）である。日本の海の6割以上は水深3000メートル以上の深海で、とりわけ日本海溝は深い。海洋政策研究財団が試算した「各国の海水の堆積」によると、日本の海水の体積は1580万キロ立米で、「世界第4位の海洋大国」である。そこには、海底油田や天然ガス、メタンハイドレードをはじめ、銅、鉛、亜鉛、金、銀などの鉱物のほかガリウム、セレン、テルルなどの希少金属（レアメタル）を含む「海底熱水鉱床」、コバルト含有量の多い「コバルト・リッチ・クラスト」などが眠っている。海底はまさに「宝の隠し場所」である（山田吉彦『日本は世界第4位の海洋大国』）。

メタンハイドレードは、白いシャーベット状をしており、「燃える氷」とも呼ばれる。産業技術総合研究所の試算では、日本の周囲にはわが国の天然ガスの年間消費量の100年分に当たる約6兆立法メートルのメタンハイドレードが眠っているという（富坂、前掲書）。だが、水深600メートルより深い海底にあるため、どのように回収するか技術面の課題がある。採掘に伴うコストの問題もクリアする必要がある。

ここでマッコウクジラが、深海という未知の領域に餌を求め、どれだけ適応を遂げてきたかに思いをめぐらせてみたい。マッコウクジラは、競争相手の誰もいない深い海にいち早く着目し、ダイオウイカをはじめとする無尽蔵の餌資源を獲得した。いわば深海利用のパイオニアである。

体重の8%強という莫大な量の脳油を頭にため込んだだけではない。空気は1000メートル潜ると100分の1に押し縮められるが、マッコウクジラの体の構造は100気圧以上の水圧のかかる深海でも押しつぶされないようになっている（加藤、前掲書）。血液の量は人間の3倍もあり、酸素を蓄えておくミオグロビンが陸上哺乳動物の8~10倍あるといわれ（NHK「海」プロジェクト『海知られざる世界』3）、形態的にも生理的にも深海に適応してきた。

「必要は発明の母」ではないが、海底資源の採掘に伴う技術やコストの問題は、パイオニアとしての産みの苦しみ、とも言えよう。これらのハードルを乗り越えさえすれば、日本は一気に資源大国へと転じる可能性さえある。

国連の大陸棚限界委員会が日本の大陸棚拡張を認定

政府は4月27日、日本の大陸棚の拡大が国連の大陸棚限界委員会（事務局・米国ニューヨーク）から初めて認められたと発表した。①沖ノ鳥島の北方の「四国海盆海域」②小笠原諸島の東の「小笠原海台海域」③南硫黄島の南の「南硫黄島海域」④沖大東島南の「沖大東海嶺南方海域」で、合わせて約31万平方メートル。政府は2008年11月に7海域、約74万平方キロの拡大を申請していたが、沖ノ鳥島の南側の「九州パラオ海嶺南部海域」（約25万平方キロ）は勧告が先送りされたほか、「南鳥島海域」と「茂木海山海域」については「地形、地質的に日本の領土と地続



空も飛ぶマッコウクジラ（知床）

深海利用を可能にさせる巨大な頭（知床）

きではない」として認められなかった。

国連海洋法条約は、大陸棚の開発権を沿岸国に認めている。EEZ外にある大陸棚を設定したい場合は、同委員会に申請の上、海底地形の連続性が認められれば、開発権を主張できる。今回の認定で日本の大陸棚の総面積（領海を除く）は約436万平方キロとなった。これらの海域の底には海底熱水鉱床をはじめ、コバルト・リッチ・クラスト、メタンハイドレードなどが眠っている可能性が高く、採掘に対する期待感が高まっている。

とりわけ飛び地のような公海だった「四国海盆海域」（17万平方キロ）が含まれた意義は大きい。沖ノ鳥島は、この海盆を南側から支えている。その沖ノ鳥島が、大陸棚と認定する基点となったことで、沖ノ鳥島を「島」として認めたと解釈できるからである。中国や韓国は沖ノ鳥島を「岩」と主張するが、仮に「岩」だとすれば領海12カイリの設定しかできないため、今回認められたような形にはならない。

中国と韓国は「沖ノ鳥島は岩であり、大陸棚を設定する基点となる島ではない」と異議を唱えており、中国政府は今回の日本政府の発表の翌日、「国際的に主流の見方は日本側の主張を支持していない」との異議を改めて表明した。

狙われる「動かない資源」

山田教授は「海に守られた日本から、海を守る日本へ」と主張する。陸でつながっている諸外国とは異なり、四方を海に囲まれている日本は、2度の元寇に象徴されるように、海というクッション、ある種のバッファゾーンがあるために、近隣諸国からほとんど侵略を受けることはなかった。

だが、これまで見て来たように、幕末から明治初期にかけて、マッコウクジラやラッコなどの動物を追って諸外国から遠征してきた船が「見えないボーダー」を侵し、乱獲していた。当時はもちろんEEZなどという概念はなかったが、この時代の捕鯨船もいまから考えれば日本の資源を収奪していたに等しい。海は果てしなく広く、日本のボーダーが「海から浸食される」という現



実は、昔も今も変わっていない。

平成のボーダー包囲網は、エネルギーという名の「動かない資源」を求めての侵入が著しい。かつてアホウドリが漂流民の命を救い、やがて高級ダウンの原料として乱獲されたが、そのアホウドリの排せつ物が19世紀末には、化学肥料として脚光を浴びようになるのだから、世の中はかくも野生動物に動かされている。石油やメタンハイドレードなどの資源も、元はといえば生物遺骸とされる。収奪の対象が「生きている動物」から「動かない資源」へ移ったと解釈することもできよう。

海洋権益にいち早く目をつけた中国は1992年に「領海法」を制定し、尖閣諸島を中国領と明記（田久保忠衛『日本の領土』）。このころから「海洋調査」を目的として尖閣諸島、八重山諸島、大東諸島など日本の領海やEEZへの侵入を始めた。昭和というひとつの時代が終わり、まさに平成の黎明期であった。

いま思えば中国は、ボーダーの警備体制が不十分で弱腰外交の日本であれば「与し易し」とみていたのかもしれない。中国は近年、東シナ海や南シナ海など近隣諸国のボーダーをも侵し、海底資源をターゲットにした「海洋調査」は大胆さを増している。

尖閣諸島の北東の海底に眠る中国のガス田はすでに5井を数える（富坂、前掲書）。海や海底に投資に見合うだけの資源があれば、いくらでも越境して来る時代である。ロシアもまた、連邦政府からの潤沢な資金を原資に、新しい「クリル諸島社会経済発展計画」を着々と進める。韓国による竹島の実効支配も止まらない。尖閣諸島沖で、中国の漁船が海上保安庁の取締船に体当たりし、ビデオが流出した事件は記憶に新しい。

「ボーダーは外国への出口であると同時に、外国からの侵入口でもある」と富坂氏は指摘する（前掲書）。次々と脅かされる日本のボーダー。まさに「平成のボーダー包囲網」である。

「草刈り場」としてのボーダー

岸から3カイリとされていた領海が、漁業専管水域という形で200カイリに拡大したのは、1970年代半ばである。それが大陸棚の問題とも絡んでEEZという概念に発展した。国連海洋法条約は1982年に採択され、1994年に発効した。日本は2年後の1996年に批准したが、それから先が一向に進まなかった（山田、前掲書）。

だが、海はその前後からすでに「草刈り場」の様相を呈していた。もっとも動きが早かったのは中国であった。日本のEEZに入り込んで、「海洋調査」という名目で粛々と海底探査を進め、すでに地球27周分の距離の探査を行っていると言われる（富坂、前掲書）。

保阪正康氏は「陸上での人工国境であれば、日常的に双方の兵士が向き合う形になるが、そうならばしばしば小競り合いがあるのは現在の国際情勢下でもよくみられる。ただ自然国境の場合は日常的な衝突はないかわりに、双方がその国境線や領土保全と称しての衝突はありうる（中略）このような衝突はしばしば政治的思惑を含めて行われる」（『歴史でたどる領土問題の真実』）と指摘する。富坂氏も「海を挟んだ二つの国の基線から基線までの間が四百カイリに満たず、両国の



権益がぶつかるケースも多くあらわれ、多くの国が境界確定をめぐる従来にはなかった争いに巻き込まれていった(前掲書)として新たな草刈り場と化しつつある海の境界の現実を見据える。

かつて日本は、海によって外国と隔てられていた。だが、いまや海は極めて広大な侵入口と化している。海は、日本を守る大きな「堀」(山田、前掲書)であり、「堀」をどのようにして守るかが、「平成のボーダー包囲網」をはね返す試金石となる。

竹島は1952年の李承晩大統領(当時)の「海洋主権宣言」、いわゆる漁業管轄権をめぐる「李承晩ライン」によって韓国側に取り込まれた。日本はある種の「事なかれ主義」でそれを許していた。ところが実効支配の地歩は、ここに来てどんどん固められている。「強引な手段で領土に組み入れられた上に島の上に施設を建設し人員を送り込まれたことで、実効支配の形を整えられてしまった」(富坂、前掲書)というのである。

日本で海洋基本法が施行されたのは2007年7月のこと。日本財団や海洋政策財団をはじめ産業界、学者、超党派の国会議員らで原案を作り、民間主導の議員立法でようやく成立した(山田、前掲書)。尖閣諸島周辺の警備をいまごろになって強化しているのも、政府の無策ぶりを象徴している。与那国島の陸上自衛隊駐屯にしても、本来であれば「離島防衛や辺境防衛の観点からすれば他国の例に従っても至極自然なことであって、むしろこれまで部隊を置いてこなかったことの方が異常な事態だったと言わざるを得ない」(富坂、前掲書)のである。ボーダーに対する長年の無策のツケが、いま至る所で噴出している。しかも、ときには周辺諸国が微妙に連動しながら。

このところのボーダーの情勢を見る限り、山田氏の言う「日本を守る大きな『堀』」が、極めて厳しい状況にあることは疑いない。「二つの政党が覇を争う不安定な政治環境が存在し、大局よりも目先の人気に振り回される要素に満ちている」(富坂、前掲書)という末期的な状況とはいえ、いまずぐにでも大局的な対応をしないことには幕末の二の舞いになりかねない。

小笠原会議で岩下明裕・北海道大学教授(国際関係論)は、海のボーダーの危うさに警鐘を鳴らした。「陸の紛争が落ち着いてきて、いま海の紛争が始まっている」のだと。

* 『毎日新聞』北海道版(3月30日~4月5日付)で5回連載した「小笠原から見た北方領土」(<http://mainichi.jp/area/hokkaido/>)は、首都圏で販売されているTwitter連動型の新メディア媒体「毎日RT」(5月1日~5日付)に写真を増やして再掲された。



【リトリートの現場から】

ところ変われば・・・(沖縄と小笠原の植物の比較雑感)

小嶺長典

与那国島から北東に約 2000 km 東京。そこから南に約 1000 km 小笠原諸島。そこから南西に約 1930 km 与那国島がある。なんだか小笠原母島の夜空で見上げた冬の大三角形を思い出す。とするとその中を縦断する天の川はさしあたり黒潮か？なんてロマンチックな気分に入る余裕もなく、船旅の疲れに夕食のビール、懇親会の酒が一気に眠気を誘う。しかし、この団体ただ者ではない。本日の宿めぐろ荘にかえっても懇親会？が続く。

それにしても、山上氏の気合いの入ったスケジュール作りはあとでジワジワと効いてくる。もちろん体力的にである。東京から父島まできっちり 25 時間 30 分、やっとなつたと思ったら、1 時間後に船を乗り換えて母島まで 2 時間 30 分。はるばる来たぜ小笠原・・・なんて思いに浸る事を許さない。港から車に乗り換えて島の北半分を巡検する。いきなり険しい坂道が続く山道をワンボックスカーに揺られてかつて集落があった北港を目指して走る。

山中を走っている途中、小笠原役場職員から、沖縄では道路の植栽にも用いられる赤木がここ小笠原では、自生する植物を駆逐する外来種とのことで厄介者として根絶の対象となっていることを聞き耳を疑った。家具や建材として利用されており、空手や棒術の武具六尺棒やトンファーを作る材料でもある。赤木という名前のおり芯まできれいな赤褐色で沖縄の各地には〇〇の大赤木と名前が付くくらい赤木の太木が崇められている。世界最大の蛾与那国蛾の食草でもあり大事にされている。ちなみに数年前の米軍ヘリが墜落した沖縄国際大学にもその時に焼け残った赤木としてニュースになり、また、かの大戦でも首里城近くに焼け残った赤木が観光でも案内されるくらい赤木は沖縄ではあまりにも存在が大きい。ところ変われば扱ひもこんなに変わるとは、いくら持ち込まれたものとはいえ沖縄のハブ退治に持ち込まれたマングースなどを見ているようでなんだかつらいものがある。

沖縄で赤木が大量に繁殖し他の植物を追いやるという話は聞いたことがない。やはり、同じ環境にあるなか生き残りをかけて常に切磋琢磨している場所では他の植物も負けていないが、いままでになかった未知のものにどう対応していくのか抵抗する術を知らない地元の植物たちは為す術もなく淘汰されていくのである。

沖縄で米軍になどにより戦後持ち込まれた植物にギンネムとモクマオウがあり、小笠原でもよく見かけた。ギンネムは豆科の植物で繁殖力が高く、今でも海岸近くの他の植物の繁殖が難しい場所に以前ほどではないが群生しているところを見かける。モクマオウは海岸線に生える大木で、針葉樹のような葉から一見松の親戚のようにみえるが全然違う種類である。直立した割と幹周りが太いこのモクマオウは学校校庭周辺やビーチ周辺によく植栽されていて、私が小さい頃はよく見かけたが、最近ではだいぶ少なくなっている。小笠原でも海岸近くやビーチ周辺で見かけた。島の北半分は学校跡があるくらいでまったく人気のない地域である。北港周辺にかつて集落が形



成されていたとは思えないほどの閑散とした静けさが、海岸に寄せる波音を際だたせている。ウグイスの鳴き声がよけいに郷愁をさそう。

宿の近くで宿の主人が栽培しているコーヒー豆の木、柑橘類、熱帯果樹などがよく手入れされていて見ていて楽しい。その中にアセロラの木が3本程あったが、残念ながらあの育て方ではあまり実が着かないだろうな、ちょっとした栽培のこつを教えれば……。趣味の範囲でやっているだろうし、そこまでは……。なんてことを思いながら眺めていた。熱帯果樹に関しては沖縄が1にも2にも先輩だ。

風邪気味だった喉は翌日完全にアウト。体調が思わしくない私にとって殺人的な、いや精力的な山上氏のスケジュールにも体を騙しながらみんなの後をついて行った。父島に戻った後も一休みすることもなく、役場の施設や欧米系墓地、三日月山その他諸々車の乗り降りだけでもクタクタだ。小笠原へ行く直前にまとめた資料で、スケジュールを見ると小一時間ぐらい会議まで時間があるので、どう発表するかはその時考えようとしていたが夕方からの発表の段取りもなにもあったものではなかった。とりあえず声が出ていればいい。

父島が火山でできた島なので土壌的にも沖縄と違うかなと想像していたが、欧米系の墓地を視察した場所の土は沖縄の土そのもので、鮮やかな発色をした赤色の土に感心した。沖縄では“国頭マーヅ”といわれる酸性系の土壌で鉄分を多く含んでいる。パイン栽培などが主である。花崗岩や安山岩その他いろいろな岩石の風化したもので、花崗岩などの変成岩を含むので火山と関係性があるのかなど想像を巡らす。ちなみに“島尻マーヅ”といわれる赤土があるが、同じマーヅという名前がついていてもこちらは塩基性の暗褐色の赤土で主に珊瑚礁等が風化してできたものである。さとうきびなどが主に栽培されている。沖縄ではどちらとも広く分布しているが、前者は山間などの高地に、後者は海岸に近い中低地に多い。

話は少し飛ぶが、夕方から会議が開催され、持ちこたえた喉でなんとか発表ができ安堵したせいもあったのか、夕食懇親会後の2次会に向かうため重たい足を引きずりながらみんなの後を追っていたが、段々と前を歩く集団に遅れをとりとうとう見失ってしまった。迷子になってしまった私は清瀬の都営住宅団地に迷い込むが、そこにはとても人口2千名の島とは思えない団地群があった。後日資料を調べると父島で297戸、人口400人の母島でも96戸。ちなみに人口1600人の与那国島には県営の住宅は一戸もない。若者の定住策として県へは毎年要望書を提出しているが一向に動きがない。旧島民の帰島促進策とはいえ持っているものが違う都と県の差である。

翌日も朝から精力的に動いたホエールウォッチ、南島、兄島の瀬戸などとても長時間船にゆらられているとは思えないぐらい楽しい時間で、南島は隆起珊瑚でできており沖縄の離島そのものであった。船から下りた後も父島の巡検であったが、途中で見かける父島の植生もやはり沖縄で見られるものと同じものがほとんどである。テリハボク（沖縄ではヤラブの木）モモタマナ（沖縄ではクワディーサー）など親しみのある木であるが、おもしろいのはいずれも幹周りの太い巨木になっていることである。ヤラブの木なんか沖縄ではせいぜい両手で抱え込むくらいの幹周りにしかならないが、こちらでは両腕でも抱えきれないくらいの太さになっているのである。一本だ

けではない。市街地でも小港海岸のビーチ近くでもすごい大木になっているなど感心していた。クワディーサーも沖縄ではせいぜい3メートルから4メートルの高さであるが、小笠原では10メートルを超えるものもありこの木のイメージを変えた。

なにが違うのか、いろいろと考えを巡らせながら巡回していたが、同じ台風常習地帯でありながら、沖縄は台風の風を木立がまともに受ける。一方小笠原はこの海岸線から急激にせり上がっている地形故、逆に海岸近くの木立は地形に守られているのか、それにより台風による倒木や折損が少なく大木に育つのかな・などと考えたが、もちろん結論は出ない。沖縄と小笠原の植生の研究をやるような研究者はいないのか。

最後にもう一つ、固有種の保護活動に関しては体制も制度も思いも圧倒的に沖縄より小笠原が優れていると感じた。もちろん世界自然遺産として登録するためにはかなりの努力が必要であったからこそではあると思う。与那国島にも与那国ooと冠がつく固有の動植物が数多くある。しかし、個体数から“座して死を待つ”的なものもある。なかなか保護対策への動きがとられていないのが実態である。沖縄でも経済的打撃が大きいミバエ類に関して国が先頭に立って外国からの進入を防ぐ手だては講じているが、もちろん、“やんばるくいな”“やんばるてながこがね”など有名どころはそれなりの対策も講じられているが、一離島の固有種まで手が回らないのが現実である。

かくして、3泊4日間の小笠原のどたどた旅は瞬く間に終わった。結局、夜空を見上げたのは母島初日だけであった。帰りの船の中は疲れと、風邪と酔いで余裕がなく小笠原をでて東京の竹芝桟橋につくまで一度も船内から出なかった。今日は2月24日与那国島は行く前から帰ってからもずっと雨模様である。東経143度前後の小笠原から東経123度前後の与那国島20度の違いは時差で約1時間20分程度、今、夜7時を過ぎたが空はまだ明るい。与那国で冬の大三角形は今日も雨のため観測できないが、体調も戻って来たことだし、オリオンビールの三つ星が拝められる。乾杯・・・違—う、

山上さん、本当にお疲れ様でした。岩下先生、木村先生、他の皆さん、そして、私たちを快く受け入れて下さった小笠原のみなさん、感謝！！！！





小笠原訪ねて三千キロ・・・

小濱啓由

日本最南端の町に位置する竹富町から、北東 2000 km にある東京を経由し、更に南下した 1000 km に小笠原村がある。交通手段が「船」に限定され、しかも一週間に一度しか航行しない島々への渡航は容易ではない。今回初めて JIBSN 小笠原会議に参加するため、3泊4日の日程で足を運ぶことができた。事前に旅行雑誌やテレビ番組などで情報入手し、数日前から小笠原諸島を旅している気分になっていたが、百聞は一見に如かず。超高層ビルが建ち並ぶ「東京」のイメージとは異なり、火山島とサンゴ礁が複合した裾礁段階の島々の風貌は個性的で、特にエメラルドグリーンに輝く海の美しさには嫉妬を覚えた。

唯一の渡航手段「おがさわら丸」(通称:おが丸)は全長 131m、総トン数 6700 t、乗客定員約 1000 名の大船である。乗船経験者から「小笠原への渡航は大変だ」と事前に聞かされていたが、その日は運良く快晴で視界も良好。風の影響もそれ程なく終始安定した航海であった。普段、業務では竹富町内の各島々を高速船で駆け巡ることは多々あり、1時間程度の高速船の揺れには慣れているが、大船の揺れには不慣れである。ましてや 25 時間余りの船旅は人生初めての経験だ。25 時間の長い船旅を想定し、退屈しないように小説を 2、3 冊持ち控えていたが、船室では GCOE 制作 DVD の上映をはじめ、同行した研究者や自治体職員、その他の参加者との会話が弾んだ。東京竹芝港を出港して約 2 時間。東京湾を 8 ノットで航行していた「おが丸」が 20 ノットに変速し、太平洋上を航海し始めた。気が付くと缶ビールを片手にちぎりイカをつまみながら、適度なほろ酔いで船旅を楽しんでいた。

小笠原は地理的問題から民間航空機の離発着が困難で、現段階では就航していない。無論飛行場も整備されていない。海上を離発着する自衛隊の急患搬送用の飛行機のみだ。竹富町は石垣島を起点に、各島々への高速船が就航されているため、小笠原ほどの不便は感じない。石垣港から約 50km 離れた日本最南端の有人島「波照間島」には 1 時間程度でたどり着く。「まだ我が町は恵まれているな～」と思いに耽っているうちに、小笠原諸島の玄関口父島に到着した。

父島二見港入港後間もなくして、母島行きの客船「ははじま丸」に乗り換え、最初の目的地である母島に向けて出港した。母島沖港に入港後、小笠原村職員と同島を研究フィールドとする日本島嶼学会の山上氏による案内で島内を視察した。

「南国」「島嶼」のキーワードから動植物や自然環境面等において共通する特性があるだろうと考えていたが、まさにその通りであった。島全体が国立公園に指定された母島は目につく植物も沖縄で自生する植物と同様だ。北村集落跡地にあった「北村小学校跡」の構内には沖縄から移植されたといわれる「ガジュマル」が生い茂り、周辺には沖縄で貴重な資材として使用される「赤木」が立ち並んでいた。沖縄の県花である「デイゴ」の赤い花も三分咲ではあったが目についた。また、それだけではなく行政課題も共通している。島嶼の共通課題である海岸漂着ごみ問題である。北村集落跡地に隣接する海岸には多くの漂着ごみが到達していた。

「母島島民の唄」が頭に焼きつき名残惜しい母島を後にして、小笠原諸島の中心地父島に向かった。父島は、母島と違って街の雰囲気異なる印象をもったが、両島の歴史や文化、土地柄や人柄は、沖縄の島々と似ているところがある。竹富町は戦前から終戦直後までは炭鉱業が盛んであった。「黒のダイヤ」を求め地元、本土企業を中心に台湾・朝鮮からも労働者を受け入れた。採掘場が集中した西表島西部地区は経済的にも潤っていた。小笠原村は亜熱帯の気候を活かし、季節を先取りした野菜や果物が本土に送られた。高値で取引されていたため、島は好景気に沸いたともいわれている。また、南洋の島々への中継地としても栄えた。

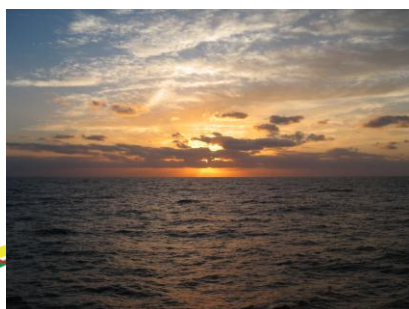
人の流れにも特徴がある。竹富町西表島の一部では、沖縄本島北部や宮古島から多くの移住者が居住し、独特の集落形成がなされた。小笠原村は欧米系住民の存在や米軍統治など複雑な歴史を持つことから、独特のポニカルチャーが育まれてきた。人柄も欧米的でオープンであるが、日本的な結の心の一面も持っている。沖縄のチャンプルー文化そのものだ。

東京都庁から 1000km も離れた島々の住民生活は不便をきたす一面もあるが、情報通信は最先端の技術が導入され、最新の設備が整備されている。さすが東京都下の自治体だと感心した。小笠原村役場本庁舎がある父島と支所のある母島、そして村東京事務所を結んだ超高速ブロードバンド網の整備は立派だ。ICT を活用した情報システムは大変参考になった。

小笠原諸島は、大陸と一度も陸続きにならなかったことがないため、海を越えてたどり着いた生き物は独自の進化を遂げた。その結果、小笠原にしかない固有の生き物の割合が高い。すばらしい自然を持つ小笠原諸島は、ほかの地域にはない特徴的な生き物の進化や生き物同士のつながりが見られる地域の生態系の価値を持つことが認められ、2011年6月に屋久島、白神山地、知床に次ぐ日本で4番目の世界自然遺産に登録された。竹富町も世界自然遺産登録をめざす自治体として、先輩自治体の各種規制制度や外来種対策など多くのノウハウを学ばなければならないと痛感した。

竹富町から小笠原を訪ねて三千キロ。帰路を合わせると6千キロに及ぶ旅路であった。小笠原の潮風と亜熱帯特有の空気にはどこか懐かしさを感じた。都内からあまりにも遠い距離にあるため、行き過ぎた「ブランド化」が形成され、住民生活に支障を及ぼすのではないかと余計な心配をしていたが、逆にその距離が小笠原住民の適度な生活環境を維持し、美しい自然環境や動植物の保全が図られているのだと考え方が改まった。

竹富町は2014年に村制からスタートして単独自治体100周年の節目を迎える。竹富町、いや、一行政マンの一方的な思い付きであるが、その慶賀の年に「日本最南端」のネームバリューを持つ自治体同士が、姉妹町として盟約の美酒を交わすことはできないものかと考えた。双方の地で唯一の哺乳類の固有種「イリオモテヤマネコ」と「オガサワラオオコウモリ」も一緒に祝福してくれるだろう。



境界地域研究ネットワーク JAPAN



<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/>



<mailto:jibsn@borderstudies.jp>



境界地域研究ネットワーク JAPAN (JIBSN) 小笠原会議に参加して

織田敏史

根室市は、「朝日に一番近いまち」、「桜前線終着駅」など、「日本本土の最東端のまち」として、全国的に観光PRにも力を注いでいます。

今回、初めて小笠原を訪問させていただきましたが、父島・母島はもちろんのこと、「日本最南端の沖ノ鳥島」、「日本最東端の南鳥島」など、我がまちのライバルとも言える島々について、その歴史や自然、現状を勉強させていただいたことは、大変に貴重なものであり、素晴らしい体験となりました。

根室市は、「北方領土問題」を抱えているまちであり、「国境問題」とは違う悩みを持っています。

昨年12月、JIBSNの設立と同時に参加をさせていただいたのも、「国境を抱えるまち」の様々な情報を収集し、今後の北方領土問題に対する参考としたい、と考えたからでありました。

JIBSNとして、初めての会議が「小笠原」で開催されるとのご案内をいただいた時には、あまりにも距離が離れすぎていたために、一度は参加をあきらめかけましたが、せっかくの機会であり、また、強制疎開させられた小笠原島民が、再び島に戻って生活をしている現状を実際に見る・聞くことで、将来的な北方領土の姿を考える参考になるものと信じ、参加を決意したところです。

実際の研修は（予想以上にハードなものでしたが）、戦中・戦後の混乱から返還後の帰島までの歴史、現在の生活状況など、見るもの・聞くもの全てに圧倒され、現在「領土返還」を叫び続けている私にとって、とても興味深いものでした。

これまで「国境フォーラム」などの機会を通じ、国境問題について勉強させていただいておりましたが、やはり現地を訪問し、実際に本物に触れることは大変に重要であることも認識させられました。

北方領土の元島民は、島を追われて67年、この間、その約6割の方々が既に他界、残された者の平均年齢も既に78歳を超える現状の中、一日も早い北方領土問題を解決し、本物の国境を確定させる... これまで同様、進めていかなければならない課題です。

しかし、今回の会議を通じて「実際に北方領土問題が解決した後、小笠原と同じような状況になれるのか...」考えさせられました。

これまで、「北方領土問題を広める」ことを中心に考えていましたが、今後も積極的にJIBSNに参加させていただき、「国境問題を抱えるまちの状況」を収集していきたいと思っておりますので、岩下先生をはじめ、JIBSNの会員皆さん、よろしくお願いたします。

改めて、小笠原会議に参加者された皆さん、そして、小笠原村の皆さん、本当にありがとうございました。



境界地域研究ネットワーク「JIBSN、小笠原で会議します」

高田喜博

季刊『北方圏』（公益社団法人北海道国際交流・協力総合センター）第157号で、排他的経済水域（EEZ）のように、厳密には国境と呼べない境目のラインを含めて「境界（ボーダー）」と呼び、研究者や自治体関係者が、その問題を議論していることを紹介した。こうした活動をネットワーク化して、境界地域の安定と発展のための議論を深めるため、昨年11月27日に「境界地域研究ネットワーク JAPAN」（JIBSN）が設立された。このJIBSNの最初の会議が、2月14日に小笠原諸島の父島で開催され、大学、シンクタンク、自治体や報道の関係者など約20人が参加した。

東京から遠く離れた小笠原

30余の島々からなる小笠原諸島は東京都に属するが、東京からの距離は約1000kmもあり、日本列島から遠く離れた太平洋上に点在している。現在、人口は約2400人で、父島に約2000人、母島に約400人が生活している。他に、硫黄島には自衛隊の基地があるが一般人の上陸は禁止されている。小笠原には、硫黄島の自衛隊基地以外に飛行場はなく、民間人はこれを利用することができないため、交通手段は船舶に限られる。東京竹芝埠頭から「おがさわら丸」に乗船して、父島まで片道25時間半を要する。

世界遺産に登録

日本列島から遠く離れ、一度も陸続きとなったことがない小笠原諸島は、他には見られない独自の生態系を有する。その価値が認められ、2011年6月、ユネスコの自然遺産に登録された。また、小笠原諸島でしか見られない希少な動植物が多く、その生物多様性も特別な価値を有する。

しかし、故意または偶然に持ち込まれた外来の動植物によって、小笠原の貴重な生態系や生物多様性が危機に瀕している。外来種の駆除・捕獲、固有種保護区の設定など、保護するための努力がなされていた。島を訪ねる観光客も、靴の泥や衣服に付いた種子を落とすなど、細心の注意が必要となる。

境界・周辺に位置する小笠原

日本の面積は世界第61位であるが、排他的経済水域（200海里）を含む海域面積では第6位の海洋国家である。その排他的経済水域の約三分の一を小笠原諸島が占めている。まさに、小笠原諸島は境界地域に位置する。今回は会議の他、役場の好意で短時間に父島、母島の多くの施設を視察することができた。そこでは、境界地域、周辺地域として他と共通の課題とともに、小笠原特有の課題も見ることができた。



小笠原の歴史

1675年に江戸幕府が調査した時は、小笠原諸島は無人島であった。19世紀になって欧米の捕鯨船が立ち寄るようになり、やがて欧米系の人々が定住した。幕府は1862年に咸臨丸を派遣し、彼らを帰化させて「欧米系島民」とした。その後、移住してきた日本人と同居することになる。

戦争末期の強制疎開とその後

いよいよ戦火が近づいた1944年、島民に対して疎開命令が出された。当時の小笠原の人口は7711人であったが、軍に徴用された825人を除く全員（欧米系島民を含む）が内地に疎開した。

翌年8月に終戦を迎え、その後、連合国軍最高司令官の訓令第677号により、西南諸島（沖縄、奄美）、伊豆諸島、小笠原諸島が日本の行政権から分離され、米国の軍政下に置かれた。同時に、小笠原への島民の帰還が禁止され、戦火の中に生き残った683人も島から退去となり、小笠原諸島から日本人がいなくなった。

軍政下の小笠原

米国海軍の直接統治下の小笠原で、欧米系島民とその配偶者だけに帰島が許され、129人が父島に戻った。その後は、現地司令官の監督の下で18歳以上の島民による選挙が実施され、選出された「五人委員会」による自治が認められた。また、学校が設置され、英語教育がなされた。

当時は、民間の交通手段がなかったため、内地との交流は途絶してしまった。強制疎開によって放置された土地の多くは、長い年月の間にジャングル化してしまった。

小笠原復帰

1967年に小笠原返還が合意され、翌年の小笠原返還協定によって日本に復帰した。20余年ぶりの復帰に当たり日本政府は、旧島民の帰島と生活の再建を図ると同時に、現島民の生活の安定にも配慮しなくてはならなかった。そこで、小笠原諸島復興特別措置法など、法令を整備して準備したが、実務上は多くの難題に直面した。

また、元島民であっても、生活インフラが整備されているのは、現在も父島と母島の一部に限られている。そのため、事実上旧在所に戻れないという問題も生じている。

北方領土との関係

このように、米軍の軍政下に置かれた地域の中で、島民が居住したまま統治された西南諸島と異なり、小笠原では返還まで多くの島民は帰島できなかった。

もし仮に、ロシアが実効支配している北方四島が日本に返還された場合、旧島民の帰島、権利の復活、自治体の設置、居住者であるロシア人との関係など、多くの問題が予想される。小笠原の事例は、こうした問題に対して、多くの示唆を与えてくれるだろう。

(季刊『北方圏』第159号：2012年3月から転載・一部修正)



小笠原への航海

新井直樹

2012年2月、境界地域研究ネットワーク（JIBSN）小笠原会議に参加する機会を得た。会議自体の詳細は別稿の会議録に譲るとして、ここでは、小笠原への航海で感じたことを記したい。

会議への参加のお誘いを受けた時、小笠原に行くためには船しか交通手段は無いので、少し長めの航海になることは覚悟していた。しかし、東京と父島間を結ぶ唯一の定期船「おがさわら丸」は、6日に1便の就航の上、片道25時間半と言う1日以上航海をして、最短の旅でも5泊6日（船中2泊）を要することにまで想像が及ばなかった。東京から地球の裏側のブラジルまで、北米経由のフライトで同じくらいの時間を要するそうだが、航空航路の無い東京都小笠原村が、移動時間の制約から東京から最も遠い地とも言われる所以である。

今、私は福岡に居て、韓国へ渡航する際には当たり前の様に、博多港から高速船やフェリーを使って、数時間の航海をしているし、最近の博多港には中国発着の外国クルーズ船の寄港が増えており、昨年は調査を兼ねて、上海発着、済州島、博多港寄港と言う3泊4日のクルーズ船航海も経験していたのだが、正直、今回の東京-小笠原間の往復こそが最大の航海をしたと言うのにふさわしいものであった。

実際に、福岡から船舶航路のある韓国の釜山までは、約200km、高速船で3時間弱、フェリーでも5時間半程度、クルーズ船が頻りに往来する福岡-上海の距離は、約900kmと東京-父島間の約1000kmより短い。今回の小笠原への航海は、途中の寄港地も無く、伊豆七島の島影を眼にしながら、黒潮の流れる大海原を突き進み、絶海の孤島に辿り着くと言う、まさに大航海したと言うのに、ふさわしいものであった。さらに、父島から母島へ航海上においては、冬場に繁殖のためこの海域に集まる、数多くの鯨を眼にすることも出来た。

しかし幸いにして、我々、会議参加者は、厳冬の時期にも関わらず、帰路に若干の波の高さと船の揺れを感じた程度で済んだが、海が荒れた時の状況は、想像を超えるほど大変な航海になることを経験者から聴き及ぶに至っては、一同、今回の航海の平穏さに胸をなで下ろしていたに違いない。

どこまでも続きそうな太平洋の大海原を往来した小笠原への航海を終えて思ったことは、わが国の国土面積は約38万km²で、世界第61位に過ぎないが、領海とEEZ（排他的経済水域）を合わせた面積は、約447万km²と世界第6位を誇り、EEZの面積の多くは、小笠原などの離島、辺境を国土として維持することによって得られている。その意味において、小笠原は、わが国の国益上、戦略的に重要な地域であることから、戦前は太平洋の要衝とされ、日米間の国益が衝突した結果、太平洋戦争の激戦地となり、戦後は米軍統治下に置かれるなど、時代に翻弄されてきた。

そうした過去の歴史を物語る様に、日本本土、欧米系、南洋の島々などから移住して来た多様な人々によって独特の融合文化を育んできたと言われる小笠原が、2011年、世界自然遺産に登録

され、観光地として注目を集めるのみならず、新たに移住してくる本土の若者も多くなったと聞いた。今後は、東洋のガラパゴスとも言われる島独自の自然を大切に保全しながら、移住者のみならず、来島する観光客と交流・共生することによって、小笠原が、どのような地域となり、また、新たな融合文化を生み出していくかに注目したい。

母島視察の風景



母島小中学校



営農研修所

小笠原リトリート：「南方領土」の影を求めて

黒岩幸子

東京港竹芝桟橋から南下すること約 1000 キロ、一昼夜を越える船旅の後に小笠原諸島の父島・母島に上陸した。2010 年に訪ねた南大東島（沖縄県）には絶海の孤島とはいえ空港があったが、小笠原へは定期船「おがさわら丸」で父島二見港を目指す以外にルートはない。まさに「超遠隔離島」を実感させられるリトリートになった。

「北方領土」に対置される島々

私の関心は、かつての「南方領土」としての小笠原にあった。第二次世界大戦後にソ連に占領された南樺と千島は「北方領土」、アメリカの施政下に置かれた奄美・小笠原・沖縄は「南方領土」と呼ばれていた。「北方領土」は 1960 年代から北方四島のみを指して使われるようになり、「南方領土」はすべて日本に復帰して死語になった。

綿密に組まれた視察のおかげで、父島・母島・南島を回り、小笠原の様々な側面を眺めながら話を聞く機会を得た。そして、「南方領土」としての小笠原に「北方領土」との共通点のあることを改めて認識した。

まず、敗戦期の日本が、帝国周縁に位置するこれらの島々を本土防衛の「捨て石」にしたこと¹。敗戦期の日本は、アメリカとの和平をソ連に仲介してもらうために、南樺太と北千島のソ連への譲渡を検討していた。北千島のシュムシュ島では 1945 年 8 月に日ソ間で激しい戦闘があり、結局、日本は南千島まで失った。本土防衛の地上戦が想定された小笠原の島々も、住民が排除された後に要塞化された。父島では軍用施設跡を見学し、希少種のサンクチュアリのすぐそばの洞窟に今も放置される兵器を見た。硫黄島の激戦はよく知られている。

次に、離島を余儀なくされた島民たちの運命も類似している。ソ連軍に占領された千島列島の居住者およそ 1 万 7 千人は戦後すべて追放され、主に北海道の東沿岸部に暮らすようになった。小笠原住民およそ 7 千人も、1944 年に強制疎開によって本土に移住している。後者は日本当局による計画的な疎開であったが、転居先で困窮を極めたことは千島の島民と同じだ。1968 年に小笠原が日本に返還されると帰島促進策がとられたが、1975 年の小笠原の人口は 1356 人で戦前の 2 割に満たない²。戦後すでに 25 年過ぎてからの返還であったため、帰島できる人は限られていたのだろう。結局、帰島者は全体の 3 割弱だったという。現在の小笠原の人口は約 2800 人だが、これは戦後に新たな入植者が加わったからだ。

「北方領土」と違って日本復帰が実現した小笠原だが、希望者が全員帰島できたわけではない。復帰後の居住は父島と母島に限られ、約 1000 人が居住していた硫黄島など他の島々へ戻ることは許されなかった。「北方領土」の元島民の多くが、戦後は故郷の島を望見できる根室一帯に暮らしながら、すでに 6 割が他界しているのと同じように、父島・母島まで戻りながらも、ついに故



郷の島にたどり着けなかった小笠原旧島民がいる。

さらに小笠原が「北方領土」と共通しているのは、戦争が原因で日本本土に放り出された人たちの中に、そのルーツが日本にない集団が含まれていたことだ。1884年に明治政府によって北千島から色丹島に強制移住させられた千島アイヌは、北海道のアイヌと異なり、カムチャツカ半島の先住民と交流し婚姻関係を持つ、「クリル人」とも呼ばれる先住民グループだった。北千島でロシアの影響下にあった彼らは、ロシア正教の信者で日本との接点は少なかった。敗戦期までには千島アイヌ独自のコミュニティーは崩壊し、同化が進んでいたとはいえ、彼らは本来のルーツである北千島から 1200 キロ離れた北海道に、二重の強制移住を体験したことになる。千島アイヌの直接の子孫である最後の一人は、1972年に根室で病没したことが確認されている³。

一方、小笠原で日本以外にルーツを持つ人たちは、「欧米系」と呼ばれて今も健在だ。南島クルーズに船を出して案内してくれたのも、父島で立ち寄ったバーのオーナーも欧米系だった。陽気で何の屈託もなさそうに見えたが、彼らの歴史はいろいろな影を帯びている。戦時下の小笠原や強制疎開中の日本本土で、彼らの容姿が目立ち、出自が問題にされ、迫害の対象になったであろうことは想像に難くない⁴。また敗戦後にかれら欧米系だけが先に帰島を許され、後に戻ってきた島民との間に軋轢が生じたことも知られている。

日本本土から 1000 キロ離れた小笠原や北千島に、日本人が来る以前に日本人以外のコミュニティーが形成されていたことには何の不思議もない。千島列島は、日本の周縁であると同時にロシアの周縁でもあった。広く太平洋に開かれていた小笠原は、気候の厳しい千島と違って賑やかな海の交通路になっており、そこに現れる人たちも多彩だった。小笠原も千島も、日本の辺境であると同時に、外の世界とのコンタクト・ゾーンだった。

辺境の島々のインターナショナルな賑わい

明確な領土意識、国境意識が生じる前は、太平洋に開放された小笠原には様々な来客があった。日本からの漂流船、欧米やロシアの世界周航船、そして捕鯨船の寄港地としても栄えた。小笠原の最初の定住者は、1830年に欧米やハワイから来た移民団だ。日本開国交渉に向かうアメリカのペリーが、1853年に父島に帰航して石炭補給所用の敷地を購入したことは、東京都小笠原支庁『管内概要』にも載っている。

ところで、父島は日露交流史にとっても重要な舞台になっている。対日交渉に向かうロシア艦隊4隻は、1853年8月に父島二見港で合流した。旗艦「パルラーダ」号で最後に入港したプチャーチン提督は、ここでロシア皇帝ニコライ一世からの追加訓令を受け取った。この訓令は日ロ領土問題にとっての重要文書だ。そこには、国境交渉においてロシアの南端は千島列島のウルップ島としてかまわない、つまり、現在日本が要求している択捉島以南は日本領と認めてよいと明記されている。1992年に日ロ外務省は合同で、領土交渉の土台となる『日露間領土問題の歴史に関する共同作成資料集』を発行した。そこに収められた35点の資料の中の 하나가、この訓令だ⁵。

プチャーチンは父島で新鮮な食料を手に入れようとしたが、ペリー艦隊が二ヶ月前に通過した



ばかりであったため、何も残っていなかったという。かれらは、江戸ではなく長崎に向けて出航した。江戸へ行くのに都合がよいから小笠原に集結したのだが、日本の法律を侵さずに長崎に行くことを命じたロシア外務省の追加訓令に従ったのだ。目的地を前にみな、心が浮き立っていたという。プチャーチンより先の19世紀初めにこの海域を通ったロシア海軍のゴロブニンによると、「ボニン島（小笠原諸島：筆者）から日本までは旅行ではなくて、散歩だ」⁶。プチャーチンのパラルーダ号は、サンクトペテルブルグ近くのクロンシュタットを出航し、大西洋を南下してアフリカ南端を迂回し、インド洋を通過して小笠原に到着するまで10ヶ月かかっている。一昼夜の船旅で音を上げる私たちとは大違いだ。

1876年に日本は小笠原を「回収」して領有を宣言し、前年の1875年には「樺太千島交換条約」で千島全島を日本領にした。琉球処分で沖縄も取り込んで、明治政府は領土意識を強めていくが、辺境の島々には、その後も多国籍の船が比較的自由に行き交っていたようだ。当時の小笠原に、さらに千島と関係の深い名前を見つけた。1873年から約20年間、千島海域でラッコやオットセイの密猟を続けたイギリス人のヘンリー・スノーだ。小笠原は、初めは捕鯨船、それが低迷してからはラッコやオットセイ猟船の拠点になっていた。スノーが国際的編成の密猟チームで長年にわたって千島で猟ができたのは、父島でラッコの射手や舵取りなどを揃えていたからだ⁷。

『幕末の小笠原』の著者である田中弘之は、「小さな島の歴史が意外な広がりと深さを持っていることを知って一層興味をかきたてられるようになった」という⁸。19世紀の小笠原は、歴史上の重要人物も海を生業とするアウトローも混在して、インターナショナルな賑わいを見せている。

過去と未来が混在する島

初めて訪ねた小笠原なのに、過去のことばかり書いてしまった。実は、滞在中に「南方領土」の影はほとんど感じられなかった。父島も母島も前年の世界自然遺産登録に沸いていたせいでろう。世界遺産を体験しようとする観光客の高揚感や、それを迎え入れる島の活気、登録を島の長期的な発展に結び付けようとする行政を初めとする組織的な意欲、当然ながら現在の小笠原は未来志向で、暗い過去に拘泥している様子はない。手にするガイドブックやパンフレットには「世界自然遺産登録」のアピールとともに、美しい海とその生態系、固有種が華やかに紹介されている。基地問題に揺れる沖縄や自衛隊配備で割れる与那国とは違う、底抜けの明るさがあった。日本の遠隔地域では少子高齢化と経済低迷で限界集落が増えているのに、小笠原の人口は微増、若い人が移り住んで、子ども人口が増えているという。

今回のメイン・イベントである境界地域研究ネットワーク JAPAN の「小笠原会議」では、小笠原、与那国、竹富、根室、札幌、福岡という日本の六つの地点からの報告があった。どれも東京を中心とする周縁に位置すると同時に、台湾、韓国、ロシアなどに近接し、自らの未来を日本の境界を越えた空間で考えている。小笠原の報告者から、外国船船員に急病人が出た場合の救急搬送を支援するケースが多いと聞き、かつてと同様に小笠原が国際的な海の交通路になっていると知った。太平洋に突き出た小笠原を基点に日本を眺めると、千島列島、日本本土、南西諸島が

弧を描きながら一つに連なっているのが、よく見えるような気がする。

島内では入念なスケジュールを組み、船中でもレクチャーやビデオ・写真上映会などを企画、実行して下さったみなさんをはじめ、貴重な体験ができた一週間の「合宿仲間」に心より感謝したい。

[参考文献]

- 1) 小笠原の三重の〈捨て石〉化については、次の論考に詳しい。石原俊「ディアスポラの島々と日本の『戦後』」岩下明裕編『日本の「国境問題」：現場から考える』別冊環 19、藤原書店、2012年。
- 2) 東京都小笠原支庁『管内概要』平成23年版、27頁。
- 3) 小坂洋右『流亡：日ロに追われた北千島アイヌ』北海道新聞社、1992年、246頁。
- 4) 小笠原の最初の定住者であるセイボレーの子孫やその他の「帰化人」のインタビューが次に紹介されている。南谷奉良「潮目のまなざし」岩下明裕編『日本の「国境問題』』338-340頁。石原俊『近代日本と小笠原諸島：移動民の島々と帝国』平凡社、2007年、361-381頁。
- 5) 木村汎『日露国境交渉史：領土問題にいかに関与するか』中公新書、1993年、47-48頁。附録として「日露間領土問題の歴史に関する日本国外務省とロシア連邦外務省の共同作成資料集」を掲載。
- 6) 和田春樹『開国一日露国境交渉』NHKブックス、1991年、90-91頁。
- 7) 石原、前掲書、289-290頁。
- 8) 田中弘之『幕末の小笠原：欧米の捕鯨船で栄えた緑の島』中公新書、1997年、266頁。



船上レクチャーの風景



小笠原初体験記

木村崇

北海道出身者にもかかわらず、奥尻はおろか利尻、礼文にも行ったことがない。なのに沖縄は、この数年間だけでも、本島に加えて石垣と与那国を2回ずつ、それに南大東を1回と、けっこう訪れている。気づいてみるとなぜか島嶼学会にまで加入していた。渡ったことのある日本の付属島嶼といえば、対馬しかない人間がである。

小笠原行きのお話をもちかけられて、ちょっと心がときめいた。1820年に南・北大東島を発見したボロジノ号のポナフィゼン艦長のことを調べて論文にまとめたとき、小笠原諸島もそのことと間接的ながら縁のある島だと知ったからである。両島をボロジノ諸島と名付け、アラスカ西南端の島にあった露米会社の本拠地を目指して北東に針路をとると、彼はさらにもう一つ新島を発見した。一時は世界の海図に「ポナフィゼン」島と記載されていたその島も現在は日本領となり、鳥島と改名されている。それは竹芝栈橋と父島の二見港を結ぶ航路から見える位置にあるはずだった。

そのうえ、世界の海図には南・北大東島がまだボロジノ諸島として記載されていた 1853年7月、ロシアの遣日使節プチャーチン一行の艦艇四隻が（うち二隻は露米会社の本拠地ノヴォ・アルハンゲリクから加わった）集結したのが、父島の二見港であった。プチャーチンたちはその後長崎に赴き、幕府の代表者たちと計5回にわたる困難な交渉を重ね、1854年2月はじめに川路聖謨らから前向きな回答が得られたため、いったん長崎を後にする。そしていよいよ条約調印のために戻ってくるまでの期間マニラに向かったプチャーチンは、僚船のヴォストーク号という唯一の汽走船に命じて、ボロジノ諸島の所在確認に向かわせた。発見から30年以上、ボロジノ諸島は未確認だったのである。ヴォストーク号の乗組員たちは海図に示されたのとほぼ同じ位置に見事ふたつの島を発見し、切り立つ珊瑚島の岸壁をよじ登り、命がけで上陸した。この時採集した「ボロジノニシキソウ」の標本は今日なお、ペテルブルグの植物園にある植物学研究所にきちんと保管されている。この時日本開国交渉の先陣争いをしてきたアメリカのペリーの艦隊も小笠原から那覇港に向かう途中、わざわざボロジノ諸島へ接近して緯度・経度を測量している。この二人の行動を記憶していたので、そうか私も一度は小笠原に行ってみなければならぬ、と思ったわけである。

私には小笠原についての予備知識がまるでなかった。事前準備が付け焼き刃になる癖は小学校時代から変わっていない。出港を翌日に控えた2月11日の夜、さいわい貴重なレクチャーを聴く（より正しくは「傍聴する」）機会を得た。毎日新聞の本間記者から、『幕末の小笠原』（中公新書）の著者である田中弘之さんにインタビューするから同席しないかと、妻の黒岩ともども誘われたのである。大学ノートに克明に記録したメモを見ながら質問する本間さんにたいして、田中さんが訥々とした口調（達意の文章が書ける人によくみられる特徴）で説明するのを聞きながら、幕



末の日本の姿が次第に見えてきたような気がした。徳川幕府はなぜ鎖国政策をとったかという話題に移ったとき、私の目からウロコが一枚落ちた。これまで持ち合わせていた鎖国についての我流の「理解」がひっくり返されたのである。まさに「はたと膝を打つ」心境であった。

冬期にしてはめずらしいくらい、父島丸のこの日の船路はおだやかだという。いつもはかなり荒れるのだそう。八丈島沖にさしかかって黒潮を横切ってゆくころからはっきりとした揺れを、船室に横たえた身全体で感じるようになり、むしろ心地よさを覚えていた。ところが、島嶼問題の「生き字引」である山上さんから、鳥島付近の通過は行きも帰りも真夜中なので、目視は不可能だということを告げられた。日没直前か未明の出会いを期待していたのだったが。発見した島が特徴ある形をしていたため、ポナフィジン艦長が「三つの丘の島」と名付けた島は火山島で（「ポナフィジン島」と勝手に変更したのは著名な航海士クルゼンシュテルンである）、その後起こった噴火ですっかり形状を変えたともいわれた。これでは私の旅の目的の半分が失われたも同然だった。

二見港に入港してみると、昔の人たちが描いて残したスケッチや絵とはどこか違っているような気がしてならなかった。私はもっと詩情あふれた光景をイメージしていた。下船して市街地のたたずまいを目にしたとき、それは豊かな自然遺産を守ろうとする誠意と、観光資源をできるだけ活用したいという欲望とが、中途半端な形で共存しているからではないかという確信に変わった。

私と妻は父島でふたつ、母島でひとつの民宿に寝泊まりした。どの民宿でも個室の鍵は渡されなかった。小学生の頃、覚えてたの自転車をこいで遠い田舎の親戚に遊びに行ったことがあった。到着すると私は自転車を鍵を掛け、玄関口で来訪を告げた。農作業をしていたずっと年上の従兄が、その施錠のさまを目撃していたらしく、夕食を囲んだ大勢の家族に向かって皮肉たっぷりに暴いてみせた。一同は笑いこけたが、私は嘲笑される理由がすぐには分からなかった。以来、町の人間と田舎の人間には基本的な違いがあることを知った。小笠原で一番の町らしい場所に、まさしくこのような「自然遺産」が受け継がれているのを知って、すなおに感動した。しかし、食事のたびに残念な体験もせざるをえなかった。出されるものがすべて調理の基本からずれていて、わざとマズくしているとしか思えなかった。もしかしたらそれは小笠原の「伝統の味」なのかも知れない。しかし、この地に渡ってきた人たちの歴史を思い返すと、「伝統以前」の段階にあるといた方が正しいだろう。そのレベルの味覚の人たちが観光客向けの「サービス」を意識したとき、こういう「味」に落ち着いたのではないだろうか。村役場の方々の運転で公用マイクロバスで島巡りをしたとき、かなり奥まったところに建てられた真新しい民宿があった。なんでこんな不便なところかと思っただけで、「料理の味が評判です」と説明されて納得した。

母島では学校とプチトマトがすばらしかった。小学校と中学がひとつになっているのはロシアあたりまで（都会なら高校も一緒である）驚きはしなかった。私はかねてから日本の学校建築の画一性、没個性性が気になっていた。裕福な地域住民の寄付によって建てられた明治期の学校には、建築としての美しさも備えたものが各地にあった。文部省が初等・中等の公教育を全面的



に仕切り始めてからおかしくなったのである。母島の学校を案内して下さった先生も、勉強中の児童や生徒たちも、個性あふれる明るい校舎を誇りに思い、満足している様子が見て取れた。やる気になればこういうことも出来るのかと、あらためて感心した。

島の住民に若い人たちが増えつつあるのは、農業や漁業でりっぱに生計が維持できるかららしい。専門のスキルを身につけさせるためのハード面もソフト面も充実しているようだった。家族労働によるプチトマト栽培だけで年間700万円の売り上げが見込まれるというのだから、諸経費をさっ引いても十分生活でいることは確かだ。小笠原の気候でなければあの濃密な味は出ないし、島全体での収穫量には限りがあるから、買ったたかれたり、売れ残ったりする心配はないとのことだった。

今度の震災でとてつもない被害をうけた三陸海岸の光景がふと思い出された。被害のすさまじさもさりながら、避難所に集まった群衆を見て、これほどまで高齢化が進んでいる地域だったのだと、心底実感したものだ。被災地はいずこも、これまで若者たちは外に出て行くばかりであった。これが経済発展の論理を忠実のたどり続けて来た戦後日本の、なるべくして行き着いた先であったということである。どこでも聞かれる「地域の活性化」というスローガンは、国家経済中枢の発展を前提とする限り、夢のまた夢でしかない。だから、小笠原の農業や漁業の若い担い手を見て、狐につままれたような気がした。

自然遺産を保護するための地元でのさまざまな努力や工夫、JIBSN 地方自治体メンバーの一段と質の上がったプレゼンテーションなどについては、きっと他の参加者が触れると思うので、このレポートでは割愛させていただく。どうしても書いておきたい点がある。一つは父島の「ビジターセンター」で見た島の歴史の解説についてである。まず評価したいのは、文字とヴィジュアルな手段を豊富に使ってコンパクトな空間にわかりやすく情報を集約している点である。しかし気になった点もあった。私のようにロシアを専門とする者の目には、これはいかにも欧米偏重ではないかという印象が残ったのである。プチャーチンが訪れたことなどは、ほんのおまけ程度にしか触れられていなかった。わたしたち日本人の多くは、日米関係の軸でしか幕末から今日までの歴史を振り返ろうとしない悪い癖をつけられている。しかし当時の徳川幕府の世界認識ではアメリカよりもロシアの方が、はるかに存在感が大きかったのである。ロシアこそは、「差し迫る脅威」の元凶として映っていたのだからだ。戦後長らくアメリカに占領されていた記憶を強烈にお持ちの小笠原の人たちにこういうのは酷かもしれないが、もう少し「脱アメリカ化」された歴史観に切り替えていただきたいと思った。

二つ目は、「排他的経済水域」との絡みで、もっぱらその側面でのみ、小笠原諸島や境界域の他の島々のことを論じるのには、やはり抵抗を禁じ得ないという気持ちを新たにしたということである。最近東京都知事が尖閣列島購入に言及したというニュースを聞いて、本当にイヤになった。あの人の「領土感」にはどこかさもしいところがある。他者の存在を排斥し、自己の利益だけを独占するための場所としてではなく、自然遺産になったサンクチュアリに生息する鳥たちや魚たちのように、うまく共存していくための場所としての島とその海域だというように考えられない

ものだろうか。日本という国家が各地の離島に結構な金を注ぎ込んでくれるのは、「排他的経済水域」確保のためだろうが、わたしはそういう欲望とは無縁でいたい。小笠原に来てつくづくそう思った。





2012年における海洋政策：小笠原会議で考えたこと

川久保文紀

2011年に設立された「境界研究ネットワーク JAPAN」の研究活動の一環として開催された小笠原会議に参加する機会を得た。東京・竹芝桟橋から2代目おがさわら丸で約25時間半。東京都小笠原村を基点として、日本の排他的経済水域（EEZ）の約3分の1を管轄におさめる小笠原海域の広大さを体感する船旅となった。歴史的に日本がさまざまな領土問題を近隣諸国と抱え、領土問題解決への模索が歴代政権の政治・外交の基軸のひとつになってきたことは言うまでもない。日本の面積は世界で61番目であるが、領海を含む排他的経済水域は世界で6番目の広さを持ち、この海域の国家的管理、およびその海域に点在する離島・島嶼群の保全・管理が、日本の領土問題や海洋安全保障にとって死活的に重要であるということも改めて認識することができた。

2007年になってようやく「海の憲法」ともいえる「海洋基本法」が制定・施行され、それに基づいて、翌年には「海洋基本計画」が定められ、海洋に関する総合的施策の基本的枠組みが整ったことになる。「海洋基本計画」では、第1部の「基本的な方針」では、「海洋の安全確保」や「海洋の総合的管理」などが挙げられ、海洋安全保障上の離島の位置づけについて述べられている。第2部では、「政府が総合的かつ計画的に講ずべき施策」では、離島の保全・管理に関する基本的な方針に加え、自主性を尊重した産業振興などによる離島の振興が明記されている。

小笠原会議では、各境界自治体からのさまざまな問題提起が行われたが、海洋の総合的管理と国境・離島政策を一元的に推進していくにあたって、中央政府の統治システムにおける組織的弊害がみえてきた。国境・離島政策を含めた海洋政策の「司令塔」となるべき総合海洋政策本部（本部長：内閣総理大臣）は内閣官房に設置されたが、離島問題の管轄は国土交通省、境界自治体対策は総務省、海洋資源の調査研究は文部科学省などのように、中央省庁の縦割りのような仕組みでは、国境・離島政策の一元的推進にはおのずと限界が生じるであろう。また、有識者などによる参与会議も設置されているが、どのような機能を果たしているのかが見えていない。中央省庁の縦割りのような仕組みを脱するためには、総合海洋政策本部の実質的な機能強化と、それを補佐する参与会議との組織的連携が求められる。また、総合海洋政策本部の第1回会合は安倍内閣のときの2007年7月に開催されたが、この5年間で8回しか開かれておらず（本稿執筆時点）、昨年度にいたってはたったの2回、しかも閣議前の15分程度を使った「形式的な」会合が続いている。離島の保全・管理についても、政権交代後の鳩山内閣になって初めて「海洋管理のための離島の保全・管理のあり方に関する基本方針」が策定されたが、具体的な施策の実施や国民に対するアウトリーチ活動に関しては、まだ緒についたばかりである。

2012年は、国境・離島政策を含む日本の海洋政策の推進にとって重要な年になることが予想される。第一に、今年は「海洋基本計画」の見直しを迎える。海洋基本法フォローアップ研究会などでも、「海洋基本法」の具体的な実施のあり方をめぐって議論が続けられてきたようであるが、

これまでの実施状況を精査した上で、「海洋基本法」とその関連法は基本的な方針だけを示すばかりではなく、個々の政策事案に対して具体的にアプローチする法体系に整備していくことが急務であろう。第二に、本年5月下旬には、第6回目となる「日本・太平洋諸島フォーラム首脳会議（太平洋・島サミット）」（共同議長：日本およびクック諸島）が沖縄県名護市で開催される。これは、日本と太平洋地域の島嶼国家との緊密な協力関係を結ぶことを目的として、1997年より3年に一度開催されている首脳会議であり、海洋国家としての日本は、同時に島嶼国家でもあるという位置づけを内外にアピールするためにも重要な会議である。この会議を儀礼的なもので終わらせないためにも、太平洋地域の島嶼国家と、多数の離島から形成される島嶼国家としての日本が、政府ばかりではなく、境界自治体が「自治体外交」の展開という形で参加・発言し、島嶼国家が抱える様々な問題点を討議するような機会になれば有意義であろう。（2012年4月25日脱稿）



母島での経験交流集会



一週間分の新聞まとめ売り（前田商店）



[特別寄稿]

小笠原は美しい

小林邦弘

はじめに

「小笠原へ行って来ます」。うちのアパートの店子である毎日新聞の本間浩昭氏が夕餉を囲む席で、そう言った。「行きたあああい」。妻の有子が、目を輝かせて僕に視線を投げかけ、賛同を求めた。

常夏の楽園と言われる小笠原。実のところ、僕も一度は行ってみたいと思っていた島だった。「ご一緒できますヨ」。本間氏は笑顔でそう答えた。物事のきっかけは不思議なもので、あっという間に僕ら夫婦と近くに住む中村恵美子さんの小笠原行きが決まった。

「問題は、宿が取れるかどうか。小笠原は昨年、世界自然遺産に登録されて冬でも観光客が押し寄せているので……」と本間氏は言った。なにしろ出発まで10日を割っていた。旅行会社も「個室はまず無理」だと言う。有子は観光協会などに電話をかけまくり、宿に直接電話して予約を取ることを勧められた。母島は「ちょうどいまキャンセルがあって空きました」とすぐに部屋が取れ、父島も2軒目の電話で宿が取れた。やってみるものである。

それにしても僕は小笠原について予備知識がなかった。本土から1000キロメートルの離島であり、東京都の村であるという程度の認識しかなかった。パンフレットを見ると人口2700人というので、ちょっとしたオドロキであった。

僕は日曜画家なので、色彩にはこだわっても良いと思っている。小笠原は亜熱帯だから、色彩は南国色なのだろう。小笠原のカラーイメージが、なぜだか手付かずの絵の具のようでワクワクさせてくれるのである。譬えて言えば、何も描かれていない白いキャンバスのように思えてくる。

そうした視点では、ハワイ諸島など目ではない。小笠原は「無垢」を感じさせてくれる。どのような彩りが現れるのか、期待に心をワクワクさせながら、一方で、「もしかしたらそこにパラダイスがあるのではないか」と夢見たりした。パラダイスとは楽園のことだろう。そこにはお釈迦様だけが密かに隠れ持っていた別荘があるかもしれない。

なぜなら、それに応えるに十分な「美しい」水辺の風景や、印象派の色彩があったりして、それだけで僕はときめきを覚えた。われながら困ったものだと苦笑しているのも、総じてこの島のイメージが、天国に近い風景があるからなのだろう。

なにしろ本土から1000キロも離れている。これまで人生を先立つ先輩に対して、「向こう岸では良い席を確保しておいてくれ」と言っていたことが、にわかには甦って苦笑いしてしまった。小笠原にはそれがあるかもしれない。

油彩画には「美の神」がいて、全ての彩りを司っているから、絵筆を進める上で、信じるか信じないかで美しさが違ってくる。まあいいか。

出港

「おがさわら丸」(3500トン)に乗船する。東京・竹芝桟橋から出港して父島に接岸・上陸するまでに要する時間は約26時間である。ふるさと羅臼～国後～根室で船に乗る体験がなかったわけでもないが、小笠原行きのフェリーに乗って、「ああ、日本は海洋国だったのだ」と再認識させられた。

東京～小笠原間の距離が1000キロであれば、小笠原～サハリンは1200キロである(父島の民宿「ウエスト」の標柱)。

しかし、この距離感が問題なのだ。どうして今の今まで日本という国の全体図のイメージが僕の頭にわいて来なかったのだろう。

それは、TVの天気予報のせいではないかと思いついた。天気予報は、まずは全く修正の加えられていない日本全図を1秒か2秒放映すべきだと思う。それからおもむろにクローズアップした地図を天気図にはめ込んで行くべきなのだ。そうすれば、広さや距離感は、国民の誰もが自然と目で記憶できるようになると思う。

かつては北方領土さえ余白に線で区切られ、申し訳程度に表現されていた。いまは少なくとも北海道向けの放送では択捉島まで一枚の地図に収められた天気図になっている。これを日本全図で最初の1、2秒だけでいいから放映してもらいたいものだ。

NHKさんお願いしますよ。

返還された島と未だ「解放」されぬ島

小笠原諸島は昭和43年(1968)年に、そして沖縄は昭和47(1972)年に米軍から日本に返還された。本来は国連の信託統治領のはずだが、米国が占領していた。

さて北方領土である。平成3(1991)年のソ連は、エリツィン大統領の8月クーデターとソ連邦崩壊で大変革を遂げるが、こうした時期に日ソの領土問題を解決しておくべきだったと思う。東欧諸国が次々と独立して行くのを日本外務省が黙して静観していたのは、日本国民として実に悔しい。



美しい小笠原の海岸線(父島)



木村・黒岩夫妻と僕



この時代、根室港から見える国後島の国境警備艇がほとんど動かなかったことがある。ソ連の国境警備隊からロシアの国境警備隊に引き継がれるまでの1年余り。日本漁船が国後島の前浜あたりまで入り込んでも、警備艇は出動しようとしなかった。燃料がなかったのである。

日本側の情報分析は当時、どうなっていたのだろうか。東欧諸国が独立宣言しているのに、日本だけが外交分析に問題があったのではないか。外交は国益最優先にして何も恥ずべきものではないと思う。マスコミも国益に対する意識が希薄といおうか、反省記事すらない。実に惜しむべき機会を逃してしまったと僕は思う。東欧諸国が次々と独立し、それを日本の新聞TVが報道していたにもかかわらず、北方領土論は出てくることはなかった。

そもそも米国は、日本が北方領土の返還運動をしていることに賛成なのか、反対なのか。ソ連邦崩壊の少し前、米国のレーガン大統領が「私が日本とソ連の仲立ちをして領土問題を前進させましょうか」と持ちかけたとき、日本政府は「いいえ、日ソ2国間の問題ですから……」と拒否した、という記事を読んだ記憶がある。1991年という極めて大きな時代の転換期に、日本政府も外務省も足が止まっていた。その後はウンともスンともない。

ソ連邦崩壊から1年半以上の歳月が過ぎ、国後島の国境警備隊はエリツィン大統領の指揮下に入り、それこそ元気を取り戻したかのようにパトロールが始まった。そればかりではない。彼らは日本漁船めがけて実弾を撃ってくるようになったのである（ソ連時代はゴム弾だった）。

その後もロシアは、「ああだ」「こうだ」と言って、日本から奪った領土を未だに「解放」していない。僕はこう考えるようになった。仮にクレムリンが「解放」を決意しても、軍隊が異なる思考をしているから領土返還ができないでいるのではないかと。

小笠原と領土の確認

小笠原諸島が日本の領土であり得たのは、漂流船が偶然見つけたこの無人島に対してすぐに探検を命じた幕府があり、測量や海図の作成をはじめ、領有の事実を現地に記すなど、幕命を忠実に実行に移した幕臣がいたからである。

延宝3(1675)年、幕府はこの無人島に対して探索隊を組織する。島谷市左衛門が外洋船で調査し、父島・宮之浜に祠を造り、「此島大日本之内也」と記した。31日間滞在して諸島を測量し、位置や地勢などを報告した。島谷が小笠原にたどり着くまで20日以上の日数がかかったという。

北方領土の調査は、それから123年後のことになる。寛政12(1798)年、幕府は北方の警備の必要性を唱えた近藤重蔵を登用し、蝦夷地、樺太千島を探検させたという。そしてあの「大日本恵土呂府」の標木を択捉島最北端に建立したのである。

南島の諸事情

南島は父島の南側に位置しているので、その名が付いた。いまでも無人島である。何しろ奇跡の島であることには違いない。南島は比較的外来種に侵されていないらしいが、やたらに入域が厳しい。



青く透き通る南島の静かな入江



この急斜面の崖は僕にはとても登れない

しかし、である。僕は脊柱管狭窄症を患ったことがあり、歩行が困難な高齢者である。南島は、とてもピクニック気分で動けるような場所ではなかった。僕は南島に上陸してから身の危険を感じ、散策を辞退した。

「そういうわけにはまいりません」と案内人が言う。「あなた一人をここに置いて行くわけにはいきません」と。「規定によって、ご一緒に同行願わねばなりません」と言うのである。

彼は南島を案内する際の「規則」を説明したのであろう。しかし、斜面のきつい崖を登ることは、僕にはとてもできることとは思えなかった。「自分の命を自分で守る権利はあるはずだ」。案内人に強く申し入れた。

南島には、案内人および監視員の同行なしのダイバーが、岩場から上陸して休憩を取っていた。

「あのダイバーたちは許可なくこの南島に上陸して良いのか」。

「……」。

案内人は押し黙った。

「本来なら遊歩道を作ってから案内すべきだと思うのだが、石原知事なら、そのように考えるに違いない」

「石原知事は遊歩道などは要らないと申しております」。案内人はそう言う。実にかわいげのないやつだ。彼はダイバーに対して監視員の「資格証明カード」まで提示して上陸が制限されている旨の説明を始めた。

そこで僕は、機転をきかせて話題を外来種問題に切り替えることにした。

案内人は急に人が変わったかのように明るくなって外来種の説明を始め、登山は免除となった。それにしても小笠原は奇跡の島だ。種の変異についても、島ごとに花びらの数が違うという。生物学者にとっては種の実験室のような環境を作り出しているという。

根室ではアイヌのメナシ時代であっても、花びらの数が違うなどということは考えられない。植物も野生動物も同じである。あとは環境による順応性の問題だけだろう。

一行が南島の登山をしている間、地元の自然ガイド・延島冬生さんがいろいろな話をして下さ



った。小笠原のノヤギは幕末西洋人が持ち込んだものらしいが、父島では増えすぎて始末に困っているらしい。外来生物の数も多いし、それらは大きく根を張り、繁茂している。順序よく説明を聞いているうちに、事前に勉強していれば、無垢な南島など行かなければよかったと反省した。

小笠原にうまいものなし

小高い丘に登って父島沿岸の美しい島影を見る。そして限りなく彩度の高い透明のブルー。空もまた一段と明るいブルー。

空も海も濁りを知らない、少し考えてみれば分かることだが、プランクトンが乏しいからいかにも「純潔そうに見える」わけだ。これじゃ魚が住める環境とは言えない。それは食にそっくり反映していた。民宿の朝食でメアジというとても美味しい焼き魚をいただいたが、美味しかった記憶といえば、それぐらいのものだった。

それでも寿司屋があるというので、入ってみることにした。ところが何を注文して良いかのかが分からなかった。北海道の東の外れの根室から来た僕たちには、南の海の魚は、種類さえ分からない。僕は江戸前の生きの良いマグロが食べたかった。ところが壁に貼ってあるお品書きには、島寿司とアオウミガメしかなかった。船の中で石垣島の島寿司をいただいたこともあり、それなら小笠原の島寿司はどんなものか、と注文した。もちろんビールのオーダーも忘れなかった。

「小笠原も東京の沖だから江戸前だね」。僕はジョークでそう言った。ところが出て来た寿司は、1種類だけだった。たった一つの寿司ネタをそうたくさん食べられるものではない。ボケと突っ込みを自ら演じ、もう一人の僕が「嘘つけ、小笠原で江戸前が食えるはずがない」と言った。

「まあまあ、そう言わずに、名物のカメの握りはいかがですか？」

寿司屋の亭主が割って入った。

「亭主、それにしてくれ」。

そしてアオウミガメの握り寿司が出て来た。

民宿「ウエスト物語」

小笠原にはホテルがない。大半は民宿で、当然のことながらベッドルームがほとんどない。しかし、父島の民宿ウエストには1室だけあったので助かった。

足の不自由な僕には、ベッドが救いの神なのである。これで安心して眠ることができる。女将の女性は、私たち夫婦と同世代かもしれないが、利発で明るい笑顔も実に感じが良かった。2泊3日お世話になった。女将のご主人は若くして脱サラして父島に民宿を始めたという。

しかしご主人は数年前に癌を患い、先立ってしまう。いまじゃ子供二人も東京で結婚、夏休みには孫を連れて帰省し、繁忙期の民宿を手伝ってくれるというのが、惜しいことに跡を継ぐ者はいない。

一人で客を迎える日々。「寂しいですね」ともらした。



イソヒヨドリ（父島）



二見湾を望む丘で有子、中村恵美子さん、僕（右から）

おがさわら丸

この連絡船は、左にやや傾いて航行していた。いまだきの船舶はバラストを取るのに、傾いて航行しても、そう心配することはないはずだ。ところが、部屋で横になっていると、頭の方が低くなったまま航行しているので、血液が頭の方に昇ってしまい、どうもあんばいが悪い。

「波が高いのでしょう」。木村崇さんがそうアドバイスして下さったが、波があるのに傾いて航行するという客船など珍しいというほかない。バラストが作動していないのだろうか。船長の顔が見たいものと思った。一緒に参加した中村恵美子さんには、頭の向きを変えるよう提案し、この件は矛を収めたつもりだったが、実に不思議な船で、気になって仕方がなかった。

父島の青い鳥

童話のチルチルとミチルは、青い鳥を探し求める。それで幸せを呼ぶことができるのだろうか。父島には深く青い色の小さな鳩のような鳥がいて、歩道をノコノコと歩いていた。この鳥は小賢しく逃げたり、餌をねだったりはしなかった。

そもそも小笠原の野鳥に共通して感じるのは、人間を天敵とは思っていないらしいということだ。表通りの歩道で、パンくずを食べたりしている野鳥も見かけたが、共通してその動作がおおらかだと見てとった。

振り返れば十年ほど前、サイパンの南にある北マリアナ諸島のロタ島でも野鳥観察の醍醐味を味わった。海岸線の切り立った崖は200メートルもあったろうか。そこにはペリカンの仲間のオオグンカンドリが飛び交い、花鳥風月画に出て来そうな赤い尾羽が長く伸びたアカオネッタイチョウが優雅に舞っていた。同行して下さった高田勝先生の解説もうわの空で、「ここは極楽に近いのではないか」と直感したものである。コンビニのパンをかじっての3日間、僕らはこの極楽の野鳥ばかりを観察していた。

今回訪れた父島では、道路わきにツグミの仲間のイソヒヨドリが止まっていた。頭から背にかけて灰青色で、腹部が赤、翼が黒色という、いかにも南国らしい色調の鳥であった。写真に収め

ることはできなかったが、小笠原で唯一の猛禽類・オガサワラノスリも見ることができた。小笠原の固有種で、国の天然記念物にも指定されている。生息数は70つがい前後だという。色は地味だが、眼光鋭く、いかにも精悍そうに見えた。

不思議なことに、鳥は待っていると近寄って来る。僕は足が悪いこともあって、追いかけて観察するようなことはとてもできない。そんな「待っているだけ」の初心者バードウォッチャーにも父島の鳥はやさしかった。パラダイスである。



小笠原で描いたスケッチ



生態を守るボーダー



お見送り



ドボン



村長対談・総括会議



新たな旅立ち？

*本レポートは、北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」及び笹川平和財団助成プロジェクト「境界地域研究ネットワーク JAPAN の設立」の成果の一部である。

JIBSN レポート No. 1

「小笠原で考える日本の境界」

編集者：岩下明裕
協力：古川浩司 合田由美子
発行日：2012年6月5日
発行者：外間守吉
発行所：JIBSN 事務局（北海道大学スラブ研究センター内）
〒060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel. 011-706-2382 Fax. 011-706-4952
<http://src-hokudai-ac.jp/jibsn/>